HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光と図書館の融合の可能性についての考察
Author(s)	松本, 秀人
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(観光学)
Issue Date	2010-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43017
Type	master thesis
File Information	matsumoto.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2009 年度修士論文

観光と図書館の融合の可能性についての考察

Discussion on the possibility of the fusion of tourism and libraries

2010 年 3 月

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
観光創造専攻修士課程 2 年

松本秀人
MATSUMOTO Hideto

要　約

本研究の目的は、日本の観光および日本の公共図書館を対象として、観光と図書館の融合の可能性について様々な角度から考察を行うことにより、こんにちの観光および図書館がそれぞれ持っている課題の解決に、観光と図書館の融合がはたす役割を示すことにある。そしてこれにより、観光や図書館の関係者をはじめ、地域住民や行政機関などに、観光の創出、図書館運営のあり方、まちづくりの実践活動について、新たな手がかりを提供する。

全体の概略は、まず観光の課題と図書館の課題を述べ、この解決にあたって「両者の融合が双方の課題解決に役立つ可能性がある」という仮説を立て、予備的な考察をふまえた上で、観光と図書館の融合の可能性を具体的に考察し、さらに観光者と地域とを結ぶコミュニケーションの媒介役として図書館をとらえた「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を試案として提示する、という構成とした。

こんにちの日本の観光における主な課題として、①地域主導による観光振興、②観光の多様化・高度化への対応、の2点をあげることができる。本研究では、これらの課題を解決するために公共図書館に着目した。なぜなら、公共図書館は地域によって運営され、地域の情報拠点であり、多様な資料を所蔵している、などの特徴を持っており、これが前述した課題に対応しうる可能性を持っていると考えられるからである。

一方、日本の公共図書館も様々な課題を持っており、主な課題として、①新たなサービスをどう展開するか、②地域にどのように貢献するか、の2点をあげることができる。そこで、「新たなサービス＝観光者へのサービス」、「地域貢献＝地域情報の発信や観光振興を通して地域に貢献」という発想を導入してみると、図書館の課題に対して、観光を意識した活動を図書館が行うことが対応策のひとつとして考えられるのである。

このように、観光の側からも図書館の側からも互いに着目する理由があるように考えられることから、「観光と図書館が融合することによって、双方にメリットがもたらされるのではないか」という仮説を立て、この仮説をもとに考察を進めた。本研究における「融合」という表現は、簡単にいうと、観光と図書館が様々な点で連携し合うこと、直接的あるいは間接的に利活用することなどを意味しているが、特に「融合」という表現を用いた理由は、「融合によって新たな価値がもたらされる」という点に注目したからである。

次に、観光と図書館の融合について具体的な考察を進める前に、図書館の特性からみた観光との関連性、観光と図書館の社会対応にみられる類似性の2点について予備的な考察を行った。

まず「図書館の特性」については、①社会的な記憶装置としての図書館、②地域文化の可視化装置としての図書館、③情報の濾過装置としての図書館、という観点から説明を行い、図書館の特性が地域文化や観光と関連があることを示した。また「観光と図書館の社会対応にみられる類似性」については、①（訪日・在日）外国人への対応、②滞在志向への対応、③専門性重視への対応、④学習重視への対応、という点をあげて、両者の類似性を述べ、ここにも両者に関連性があることを示した。

これらの準備的考察をふまえたうえで、図書館の諸要素からみた観光との融合の可能性について、事例をあげつつ具体的な考察を行い、またそれらの整理と分類を試みた。考察にあたっては、図書館の側に視点を置き、図書館の基本的な要素（「資料」「サービス」「施設）について考察し、次に「図書館と地域社会」に関する要素について考察し、さらに「インターネット社会との関連」について考察し、これらに分類しにくいものを「その他」としてまとめた。それぞれの項目では、まず要素について説明を行い、参考となる事例を紹介し、その上で融合の可能性について分析を行った。この考察によって、観光と図書館が様々な点で融合する可能性があることを具体的に示すとともに、様々な要素を分類して列挙することで、今後の研究のためのチェックリストとなるよう配慮した。

さらに、具体的な考察の中でみられる観光者と図書館のコミュニケーションの部分に注目し、図書館を媒介役とする「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を試案として提示した。このモデルを提示することにより、観光と図書館の融合において、図書館が観光者と地域とのコミュニケーションの媒介役として機能しうる点を強調した。

最後にまとめとして、観光と図書館の融合によってもたらされる「新たな価値」について述べた。すなわち、図書館にとっては「新たな利用者の出現」をもたらし、観光にとっては「図書館も観光資源である」という認識をもたらし、地域住民にとっては「“まちづくり”という営為の記録を次世代に残す仕組み」として図書館をとらえる認識をもたらす。このように観光と図書館の融合は、これまでになかった価値が創出される可能性を持っており、さらに総体的にみれば、観光と図書館の融合によって観光創造に貢献する可能性もあると考えられる。

目　　次

第1章　はじめに ……1
1　研究の目的 ……1
2　研究の背景と分析の枠組み ……1
3　研究の対象と方法 ……3
4　論文の構成 ……4
第2章　観光および図書館の現状と課題 ……6
1　観光の現状と課題 ……6
1-1　日本の観光の変遷 ……6
1-2　こんにちの観光の課題 ……7
(1) 地域主導による観光振興 ……7
(2) 観光の多様化・高度化への対応 ……8
1-3　観光の課題を解決する候補としての公共図書館 ……9
2　図書館の現状と課題 ……9
2-1　日本の図書館の変遷 ……9
2-2　こんにちの図書館の課題 ……15
(1) 新たなサービスの展開 ……15
(2) 地域貢献のあり方 ……16
2-3　図書館の課題を解決する候補としての観光 ……16
3　両者の関連性に関する準備的考察 ……17
3-1　図書館の特性からみた観光との関連性 ……17
(1) 社会的な記憶装置としての図書館 ……17
(2) 地域文化の可視化装置としての図書館 ……18
(3) 情報の濾過装置としての図書館 ……19
3-2　社会対応にみられる観光と図書館の類似性 ……19
(1) (訪日・在日)外国人への対応 ……20
(2) 滞在志向への対応 ……20
(3) 専門性重視への対応 ……21
(4) 学習重視への対応 ……21

3-3　本節のまとめ ……22
第3章　融合の可能性についての具体的考察 ……26
1　本章の説明 ……26
1-1　概要 ……26
1-2　分類方針について ……26
1-3　参考事例について ……27
2　分類別にみた各項目の説明と分析 ……29
(A) 図書館の基本的な要素との関連 ……29
(A-1) 資料 ……29
(A-1-1) 地域資料 ……30
(A-1-2) 地域テーマに沿った蔵書 ……33
(A-1-3) コレクション・文庫 ……35
(A-1-4) 資料全体との関連 ……37
(A-2) サービス ……39
(A-2-1) レファレンスサービス ……39
(A-2-2) イベント・行事 ……41
(A-2-3) 様々なサービスとの関連 ……43
(A-3) 施設 ……46
(A-3-1) 設計やデザインの効果 ……46
(A-3-2) 複合施設の効果 ……47
(B) 地域社会との関連 ……49
(B-1) まちづくりとの連携 ……49
(B-2) 様々な連携 ……51
(B-3) 交流の場としての図書館 ……53
(C) インターネットの発達との関連 ……56
(C-1) デジタル・アーカイブズによる情報提供 ……57
(C-2) 情報発信の多様化 ……59
(C-3) ネットコミュニティの影響 ……61
(D) その他 ……62
(D-1) 図書館への視察・見学 ……62

(D-2) 図書館とツアー ……64
3　観光に関連した取り組みを行っている図書館の事例 ……66
3-1　説明 ……66
3-2　各館の状況 ……66
3-3　アンケートの回答および分析 ……68
3-4　全体的なコメント ……70
4　本章のまとめ ……71
4-1　まとめおよびメリット等についての考察 ……71
4-2　効果からみた考察 ……72
第4章　図書館を媒介役とする「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」試案 ……78
1　モデルの構築にあたって ……78
2　モデルの説明 ……79
3　モデルの意義と活用 ……81
4　モデルの留意点 ……84
第5章　まとめ ……87
1　本研究によって示されたこと ……87
2　融合によってもたらされる「新たな価値」について ……88
3　融合にあたって留意すべき点について ……89
4　今後の課題について ……89
【参考文献】 ……90

第1章　はじめに

1　研究の目的

本研究は、観光と図書館の融合の可能性について、様々な角度から考察を行うことによって、こんにちの観光および図書館がそれぞれ持っている課題の解決に、観光と図書館の融合がはたす役割を示すことを目的とした。そしてこれにより、観光や図書館の関係者をはじめ、地域住民や行政機関などに、観光の創出、図書館運営のあり方、まちづくりの実践活動について、新たな手がかりを提供する。

また、観光と図書館の融合を具体的に考察した結果をふまえて、図書館が、観光者と地域とを結ぶコミュニケーションの媒介役として機能しうることを示し、これについて「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を試案として提示した。

さらに、観光と図書館の融合によって、観光、図書館、地域それぞれに新たな価値がもたらされることも示した。

2　研究の背景と分析の枠組み

戦後しばらくの間主流であった「団体旅行型観光」や「物見遊山型観光」は、日本人の価値観の多様化や家族構成の変化などの要因によって行き詰まりをみせている。しかし、地域間格差の拡大や一次産業の衰退など、地方にとって厳しい状況が続いているため、これまでによくみられた「地域外から観光だけを目的として資本を投入する」という手法では、効果的あるいは持続的な観光振興が成り立たなくなってきている。

こうした状況のなかで、新たな観光のあり方が求められており、こんにちの観光の主な課題として、①地域主導による観光振興、②観光の多様化・高度化への対応、の2点をあげることができる。これらの課題に対しては様々な試みがなされているが、「着地型観光」の発想など、地域が観光サービスを主体的に創出しようという動きがみられることが特徴のひとつとしてあげられる。観光は地域住民以外にサービスを提供する行為であるが、地域でサービスが消費されるという点において、地域自身の問題として考えられるようになってきたといえる。

このように、これまで国や地域外に解決を委ねてきた課題に対して、「地域によって、地域という場所で解決されるべきである」という意識の転換がみられることは観光だけに限らない。例えば、教育や福祉など地域住民に直接サービスを提供する分野でも、改めてそれぞれの施設や制度などについて必要性や重要性が見直されており、こうした動きのひとつに地域の図書館をあげること

ができる。全国の自治体の約73％(2007年統計)には社会教育施設として「公共図書館」が設置されており、生涯学習への関心の高まりや高齢化によるシルバー世代の増加などによって、図書館の利用は登録者数でみても貸出冊数でみても増加傾向にある。そこで、本研究ではこの公共図書館に着目した。なぜなら、公共図書館は地域によって運営され、地域の情報拠点であり、多様な資料を所蔵しているなどにおいて、前述した観光の主要課題に対応しうる特徴を持っていると考えられるからである。

しかし、こんにちの日本の公共図書館も、地方財政の逼迫化やインターネットの普及などの要因によって大きな転換期を迎えており、①新たなサービスをどう展開するか、②地域にどのように貢献するか、が主な課題となっている。そこで、「新たなサービス＝観光者へのサービス」、「地域貢献＝地域情報の発信や観光振興を通して地域に貢献」という発想を導入してみると、図書館の課題に対して、観光を意識した活動を図書館が行うことは対応策のひとつとして考えられるのである。

このように、観光の側からも図書館の側からも互いに着目する理由があるように考えられることから、「観光と図書館が融合することによって、双方にメリットがもたらされるのではないか」という仮説を立てることができる。そこで本研究では、この仮説を出発点として、図書館の特性と観光との関連性や、図書館の様々な要素が具体的にどのような効果を持つかなど、様々な観点から両者の融合の可能性を考察した。一般的に「“観光”とは名所を見物したり温泉に入ったりすること」、他方「“図書館”は本を読んだり借りたりする場所」というイメージが強いとみられるが、こんにちでは、そのようなとらえ方では収まりきらない多様な観光現象、多彩な図書館の活動がみられるようになってきており、本研究でも幅広い視野に立って両者の融合を考察した。

一見すると、行為としての「観光」と、場所としての「図書館」の融合を考察することは無謀なようにも思える。しかし、本研究では、図書館をたんなる場所としてではなく、サービスを提供する主体としてとらえている。図書館は書店のように本(モノ)を売っているのではなく、本を貸与したり読書の場を与えたり資料を保存・整理するといったサービスを提供している。観光も地域の資源を直接販売するのではなく、体験や鑑賞というサービスを提供しており、両者は「サービスの提供主体」として共通の特徴を持つのである。

そもそも観光において、様々な要素との融合はよくみられる現象であり、それによって新たな観光形態が出現したり、これまで観光資源と考えられていなかった事物が観光対象になったり、交流や経済効果がもらされたりしている(1)。本研究における「融合」という表現は、わかりやすくいえば、観光と図書館が様々な点で連携し合うこと、直接的あるいは間接的に利活用すること、まちづ

くり[2]を協働して推進すること、などを意味しているが、「融合」という表現にはたんなる連携や利活用以上の意味をも含んでいる。それは「融合によって新たな価値がもたらされる」という点である。観光が様々な要素と融合した際、多くの場合において、これまでになかった利用価値や経験価値が創出されている[3]。従って、観光と図書館についても、両者の連携にとどまらず、そこに新たな価値が生み出される可能性があるとすれば、それは「融合」と表現するのがふさわしいと考えて、この表現を用いた。また「新たな価値」については第5章で詳しく述べる。このような問題意識に立って(「連携」や「活用」ではなく)「融合」に着目することによって、本研究の独自性をいっそう高めることができると考える。

なお、観光と図書館との融合は、観光における様々な要素との融合例のひとつに過ぎず、本研究でこれを特別視する意図はなく、他の融合例との優劣を比較する意図もない。また、観光と図書館が融合することによって双方の課題がすべて解決すると主張するものでもない。とはいえ、これまで観光と図書館の融合が唱導されたことはなく、具体的にどのような可能性があるかについても考察されてこなかった。従って、そのような空白を本研究が埋めることによって、新たな問題提起を行うことには大きな意義があると考える。

3　研究の対象と方法

研究対象は日本における観光および日本の公共図書館とした。日本国内と海外とでは、観光および図書館をとりまく環境それぞれに相違があり、場所を特定せずに論じることには無理があると考えられるからである。また図書館については、日本の図書館界において、a)公共図書館、b)学校図書館、c)大学図書館、d)専門図書館、e)その他、に分類されるのが一般的であるが、それぞれが持つ機能や対象とする利用者などが異なるため、すべてを対象にすると、考察にあたって検討すべき要素が非常に多岐に渡る。そこで本研究では、図書館法に基づいて設立された図書館のうち地方公共団体が設置した図書館を対象とした[4]。

研究方法は以下などによった。

①図書館、観光、およびそれに関連する領域の文献調査。(～2009年9月)

②参考事例の収集は、各図書館のホームページ(以下、「HP」と略す)のチェック、雑誌・新聞記事のチェック、図書館系メールマガジンのチェックなどによって行った。電話や訪問などで事実関係の確認や追加取材なども行った。(期間は概ね2008年1月～2009年9月頃まで)

③実態調査および意見収集のため、図書館へアンケートを行った。(対象＝約200館、期間＝2

009年5～6月。詳細は別紙2を参照。今後、本稿で「図書館アンケート」といった場合、このアンケートのことを指す）

④図書館での実地研修（札幌市立中央図書館、2009年3月17～21日）および各図書館での実態観察（札幌市、石狩市、恵庭市、北広島市などで図書館員や利用者の行動観察）。

4　論文の構成

第1章では研究の目的、研究の背景と分析の枠組み、および研究対象と研究方法を述べた。

第2章では日本における観光と図書館について、戦後の略史をまとめつつ現状と課題をそれぞれ述べたうえで、両者が融合することによって課題が解決する可能性があることを仮説として提示した。そして、具体的な考察を進める前に、図書館の特性からみた観光との関連性、観光と図書館の社会対応にみられる類似性の2点について予備的な考察を行った。

第3章では、図書館の諸要素からみた観光との融合の可能性について、参考となる事例をあげて具体的な考察を行い、またそれらの整理と分類を試みた。

第4章では、第3章で行った具体的な考察の中にみられるコミュニケーションの部分に注目し、「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を試案として示した。これにより観光と図書館の融合において、観光者と地域とのコミュニケーションの媒介役として図書館がはたすと考えられる役割を強調し、図書館が「よそ者」と交流し、地域外の声を聴く場として機能しうる可能性を述べた。

第5章では全体のまとめを述べるとともに、融合によってもたらされる新たな価値を説明した。また、融合にあたって留意すべき点や今後の課題についてもふれた。

【補注】

(1) 例えば、日本エコツーリズム協会は「地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の**融合**をめざす観光の考え方である」とエコツーリズムを説明している。（日本エコツーリズム協会HPより http://www.ecotourism.gr.jp/what/ downloaded at 2009.12.15） 他にも、労働と観光の融合による「ボランティアツーリズム」、農業と観光の融合による「アグリツーリズム」など様々な例がある。また「観光まちづくり」という発想も観光とまちづくりの融合であるといえる。

(2) 本研究では「まちづくり」を、西村（2009，p.10）のいう「地域社会を基盤とした地域環境の維持・向上運動」としてとらえる。

(3) 例えば、アートと里山環境と観光の融合によるイベント「越後妻有アートトリエンナーレ2009」（2009年7月26日-9月13日）では、「アートの表現空間としての里山」という新たな価値が創出されていると考えられる。

(4) 図書館法に基づく図書館のうち地方公共団体が設置する図書館を、図書館法では「公立図書館」と称しているが、ほぼこれと同意で「公共図書館」という表現が一般的によく使われているので、本稿では「公共図書館」を「公立図書館」の意味で使用している。なお、参考事例の紹介などで公共図書館以外について述べた場合もある。また、公共図書館を研究対象にしたことに伴い、本研究で「地域」という用語は、その公共図書館を設置している自治体のことを基本的に想定して使用している。すなわち市区町村立図書館では市区町村が、都道府県立図書館では都道府県が「地域」となる。ただし、「地域文化」など自治体を単位にして区切ることが難しい概念については、「当該自治体およびその周辺」というイメージで使用している場合もある。

第2章　観光および図書館の現状と課題

1　観光の現状と課題

1-1　日本の観光の変遷(1)

戦後の国民経済は、『経済白書　昭和31年度版』(1956年)で「もはや戦後ではない」とされた頃から本格的な復興をみせ、東京オリンピック(1964年)によって高度経済成長は加速された。さらに、東海道新幹線の開通(1964年)や海外渡航自由化(1964年)などにより、この頃から、ようやく国民全体が観光を楽しむことができるようになった。そして、万国博覧会(1970年)とそれに続く「ディスカバー・ジャパン・キャンペーン」(1970～76年)、「アンノン族」の出現が観光の大衆化を一気にもたらした。

その後、石油ショック(1973年)によって高度経済成長は終焉し、観光も一時低迷したが、自家用車の普及や高速道路網の整備などによって次第に盛り返し、やがて東京ディスニーランドや長崎オランダ村の営業開始(ともに1983年)の効果、および日本人の価値観の多様化や家族構成の変化などの影響を受けて、これまでの団体旅行や慰安旅行中心から、友人や家族との旅行中心へと観光形態が変わっていった。

その後、バブル期には、総合保養地域整備法(1987年)によってリゾートブームが起きたり、ふるさと創生事業(1988年)による地域おこしがみられた。しかし、バブル経済が崩壊すると、経済的にも政治的にも「失われた10年」といわれた低迷をしばらくの間続け、海外旅行は伸びていったが、国内旅行は「安・近・短」志向になっていった。また日本全体でみても、地域格差の拡大、少子高齢化の進行、一次産業の衰退など、特に地方の疲弊が深刻化していった。生活の豊かさや人間関係のあり方などが改めて問われるようになり、これに伴って「地域づくり」や「まちおこし」の重要性が見直されるようになった。

この間、メディアやインターネットの発達などによる高度情報化の影響もあり、観光の多様化・高度化傾向は強まり、新たな観光(いわゆる「ニューツーリズム」)に関心が高まってきた。ニューツーリズムでは、これまでのようなたんなる物見遊山や周遊観光ではなく、地域に根ざした文化や、交流・体験・学習といった要素が重視されるため、マスツーリズム(大量動員)を主な対象にしてきた従来型の観光地や観光施設では対応が難しくなり、改善の遅れた観光地では厳しい状況を迎えることになった。そして現在もデフレ経済などの影響を受けて、国内観光は全体的に伸び悩んでいる状態が続いている。

こうした状況のなかで、地方をいかに活性化させるかという課題と従来型観光の行き詰まり打破

という二つの課題を解決する方法として、観光とまちづくりとの融合による「観光まちづくり」が注目されるようになり、各地で様々な試みが行われている。

一方、2000年以降になって国の観光政策にも大きな変化がみられた。小泉政権時代に「観光立国宣言」「ビジット・ジャパン・キャンペーン」などの政策が打ち出され、本格的な観光立国への歩みが始まった。2006年には43年ぶりに観光基本法が全面改正されて「観光立国推進基本法」が成立し、2007年にはこれに基づいた「観光立国推進基本計画」が策定された。2008年には観光庁が国土交通省の外局として新設された。このようにして、ようやく観光による国づくりの方向性が示されるようになった。

1-2　こんにちの観光の課題

こうした変遷のなかで、こんにちの日本における観光の重要課題として、以下の2点があげられる。

(1) 地域主導による観光振興

多くの文献において「これからは地域による観光振興が大切である」という主旨の指摘がなされている(2)。これからの観光振興においては、地域も観光の当事者として参加し、さらに地域の主導による観光への取り組みが必要であるという認識が広まりつつある。地域外の資本によって観光用の施設を新たに用意するのではなく、地域文化や地域の特性を活かした「観光まちづくり」が求められるようになってきたのである(3)。

一方、観光者の側も地域の歴史、人々の暮らしぶりや伝統文化への関心が高まり、地域ブランドや地産地消型レストランが人気を集めるなど、様々な点で地域志向が強まっている。また、地域住民との交流も重視されるようになってきている。

こうした背景から、「地域文化の継承や創造によって地域の魅力を高め、それにより観光者が訪問してみたい土地となることを目指す」という発想による「観光まちづくり」が注目を集めているが、それを実施するにあたっては、地域文化をどのように維持あるいは創造するか、地域情報をどのように発信するかなどについての工夫と努力が必要になる。すなわち地域主導の観光振興においては、地域文化の創造・蓄積・発信をどのように行うかが大きなポイントとなるのである(4)。

(2) 観光の多様化・高度化への対応

『レジャー白書　2007』では、「余暇需要の変化と“ニューツーリズム”」(pp.87-121)と題する特別レポートを掲載し、近年急速に関心が高まっている観光の形態についてまとめているが、その特徴として、①テーマ性、②地域性・地域への寄与、③参加・体験、④地元での交流、の4点をあげている。ここであげられた特徴のうち、②と④はすでに「(1)地域主導による観光振興」で述べたことと重なるが、残りの①と③は「観光の多様化・高度化」とまとめることができる。

観光者が観光にテーマ性を求めたり(①)、参加や体験を求めること(③)は、観光者がそれぞれの観光に求めるものが同じではなく、観光のあり方が個性的で多様化してきているということにつながっている。このような趨勢にあっては、よく知られたものを確認するだけの観光は魅力を失い、なんらかの付加価値がある、より豊かな観光体験が求められるようになる。そうした傾向を表すキーワードとしては「テーマ」「参加」「体験」「交流」の他に、「学習」「本物志向」「自己実現」「感性を豊かにする」なども同様の意味(付加価値)を持つといえる。こうした付加価値を観光に求める志向をここでは「観光の高度化」と表現しておく(5)。

こうした「観光の多様化・高度化」をもたらした背景のひとつとして、観光者が主体的で能動的になったことがあげられる。観光者は観光に関する様々な情報を意欲的に探したり、自ら進んで交流を図ろうとしたり、能動的に行動しようとする傾向が強まっている(6)。観光に対する目も厳しくなり、ステレオタイプなサービス、うわべだけの観光用施設は敬遠されるようになる。

このように観光が多様化・高度化し、観光者が主体的・能動的になると、受け入れる地域の側も、「地域のどういう資源をどのように提供すれば、来訪者の満足度をより高めることができるか」という点について、より深い研究と実践が求められる。そのためには、観光者が地域の何に魅力を感じているかをよく把握し、それを地域文化の維持や創造に反映させるというフィードバックがポイントになる。

ここで改めて強調しておきたいのは、これらの課題の背景には、観光そのものの変化があるという点である。地域による観光振興の動機も観光者の観光動機も変化してきている状況にあっては、これまでのような固定観念で観光をとらえるのではなく、できるだけ柔軟な発想が必要になる。観光資源と思われてこなかったものを見直したり、日常生活の中に観光と結びつく要素を再発見したり、異質なものを融合させたり、という知恵が新たな観光に対応するために重要になるのである(7)。

1-3　観光の課題を解決する候補としての公共図書館

前述した課題を解決するために、地域外の資本を利用したり、従来型の観光専用施設を新たに設けるのでは矛盾である。そこで、地域に存在する機関や施設のなかで、この課題に対応しうるものを探してみると、公共図書館がひとつの候補として浮かび上がってくる。なぜなら公共図書館は以下の特徴を持っているからである。（これ以降、本稿でたんに「図書館」という場合は「公共図書館」のことを指す）

①地域住民が日常的に利用している施設であり、かつ地域住民でなくとも誰もが無料で自由に利用できる(8)。

②図書館の設置は自治体の条例に基づき、基本的に自治体の財源によって運営されているため、地域によって活動のコントロールができる。また入場者数の多寡が経営に直結する施設ではないので、持続性のある運営ができる。

③地域に関する資料を収集しており、前述した「地域文化の創造・蓄積・発信」に適している。

④幅広いジャンルの資料を備え、学習、娯楽、教養など様々な体験や付加価値を提供できる多様性を持っている。

⑤書架以外に多目的スペースを持ち、イベントや交流の場としての利用も可能である。

⑥図書館は地域性を持つ(9)。

こうした特徴から、「図書館は観光と関連があるかもしれない」という推察ができるが、これまで図書館は観光との関連をほとんど意識されてこなかったし、観光学においても図書館学においても両者の融合が研究テーマになったことはなかった。先行研究がないという事実をふまえたとき、「はたして両者の融合は可能か」という問いに答えるには慎重さを要する。

そこで、図書館と観光との融合について詳しく考察する前に、まずは次節で図書館の変遷と課題などをまとめることにする。

2　図書館の現状と課題

2-1　日本の図書館の変遷

戦後日本の公共図書館の略史は以下のとおりである(10)。

①模索期（1945-60年）

1950年に図書館法が制定されたが、日本全体がまだ戦後の混乱から抜けきれなかったことな

どから図書館の活動は本格化せず、しばらく低迷を続けた。この頃は都道府県立図書館が図書館活動の中心であり、それは「地域の図書館」という存在からはほど遠かった。図書館の進むべき方向性も活動の具体的なイメージも見いだせず、図書館界にとっては模索期であった。

②展開期（1960-70年）

1960年に高知市民図書館の調査報告書が刊行され、その活発な活動が注目を集めたことがひとつのきっかけとなり、1963年に日本図書館協会は中小公共図書館運営基準委員会を設置して、様々な調査や検討を行った結果、図書館振興策を『中小都市における公共図書館の運営』（以下『中小レポート』）としてまとめた。この報告書では、「公共図書館の本質的な機能は資料提供にある」という理念が示され、「中小公共図書館こそが図書館サービスの中核である」という位置づけに基づき、館外奉仕を前面にした活動指針が提起された。この報告書は日本の図書館に大きな方向転換をもたらした。1965年に日野市立図書館が移動図書館1台で業務を開始するなど、60年代後半になって『中小レポート』の理念をふまえた取り組みが日本各地で具体化していった。

その後、日本図書館協会は公共図書館振興プロジェクトをおこし、その検討結果を1970年に『市民の図書館』として発表した。このなかで、①市民の求める図書を自由に気軽に貸出すこと、②徹底して児童にサービスすること、③全域へサービス網をはりめぐらすこと、の3つを重点目標として示し、また図書館の設置者である自治体がはたす役割を強調した。

『中小レポート』と『市民の図書館』の発表は戦後の図書館界にとって極めて重要な出来事であり、これが図書館活動の新たな展開をもたらした。

③発展期（1970～80年）

『市民の図書館』で図書館が重点とすべき目標が具体的に示されたことによって、図書館活動について（議論はあったものの）一定のコンセンサスが形成されるようになり、それに従って図書館活動は飛躍的に伸びていった。さらにこの頃、公害問題や地域開発問題など様々な分野で市民の参加意識が高まり、図書館においても、住民による図書館づくり運動や図書館を支える会などの動きが活発になった。こうして、図書館自体の努力と、住民からの行政や図書館への働きかけとが相まって、図書館活動は発展していった。

④転換期（1980年～）

70年代の終わり頃から人件費削減への意識が行政側に次第に高まるとともに、図書館の業務

簡素化への模索が始まった。80年代から90年代にかけて国や自治体による行財政改革が進行し、業務委託の導入や「公立社会教育施設整備費補助金」の廃止など、特に経営面で大きな変革が図書館にもたらされた。また90年代後半から本格的な議論となった地方分権のあり方が2000年に地方分権一括法として制度化され、地方行政の自律性が求められるようになった。さらに2003年には地方自治法の改正により指定管理者制度の導入が可能となった。このような背景により、こんにちでは図書館経営に様々な手法が試みられるようになり、その是非が大きな論点となっている。

この間、日本図書館協会図書館政策特別委員会は、1987年に『公立図書の任務と目標（最終報告）』を発表し、改めて市町村立図書館の発展を支えるものとして都道府県立図書館を位置づけるとともに、都道府県の行政施策として市町村立図書館の充実に取り組むことの必要性を指摘した。一方、文部科学省が図書館行政にはたす役割も政策官庁へと変わり、報告や基準の発表が80年代後半から相次ぐようになった。同省による主なものに以下がある。

－『新しい時代（生涯学習・高度情報化の時代）に向けての公共図書館の在り方について：中間報告』(1988)　＝近年における文科省の図書館行政の出発点とされる。

－『2005年の図書館像』　＝電子図書館についての構想をまとめたもの。

－『公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準』　＝これにより、ようやく国による基準（図書館が目指すべき目標）が示された。

－『これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして』(2006)　＝具体的な事例を多数紹介しつつ、新たな図書館のあり方を提言した。

こうした様々な報告等が出されているが、「これらの報告や基準に関する図書館界での討論、評価や活用方法の検討は不十分である」(薬袋，2005，p.144)と指摘があるように、これらをどのように現場で活かしていくかについては模索が続いている。

社会動向との関連でみると、80年代後半から生涯学習に対する意識が高まるようになり、生涯学習機関としての役割が図書館に期待されるようになった。また、90年代後半からインターネットが急速に普及したことにより、資料の電子化、情報検索の多様化、情報発信の変化なども図書館に様々な影響を与えている。また、平成の大合併（1999～2006 年頃）により、1999年に約3,200あった市町村が、2007年春には約1,800まで減少した。これにより図書館の設置率が見かけ上は向上したことにも留意しておきたい。

なお、図書館法は制定以来18回の改正が行われているが、特に1999年と2008年の改正が重

要である(11)。

このような流れのなかで、地方財政のさらなる逼迫化や少子高齢化、インターネットの普及など様々な要因によって、日本の図書館は大きな転換期を迎えている。渡部(2006, p.12)は「今まさに全ての日本の公共図書館は衰退かそれとも新たな脱皮かという転換期に立たされていると言っても過言ではない」と指摘している。また、柳(2009)はこうした転換を迎えている状況を、図書館の社会的位置づけが変化し、図書館が情報消費の場から知的創造の場へ転換しつつあるためであると分析している。

※以下に参考データとして、戦後日本の公共図書館史における特に重要な出来事(表1-1)をまとめた。また、公共図書館の2007年集計(表1-2)、市区町村立図書館の推移(図1-1)、公共図書館における個人貸出登録者数と個人貸出数の経年変化(図1-2)もそれぞれまとめた。

表 1-1 戦後日本の公共図書館史における特に重要な出来事

年 (西暦)	事項
1950年	図書館法公布
1963年	『中小レポート』発表
1970年	『市民の図書館』発表
1987年	『公立図書館の任務と目標』発表
1988年	『新しい時代に向けての公共図書館の在り方について』発表
1999年	図書館法改正
2001年	『公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準』発表
2003年	指定管理者制度の導入
2006年	『これからの図書館像』発表
2008年	図書館法改正

表 1-2 公共図書館集計(2007年4月1日現在)

(『日本の図書館2007』をもとに作成)

	都道府県立	市区立	町村立	自治体全体
自治体数	47	805	1,022	1,874
設置自治体数	47	789	530	1,366
設置率	100%	98%	51.80%	72.80%
図書館数	62	2,414	613	3,089
蔵書冊数(千冊)	39,524	283,098	41,063	363,685
一館平均蔵書冊数(千冊)	637.5	117.3	67.0	117.7

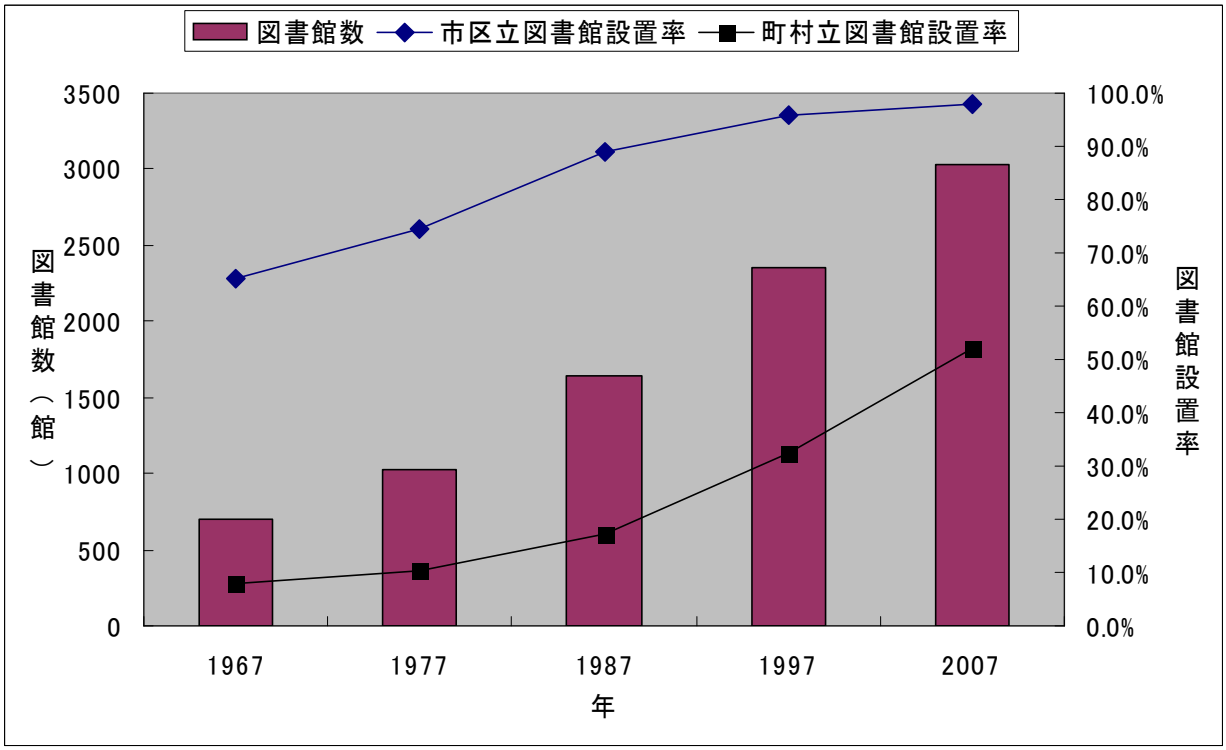

図 1-1 市区町村立図書館の推移

(『図書館年鑑』各年版をもとに作成)

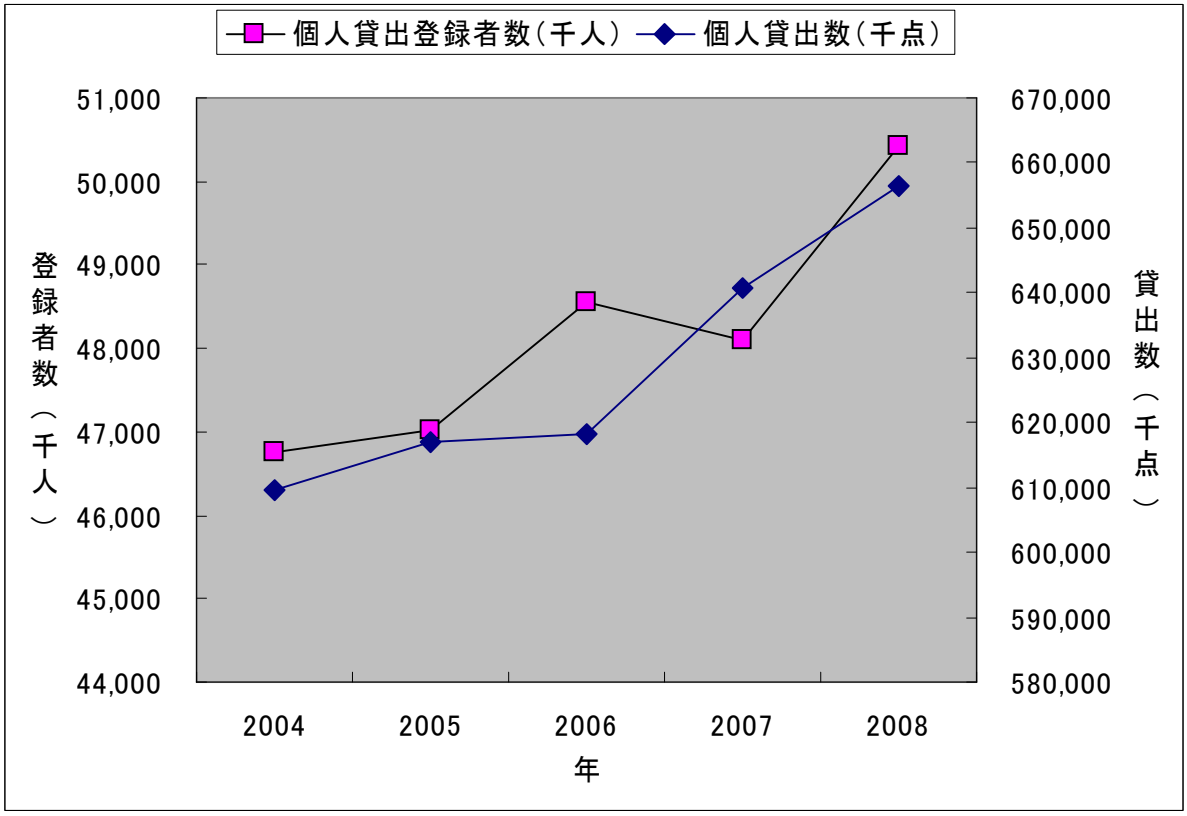

図 1-2 公共図書館における個人貸出登録者数と貸出数の経年変化

（『図書館年鑑2009』をもとに作成）

2-2　こんにちの図書館の課題

前述したように、こんにちの図書館は大きな転換期を迎えており、様々な課題を持っている。そのなかで、特に重要なものとして以下の2点をあげることができる。

(1) 新たなサービスの展開

これまで、図書館では「貸出」がサービスの重点に位置づけられ、他のサービスの開拓にはあまり積極的でなかったが、予算の逼迫化や利用者像の変化などに対応するため、新たなサービスの提供が試みられるようになった。なかでも「ビジネス支援」、「子育て支援」、「高齢者支援」などをテーマに掲げ、対象者を具体的に想定して、その対象者が抱える課題に応えようとする「課題解決型サービス」と呼ばれる試みには特に関心が高まっている(12)。

新たなサービスが展開されるようになった背景としては、先に述べたような予算の問題などもあるが、図書館の意識において、活動範囲を広くとらえるようになったことも大きい。竹内ほか(2007, p.67)は、「今は人口減少とデジタル化の時代であり、図書館が新しい顧客に支持されるのは決して簡単なことではない。異なるニーズをもった複数の新規顧客層の開拓に取り組まなければ、利用がじりじりと減っていくのは明らかなことだ」と危機感を示している。

また、課題解決型サービスが提案されるようになった背景について、「図書館が本来担っていたサービスの範囲と優先順位を見直そうというものである。そこで提案されているサービスは図書館がサービスを与える側であると同時に、特定の地域コミュニティから資料や情報を受ける側でもあるという相互性を持つことが特徴である」(国立国会図書館, 2007, pp.12-13)と説明し、地域社会との関係を新たにとらえようとする意識があることが指摘されている。こうした状況に対して柳(2009)は、知的サービスの創造こそ、公共図書館の新しい役割であると主張し、新たなサービスの出現を基本的に歓迎している。今後も「貸出」が図書館の基本サービスであることに変わりはないとしても、これまでのように「貸出冊数」という数値が偏重されきた状況は変わろうとしているといえる。

このような図書館の新たなサービスは、図書館系の文献のみならず、一般の新聞や雑誌でも「変わる図書館」などの見出しで紹介されて関心を集めているが、どのような利用者を対象にすべきか(13)、どこまでサービスの範囲を広げるか(14)、効果をどう測定するか等々、検討しなければならない課題も多い。

(2) 地域貢献のあり方

もともと図書館は地域に密着した施設であり、様々な意味で地域に貢献をしてきたが、社会状況の変化などによって、改めて地域に対してなにが貢献できるかが問われるようになってきた。例えば、「地域における存在意義を確立せよ」(これからの図書館の在り方検討協力者会議，2006)という指摘や、「地域の課題解決に向けた取り組みに必要な資料や情報を提供し、住民が日常生活を送る上での問題解決に必要な資料や情報を提供するなど、地域や住民の課題解決を支援する機能の充実を図ることが求められる」(中央教育審議会，2008，p.27)などの指摘がみられる。また、まちづくりとの関連についても、渡部(2006，p.57)は「地域づくりにどう取り組むかが今後の図書館の発展を左右するのである」と述べて、非常に重要な課題であることを指摘している。

このように、図書館が地域に対してどのようにして存在感を示すかが問われており、その意味で、図書館の地域貢献への取り組みは始まったばかりであるともいえる。「(1)新たなサービスの展開」で述べたような試みも、その問題意識につながっており、他にも地域住民、教育機関、企業、行政との様々な連携などが模索されたりしているのである(15)。

2-3　図書館の課題を解決する候補としての観光

「1-3 観光の課題を解決する候補としての公共図書館」では、観光の側から課題解決の候補として図書館に注目した。一方、図書館も前述したような課題((1)新たなサービスの展開、(2)地域貢献のあり方)などからみて、大きな変換期に直面していることは事実である。すなわち図書館は、これまでの図書館のあり方や存在意義についてパラダイム変換が求められ、様々な要素との新たな連携・協働・融合が必要になってきているといえる。

そこで、こうした状況に対応する発想として、図書館の側から観光に注目してみた場合、以下の仮説を立てることができると思われる。

「(1)新たなサービスの展開」という課題については、これまで図書館において観光者へのサービスはほとんど検討されてこなかったが、観光者を明示的に利用者としてとらえることにより新たなサービスの展開が想定できる。それにより図書館の可能性を広げ、存在意義をより高められるのではないだろうか。

「(2)地域貢献のあり方」という課題については、「地域住民へのサービスによって地域貢献をはたす」という図書館の基本原則は変わらないとしても、「地域外へ向けて地域情報を発信すること

によって、地域への関心を高めたり、観光者を招く」という考え方や「観光者へのサービスを通じて、訪問したことの満足度を高めて地域の印象をアップさせたり、地域との交流をもたらす」という考え方も地域貢献のあり方としてとらえる発想がありうるのではないだろうか。

このように考えてみるならば、図書館の課題を解決する候補として「観光」が想定され、図書館と観光との融合の可能性が浮かび上がってくると考えられるのである。

3　両者の関連性に関する準備的考察

観光と図書館との融合を考えた場合、実際にどのようなことが可能であろうか。その可能性を具体的に考察するに先立ち、まず、図書館の側に観光と融合しうる諸条件が内包されているか、そのポテンシャルを考察する必要がある。

そこで、具体的な考察を次章で行う前に、両者の関連性をより明確にとらえるため、①図書館の特性が観光とどのような関連性があるか、②観光と図書館が対応を迫られている社会変化にどのような類似性がみられるか、の2点について、準備的な考察を行うことにする。

3-1　図書館の特性からみた観光との関連性

(1) 社会的な記憶装置としての図書館(16)

図書館は様々な資料を収集し、保存し、提供する機能を持っている。しかもたんに保存するだけではなく、一定の分類基準（日本十進分類法など）によって整理された上で保存されている。これに比して、例えば観光案内所には、観光に関する資料を整理して保存する機能はない。観光案内所は最新の観光情報の入手に適しているが、過去にさかのぼって情報を得ることはできない。

このことは地域文化を観光との関連でみると重要である。なぜなら、観光者にとっても、地域住民にとっても、図書館に蓄積された資料を参照することによって、時間軸で地域文化を見渡すことが可能になるからである。根本(2008)は、日本の知識情報管理の特徴として時間軸の軽視を指摘し、欧米で図書館や文書館が重要視される背景にあるのは、歴史的社会的な自己省察の意識であると述べているが、この分析は、これからのまちづくりにおける図書館の活用について示唆に富むものといえる。

また、「コミュニティの情報流通に関して、文化的価値が定まらない実験的な創作物、利用頻度

は低くとも後世に残すべき情報、読み手の数は限られるものの特定分野の表現形態としてコミュニティで共有すべき情報など、市場とは別の原理によって成立する文化的領域を維持するために、公共図書館が重要な役割を担っている」(吉田右子，2008b，p.50)と指摘されるように、資本主義的な作用によって地域文化が淘汰されるのを防ぐためにも、図書館の保存機能は重要である。

こうした役割によって、図書館は地域のなかで独自の位置を占める。これを根本(2002，p.56)は、「その図書館が過去から蓄積してきた歴史的な資料によって図書館の地域におけるシンボル性を演出する基になるともいえる」と説明している。

(2) 地域文化の可視化装置としての図書館

島川(2002，p.100)は、観光開発の現状について「地域住民それぞれに蓄積された暗黙知がまったく活用されていない」と指摘したうえで、住民の暗黙知が明確な形式知へと変換されなければ、知の創造には結びつかず、住民の暗黙知が形式知に変わるための対話や体験を共有する場が必要だと指摘している。一方で、高山(2008，p.44)は、図書館は暗黙知を形式知に変換し、保存し、提供するという努力を支える社会制度と見ることができると述べ、図書館が暗黙知を形式知に変換する機能を持っていると説明する。高山の分析は知識全般について述べたものだが、地域文化についても非記録情報(暗黙知)が記録情報(形式知)に変換されて図書館に保存されることで可視化がおこり、これにより地域文化への理解が容易になると考えられる。なぜなら地域のものの考え方や生活様式、習慣、風俗や年中行事、等々といった様々な無形の文化を、観光者が簡単に理解したり体感することは難しいが、そうした資料はそれへの大きな手がかりとなりうるからである。もちろん観光者だけではなく、地域住民にとっても保存や継承の点で資料化は重要である。

また、図書館が資料を購入する際には、住民からのリクエストや地域全体の情報ニーズや既存の蔵書とのバランスなどが考慮されるが、そうした選書の積み重ねによって図書館の蔵書には様々な意味で「地域性」が反映され、地域文化を背景とした独自性を持つ。いわば地域文化が蔵書という「風景」となって観光者の眼前に現れるのである(17)。この意味で、図書館は各館ごとに異なる風景を持つ。「他では見られないものを見に行くこと」が観光動機のひとつであるとすれば、図書館の書架もまた観光対象になりうるのである。

(3) 情報の濾過装置としての図書館

柳(2009, p.252)は、「図書館には商品を公共の文化資源にしていくという濾過装置が働いている」と述べ、「文化・知的情報資源を単なる消費財に終わらせない仕組み」(同, p.253)が図書館の本質的機能であるという。図書館は、様々な資料を一定の基準に基づいて収集・選別し、後世に残すことを使命としているが、これを「情報の濾過」ととらえることができる。さらに図書館にはスペースや予算の制約もあるので、その意味でも資料の選定には慎重にならざるをえない。インターネットのようにスペースの制約がなく、内容を吟味することもない世界とはまったく異なっており、図書館が選書(濾過)をする際は、「制約の中で、いかに地域の情報要求に応えていくか」という対応が必要になる。そこでは住民からのリクエストや蔵書バランスへの配慮などにおいて、常に「地域」が意識されているのである。

また、図書館の資料は誰かが勝手に持ってきたものではなく、図書館によって「保存すべきである」と判断されたものであり、保存された資料の内容が時間を経ることによって変わってしまうこともない。つまり図書館の資料は一定の信頼性と安定性を持っている。このことによって観光者は、観光空間でよく議論になる文化変容やニセモノ性、俗化などとは無関係に、どの地域に行っても安心して図書館の資料を利用することができる。

以上、図書館が持つ特性のうち、観光と関連があると思われるものについて考察した。各項目を平易な言葉に置き換えてまとめると、「図書館は、一定の基準によって資料を選択し、長期に渡って保存する機関である。これを利用することで地域住民も観光者も、地域文化を“資料”という目に見える形でとらえることができる」となる。このことを『図書館による町村ルネサンスLプラン21』(2001, p.24)では、端的に「図書館は地域の百科事典、タイムカプセル」と表現している。この考察によって、観光と図書館を結ぶ接点のひとつが明確になってきたと思われる(18)。

3-2　社会対応にみられる観光と図書館の類似性

観光と図書館はあまり接点がないように思われているが、実は社会の様々な動向への対応において、いくつか共通する部分を持っている。そうした類似性が両者にみられるという指摘はこれまでほとんどされてこなかったが、ここで類似性が強いと思われるものを以下に4点指摘したい。

(1)（訪日・在日）外国人への対応

2003年に「ビジット・ジャパン・キャンペーン」が開始され、2007年には「2010年までに年間の訪日外国人旅行者数を1000万人にすること」が目標となった。これをうけて海外からの観光者をいかに誘致するかが課題となっているが、たんに誘致するだけでは不十分であり、訪問した外国人観光者に各国語によるパンフレットを用意したり、通訳ができるガイドを育成するなどの対応も当然必要になる。訪日外国人への対応が不十分であれば、訪問した人が母国に帰って不満を周囲に訴えたりして、「ビジット・ジャパン・キャンペーン」の目標達成にも影響しかねない。

一方、図書館でも、在日外国人のためのサービスは以前から大きなテーマのひとつとなっている。これは一般的に「多文化サービス」と呼ばれるもので、簡単にいえば地域の在日外国人に対して母国語による資料を提供するサービスのことである。外国人居住者の比率が高い地域や、なんらかの理由によりしばしば外国人が利用する図書館などで、日本語以外の新聞・雑誌、実用書、絵本、あるいは日本語との対訳辞典、日本語学習書などが用意されている。また最近では、館内表示も多言語化されつつある。

このように観光のためにせよ、労働その他の理由にせよ、国内の外国人に対していかに便宜を図るかという点で、観光と図書館は共通したテーマを抱えている。

(2) 滞在志向への対応

観光において、近年注目されているキーワードのひとつに「滞在型観光」があり、国による「観光立国推進基本計画」でも長期滞在型観光の推進が明記されている。滞在型観光が重視されるようになった背景としては、長期滞在によって経済的な効果が期待できることなどもあるが、なにより地域の側が、その地域の魅力をより深く知ってもらうには滞在が必要だと考えるようになってきていること、そして観光者の側もこれまでのような慌ただしい周遊ではなく、時間にゆとりある観光を望み、地域文化や地域との交流を重視する傾向がみられるようになったことがあげられる。

一方、図書館でも、1990年頃から「滞在型図書館」と称する図書館が増えてきた。厳密な定義はないが、概ね、①ゆとりあるスペース、②快適性の重視、③付帯施設の充実、④本を貸し借りするだけではない多目的な利用、を志向する図書館のことである(19)。図書館を単なる「本の保管庫」としてとらえると、本を借りたら（あるいは借りた本を返したら）図書館に留まる理由はなくなってしまうが、図書館を「本や読書がもたらす楽しさを体験する場」、「利用者同士の交流の場」としてとらえることによって、図書館に滞在することの意義が新たに生まれる。そうしたコンセプトに基づく

図書館づくりが各地で進められている。

このような両者の傾向を単純に重ね合わせるには少々無理があるが、観光と図書館の双方で「滞在」がキーワードになっていることは確かであり、その背景には、社会一般におけるゆとり志向、体験重視、交流志向などの変化が深く関連していると考えられる。

(3) 専門性重視への対応

これまでにも様々な観光においてガイドが活躍していたが、エコツーリズムや体験型観光の発達に伴い、改めてガイドの重要性が見直されるようになってきた。羽田(2008, p.93)は着地型旅行商品の開発にあたって、魅力を伝えるガイドの介在が大きな意味を持ち、ガイドの育成・確保が不可欠の要件だと述べているが、ここでいう「ガイド」とは、これまでのような「旗を持って団体を引率する」的なガイドではなく、地域文化や特定分野について深い知識を持ち、ストーリーを持たせたツアーを組み立てることができ、実際のツアーにおいて演出力を発揮できる専門家のことである。

一方、図書館でも、「司書」という専門職のあり方や司書資格の要件などついて議論が高まってきている。例えば『図書館雑誌』でも、「これからの図書館員制度1～3」(2007年11月号, 2008年3月号, 2008年5月号)というように短期間に3回も特集が組まれており、それに対する社会の関心の高さをうかがうことができる。この背景には、インターネットなど情報ツールの多様化や、課題解決型サービスという高度な任務の登場という状況において、改めて「司書の専門性とは何か」という根本的な点を再検討しようという動きがあるといえる。

つまり、こうした動向が両者でみられるのは、社会の様々なニーズが多様化・高度化してきたため、それに応える立場の者に、より専門性が求められるようになってきたためであると考えられる。

(4) 学習重視への対応

「生涯学習」という考え方は、1965年にユネスコで提唱され、その後、1970年代に日本でも教育政策として導入され、1980年代以降に普及して定着したとされる(20)。さらに1990年にはいわゆる「生涯学習振興法」が制定され、これにより文科省のみならず経済産業省なども生涯学習の動向に関わるようになった。また「生涯学習都市」を宣言する自治体も続々と登場してきている。

もともと観光は、五感によって未知のものを体験するという点では学習に通じる要素を持っていたが、戦後の日本における観光では、どちらかというと慰安や親睦、ストレス発散という要素に重

点が置かれていた。しかし最近では「学習」が重要視されるようになり、産業観光や歴史観光、エコツーリズムなど学習の要素を取り入れた観光が台頭してきている。また個人旅行でも、地域の歴史や文化を学ぼうという姿勢が高まりつつある(21)。

一方、図書館においても、『新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について』(中央教育審議会，2008，p.42)で、国民が生涯に渡って自主的な学習を行ううえで、図書館のはたすべき役割は極めて大きいと指摘されるなど、生涯学習社会における図書館の重要性が改めて高まっている。公民館などの講演、民間のカルチャーセンター、NPO法人による啓蒙活動など学びの場は多いが、そのなかで図書館は、資料を選ぶ際も読書をする際も、他の学習機会に比べて能動的な態度が要求されるという特徴を持っており、「自分のペースで学びたい」というニーズには都合のよい施設である。

このように「いくつになっても学びたい」、「機会をとらえて学習したい」という生涯学習志向が高まると、日常生活においても観光においても図書館や博物館などの社会教育施設がはたす役割が高まることが予想されるのである(22)。

以上、観光と図書館とに共通してみられる動向を、とりあえずここに4点指摘してみたが、このうち、「(1)(訪日・在日)外国人への対応」、「(2)滞在志向への対応」では多様化が、「(2)滞在志向への対応」、「(3)専門性重視への対応」、「(4)学習重視への対応」では高度化が、それぞれ両分野で表面化しつつあることと、その対応の必要性としてとらえることができる。

こうした対応は、観光や図書館に限らず日本の社会全般に求められている。しかしそれゆえに、上記(1)～(4)にみられる類似性は、ある意味では偶然であるが、かつ単なる偶然ではあり得ない。観光も図書館も、こんにちの日本における様々な社会的変化と結びついて活動を行わざるを得ないという意味で、対応すべきテーマが自ずと共通してくることになる。それゆえ両者が融合することに何らかの障碍があるとは考えにくく、むしろ積極的な効果がもたらされる可能性があることが示唆されるのである。

3-3　本節のまとめ

本節では、観光と図書館の関連性について、図書館の側から観光の領域へと広がりうる可能性の考察と、両者の社会対応にみられる類似性の指摘を行った。これらにより、観光と図書館の接点がやや明確になってきたのではないかと思われる。しかし、融合のイメージや可能性がまだク

リアになったわけではない。両者の融合についての具体的な考察は次章において行われる。

【補注】

(1) この部分をまとめるにあたっては、羽田耕治(2008)、安村克己(2006)、堀川紀年(2007)、油川ほか(2009)などを参考にした。

(2) 例えば、「従来の観光開発は観光資本と観光資源、そして観光客が3大要素であり、その調和が最大の目標であった。そこには地域社会という視点が欠けていたのである」(西村, 2002, p.21)、「地域社会を中心に考えることによって住民・資源・来訪者の三者の調和への取組みの方策がおのずとみえてくるのである。これこそ観光まちづくりの目指すところである」(同, p.23)などの指摘がある。他にも米良(2008)など多くの文献で同様の指摘がみられる。

(3) 石森(2008)は、地域社会の主導による「内発的観光開発」が持続的な観光の創出のために最も重要であると指摘している。

(4) 井口(2002)は、文化立国のひとつの延長線上に観光立国が想定されるべきであるとして、地域文化の創造・蓄積・発信という視点は、まさに観光文化の創造・蓄積・発信という行為に通じるものであり、「観光まちづくり」の理念でもあると述べている。

(5) こうした傾向を梅川(2009, p.102)は、「“旅行経験豊富な成熟した大人が増加し、個人の趣味や嗜好によって旅行先を選び、ネットで情報収集しながら気に入った宿泊施設などを予約し、本物の体験や地場の食を楽しむ”といった旅行タイプ」と表現している。

(6) 石森(2008)は、観光者が自らの意思で観光する「自律的観光」が増えつつあるとし、旅行会社によって予めパッケージ化された旅行商品の有効性が薄れつつあると指摘している。

(7) 長谷(2003, pp.10-11)は、「観光振興は、当該地域の自然、生活、歴史、文化、産業などの特有な資源を発見・活用することが重要となる。とくに、これからの時代では、今ある資源に新しい付加価値を付与したり、資源を新視点からとらえなおしたり、また資源の使い方を変えたりするなど、斬新な発想で地域資源を活用することが求められてくる」と述べている。

(8) 無料公開は図書館法第17条で定められている。

(9) 根本(2004, p.96)は、「図書館はコレクション、サービスの面で一つ一つがユニークなものであるが、ユニークさの源泉はその地域性にあるといってよい」と述べている。一見すると図書館はどの館も同じように思えるが、図書館が地域性を持っているとすれば、こんにちの観光が地域志向になってきていることに照らして重要なポイントである。

(10) この部分をまとめるにあたっては、塩見(2006)、小川ほか(2006)、薬袋(2005)、日本図書館協会町村図書館活動推進委員会(2001)などを参考にした。特に時代区分については、塩見(2006)の区分に準拠した。

(11) 1999年の改正では主な項目として図書館長の司書要件が削除された。2008年の改正では教育基本法の改定に合わせて、家庭教育との関連、電磁的資料の追加、司書資格要件の見直し等々多くの変更があった。図書館法の改正については『図書館雑誌(2008年9月号)』の「特集　図書館法改正をめぐって」や『図書館年鑑 2009』の解説などを参照。

(12) 詳しくは、大串夏身(2008)などを参照。

(13) 福永(2005, p.318)は、「図書館はこれまでにない新たなサービスを展開し、利用者が選べるサービスを提供することによって、これまでサービスが及んでいなかった未利用者を発掘する必要がある」と述べ、未利用者の発見と新規顧客の開拓が重要であると指摘している。

(14) これからの図書館のあり方検討協力者会議(2006)では、あらゆる課題解決に対応しうる「ワンストップ型サービス」の拠点としての役割を図書館に期待している。

(15) ちなみに、全国図書館大会平成21年度(2009年)の大会テーマは「図書館は力　人・本・情報・まちづくり」であった。(開催期間:2009年10月30日、開催地:東京都)

(16) 『図書館情報学用語辞典』(日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編, 2007, pp.173-174)では、図書館のことを、通時的に見るならば記録資料の保存、累積によって世代間を通しての文化の継承、発展に寄与する社会的記憶装置である、と説明している。

(17) 例えば、大垣市立図書館には松尾芭蕉関連の本が充実している。地域事情を知らない場合だと、「なぜ松尾芭蕉の本が集められているのだろう」と疑問に思うが、そこで、「大垣は松尾芭蕉の『奥の細道』の終点地なのです」と背景を説明されると、俳諧にゆかりのある土地であることがわかり、大垣の歴史や文化の一端を書架を通して体感することができる。

(18) ここで述べたことは、他の教育的な文化施設、例えば博物館や郷土資料館にもほぼあてはまる特性であるが、一般的に博物館や郷土資料館が地域文化の保存と提供機能を持っていることは容易に理解できるとしても、図書館は「本を保管したり貸出をする場所」としてのみとらえられ、地域文化との関連性は認識されにくいと思われる。山崎・蛭田(2008, p.230)は、地域情報に関わる機関として、図書館、博物館、美術館、文書館、行政情報センター、研究機関、学校、出版社、新聞社、放送局などをあげたうえで、「なかでも図書館は、そのほかの機関と比較して資料を継続的・網羅的に収集していることや収集した資料の提供対象の幅広さなどから考えて、特に重要な機関として位置づけることができる」と述べているが、こうし

た図書館の重要性を理解し、「観光と図書館の融合」という発想を展開していくためには、まず、地域文化にとって図書館の特性がどういう意味を持つかを認識されることが必要である。

(19) 植松(1998, p.9)は、「90年代に入ってから、公共図書館の次の発展段階は“滞在型”図書館であるといわれている。(中略)利用者は借り出す資料を見つけたらすぐに帰ってしまうのではなく、館内で読書をしたり、他の図書館サービスを楽しみ、長時間を館内で過ごすことができるのが滞在型図書館である」と説明している。

(20) 佐藤(2003), p.10

(21) 例えば、内田(2004)は、『観光文化論』において「第9章　観光文化と生涯学習」と一章を割いて生涯学習時代の観光について論考している。そのなかで、「まさに観光旅行は見聞を広め、自己を発見し、自己実現に向かう、誰でも楽しくできる生涯学習の一分野ということができる」(p.210)と述べている。

(22) これに関連して、岡野(2004, p.39)は大英博物館やルーブル美術館など優れた社会教育施設が世界中から多くの人々を集めていることを指摘したうえで、これらの施設は「観光施設」ではないが「魅力ある施設・場所」であると指摘している。そして、須磨海浜水族園初代館長吉田啓正氏の「優れた社会教育施設は、優れた観光施設たりうる」という発言を紹介している。

第3章　融合の可能性についての具体的考察

1　本章の説明

1-1　概要

本章において、観光と図書館の融合の可能性について具体的な考察を行う。考察にあたっては図書館の側に軸足を置き、図書館の様々な要素や機能、図書館と地域社会との関わりなどから、観光とどのように融合する可能性があるかについて、参考事例などを含めて考察する。その際、考察をするだけでなく、融合のあり方や具体的な方法などに関する提案も適宜含める。

また、たんに項目を列挙するだけではわかりにくいので、分類方針を設定し、関連するとみられるものはまとめるなどにより、項目の分類と整理を試みる。これにより、項目の位置づけや項目どうしの関連が把握しやすくなり、融合の目的や効果についてもイメージしやすくなると考えたからである。

各項目の説明にあたって、基本的な記述構造は以下とした。

(1)説明　　:その項目に関する基本的な説明。必要に応じて用語や概念も説明した。
(2)参考事例　:融合を検討するにあたって参考になると思われる事例。
(3)分析　　:融合の可能性や効果などについての分析および考察。
(4)備考　　:補記、特記、課題の指摘など。
※参照すべき項目がある場合は、「(→A-2-1)」などにより参照先を示す。

1-2　分類方針について

項目の分類にあたっては、以下を基本方針とする。

まず大分類として、図書館自体が持つ要素に着目し、「図書館の基本的な要素との関連」という項目をたてた。これをさらに「資料」、「サービス」、「施設」に分類し、それぞれに属すると思われるものを仕分けする。

次の大分類として、図書館が地域住民のための社会教育施設であることから、図書館をとりまく地域社会との関連に着目し、「地域社会との関連」という項目をたてた。これは、こんにちの観光も地域との関係が重視されるようになってきていることに対応している。この項目をさらに「まちづくりとの関連」、まちづくり以外の「様々な連携」、より広く地域との関連でとらえた「交流の場としての図書館」に分類する。

次の大分類として、昨今のインターネットの発達においては、地域社会のみならず広くインターネットとの関連も重要になるので、これに着目して「インターネットの発達との関連」という項目をたてた。これはこんにちの観光もインターネットの発達を考慮せずにいられない状況に対応している。この項目をさらに、まず図書館が行っている資料のデジタル化について「デジタル・アーカイブズによる情報提供」としてまとめ、次に「情報発信の多様化」についてまとめ、さらに「ネットコミュニティの影響」としてまとめる。

最後に、これまでの分類におさめにくいものを「その他」として扱う。これには「図書館への視察・見学」と「図書館とツアー」が含まれる。

なお、見出し番号については、参照時に本章の分類項目であることを判別しやすくするため、大分類番号をそれぞれ、A、B、C、D、とし、中分類以下を枝番号で付与する。

項目一覧表は表3-1にまとめる。また大分類項目間の関係イメージを図3-1で示すこととする。

1-3　参考事例について

観光と図書館の融合を考察するうえで参考になると思われる事例を、『図書館年鑑』、新聞、雑誌、HP、メールマガジン、ブログなどから筆者の判断により採集した。また、直接図書館へ取材したものや図書館アンケートの回答なども含んでいる。

ここで紹介した参考事例は、その当事者は特に「観光」あるいは「観光との融合」を意識していないものがほとんどである。しかし、それゆえ「観光との融合」というこれまでになかった視点からそれらを再検討することによって、まったく別の効果や可能性が見えてくることに意義があると考える。

なお、事例中の図書館名は、自治体合併などで変更になっている場合に、参考文献などとの整合性を保つため旧名のままとしたものもある。

表 3-1 項目一覧表

A 図書館の基本的な要素との関連
- A-1 資料
  - A-1-1 地域資料
  - A-1-2 地域テーマに沿った蔵書
  - A-1-3 コレクション・文庫
  - A-1-4 資料全体との関連
- A-2 サービス
  - A-2-1 レファレンスサービス
  - A-2-2 イベント・行事
  - A-2-3 様々なサービスとの関連
- A-3 施設
  - A-3-1 設計やデザインの効果
  - A-3-2 複合施設の効果

B 地域社会との関連
- B-1 まちづくりとの連携
- B-2 様々な連携
- B-3 交流の場としての図書館

C インターネットの発達との関連
- C-1 デジタル・アーカイブズによる情報提供
- C-2 情報発信の多様化
- C-3 ネットコミュニティの影響

D その他
- D-1 図書館への視察・見学
- D-2 図書館とツアー

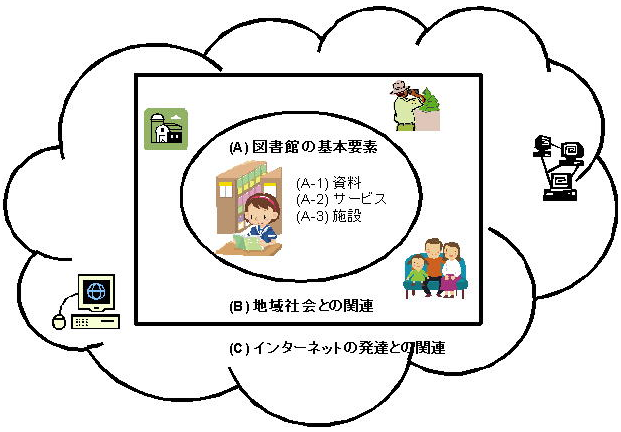

図 3-1 大分類項目間の関係イメージ

2　分類別にみた各項目の説明と分析

(A) 図書館の基本的な要素との関連

まず、図書館の基本的な要素である「資料」、「サービス」、「施設」それぞれについて、観光と融合しうるどのような可能性が秘められているのかを考察する。

(A-1) 資料

図書館の最も基本的な要素は所蔵されている資料である。では図書館の資料は、どのように観光と融合する可能性があるだろうか。これについては、以下にあげる様々な観点からの考察が必要である。

まず、前述したように、こんにちの観光にとって「地域」がひとつのキーワードになっていることを考慮すると、地域のことを知るのに適当な資料が図書館にあるかどうか、それらは他では入手しづらいものかどうか、を確認しなければならない。そうした資料がもし訪問地の図書館にあれば、観光者の地域への理解が深まり、観光体験も豊かなものになると考えられる。

次に、それぞれの図書館が置かれた地域の特性や文化を反映した蔵書構成がみられるかどうかについて、確認をしなければならない。このような「地域性を反映した蔵書」があれば、観光者は、図書館の書架を通じて地域文化を実感したり、蔵書によって多くを得ることができる。

さらに、図書館の資料が何らかのオリジナリティを持つことがあるかどうかを確認したい。他の図書館にないユニークな資料を所蔵することは、その図書館の個性と魅力を高めることにつながり、観光対象にもなりうる可能性を秘めていると考えられるからである。

そして最後に、「地域」や「ユニークさ」という視点を越えて、図書館の資料を総体としてとらえた場合に、観光とどのような融合の可能性があるかについても考察をしておく必要がある。これは図書館の利用方法やサービスなどとも関連するので、「資料」という分類のみにとどまらない内容になるが、本研究では便宜上「資料」の分類に含めて考察する。

これらをもう一度まとめると、次の四つの問いを検討する必要がある。

①地域のことを知るために役立つ資料には、どのようなものがあるか。

②蔵書が地域文化を反映することはあるだろうか。

③他の図書館にはないユニークな資料を所蔵するケースがあるか。

④図書館の資料全体でみて、観光と融合する可能性があるか。

(A-1-1) 地域資料

(1) 説明

まず、「地域のことを知るために役立つ資料には、どのようなものがあるか」という問題意識に基づいて考えてみよう。

図書館の資料は、そのほとんどが「普通に市販されている図書」というイメージがあるが、実際には、各館において、なかなか通常では入手しにくい地域独自の資料を多く所蔵している。これを「地域資料」(あるいは「郷土資料」)といい、主な種別としては、①地域に関する資料および情報、②地域で発行・発信された資料および情報、③地域の在住者・出身者が発行・発信した資料および情報、④地域に関連のある資料および情報、⑤特別コレクション、などがある(1)。

地域資料の具体的な例をあげると、地方出版物(図書や雑誌)、地方紙、コミュニティ誌、地図、行政資料などであるが、図書館によっては地域に関するポスター、絵はがき、新聞の切り抜き、折り込み広告、小冊子、NPOやボランティア団体の活動記録などを収集していることころもある。また地域に関する点字資料、写真、マイクロフィルム、16mmフィルム、レコード、磁気テープなどの視聴覚資料も収集対象となる。さらに、古文書、写本、美術品、博物資料、原稿などを収集している図書館もある。このうち「行政資料」というのは、公報、広報誌、行政報告、議事録、議案書、計画書、予決算書、監査資料、調査報告などである(2)。

図書館法(第三条)により、図書館は地域資料(郷土資料、地方行政資料)の収集に努めるよう明記されている。また、『図書館ハンドブック』(日本図書館協会編, 1985, p.212)で「特定の公共的奉仕圏をもつ図書館は、その地域内に関するあらゆる資料(情報)の収集と利用について、他に転嫁できない最終的な責任をもつ」と説明されるように、文書館や資料館などの類縁機関がない場合は、その地域資料の存在を把握し、収集し、分類し、保存し、継続的な提供を行う役割は、地域の図書館が担うことになる。廣瀬(1990, p.212)は「公共図書館はその所在地域に根ざし、所在地域の特色を活かして運営されなければならない。従って、郷土資料こそ公共図書館における基盤的資料・中核的資料というべきである」と指摘している。

(2) 参考事例

札幌市立中央図書館を例にすると、同館では「さっぽろ資料室」という独立した区画に地域資料が集められている。蔵書数は約7.7万冊で、そのうち約3万冊が開架されている(2007年4月時点)。ここには札幌および北海道に関する様々な資料があり、例えば、タウン誌、情報誌、同人

誌、札幌や北海道を舞台とする文学やエッセイ、あるいは道内出身の作家の著作、地図、ガイドブック、道内会社史、道内市町村史、道内大学の紀要、道内に関連した写真集、道内産業統計、道内に関する事典や図鑑などの他に、「円山動物園だより」「道立近代美術館紀要」「北海道開拓史記念館だより」などもある。また、アイヌ民族資料、畜産業や獣医学のコーナーが充実していたり、「札幌オリンピック」に関する資料も集められている。視聴覚コーナーには、札幌ゆかりの資料として、伊福部昭のCD、札幌交響楽団のCD、道内の自然などを紹介したDVDやビデオがある。

上記は一例であるが、規模の大小に差があるものの、ほとんどの図書館で地域資料は所蔵されている。地域資料は印刷部数が少なかったり全国的に流通されにくいため、地域の図書館が収集しないと入手が困難になる場合が多い。

(3) 分析

「地域資料はその地域の利用者にとって重要かつ有用であるばかりではなく、他の地域、国内ばかりではなく、国外の人々にとっても役立つ情報および情報源となり得る。その意味ではどんなに規模が小さくても世界に向けて発信できる情報なのである」(阪田, 2006, p.151)と指摘されるように、地域資料は地域住民のみならず広く重要なものである。特に、昨今の観光において、様々な意味で「地域」がキーワードになっていることを考えると、地域資料の持つ役割は今後もますます高まるだろう。

地域資料は、観光との融合で考えると、大きく以下2つの点で重要である。

①観光者の情報源として

観光者が、訪問先の歴史や文化、行政、経済、社会など様々な情報を得るのに、図書館の地域資料は極めて重要である。例えば歴史面でいえば、町村合併などによる地名や境界の変遷、あるいは様々な機関や団体の創立・創業、廃止や移転などの情報を探すことができる。

文化面でも、同人誌やミニコミ誌などによって地域の文化活動を知ることができる。地域にある神社・仏閣、記念碑、銅像、著名人の生家などの観光資源についてより深く知ろうとする場合にも地域資料が役立つ。他にも行事、郷土芸能、民話・伝承、郷土料理、名物、特産品、気候・風土、植物・動物の生態系、等々に関する情報が得られるなど、図書館の地域資料は郷土資料館に準ずる情報を提供できるといえる。しかも、どういう資料を調べたらよいかわからない場合には、レフ

ァレンスサービスを受けることもできる(→A-2-1)。また、地域資料はインターネットで探せないものが多く、こうした資料を実際に見ることが、図書館への訪問動機にもなる。

近年、観光者が能動的、主体的な傾向を持つようになり、学習意欲への高まりをみせていることを考えると、地域理解に役立つ情報が図書館に豊富にあるということが認知されるようになれば、観光者の図書館への訪問も増えると考えられるのである。

②地域住民のまちづくりの情報源として

「まちづくりは、まず地元を知ることから始まる」とよく指摘される(3)。この点で、図書館の地域資料は、まちづくりのために最も重要な資料のひとつである。なぜなら、まちづくりにあたっては自己検証を繰り返し行うことが不可欠であり、自己検証によってまちの長所や短所を明確にし、長所を伸ばすことにつながるが、そのためには資料の蓄積と参照が不可欠だからである。

また地域資料は、伝統文化の見直しや産業振興の手がかりになるし、地域の隠れたエピソードや忘れられた偉人などを資料の中から再発見することもあるだろう。いわゆる「地域のお宝発見」のヒントが地域資料に潜んでいる可能性は十分にある。

さらに、まちづくりにあたっては地域の歴史に着目することが特に重要である。米良(2008, p.17)は「人気のある観光地に共通する条件の一つは、歴史である」と重要性を指摘しているし、石田(2004)も観光振興における郷土史の重要性を強調している(4)。地域資料のなかでも歴史関連資料は基本的なものであるが、こうした観点からも資料の有効活用が図られるべきである。

また、例えば農林試験場や水産試験場の報告書などが図書館に置いてあれば、そこで開発された技術に関する情報を地域住民が共有することができる。このように様々な地域資料を「まちづくりのヒントが含まれていないか」という観点で見直すことも必要である。

地域資料を図書館で保存するのは地域の様々な記録を後世に残すためであるが、この考え方を発展させると、「図書館自身が地域に関する記録を残す」という発想も考えられる。このようなスタンスに立って、積極的に地域文化の保存やまちづくりに貢献するという図書館の役割も考えられるべきである(5)。

また、こうした地域資料はたんに保存されるだけではなく、展示会や各種イベント(→A-2-2)で活用したり、「課題解決型サービス」など新たなサービス(→A-2-3)の原資にもなりうる。さらにこれからのインターネット時代においては、地域資料のデジタル化(→C-1)を進めることも重要であるし、自治体や図書館からの情報発信のコンテンツ(→C-2)としても大いに活用すべきだろう。

また、地域資料の収集にあたっては、地域に存在する様々な団体や機関との接触や情報提供

の協力依頼が不可欠となるが、そうした交流のなかで図書館が地域文化の推進役として、あるいは交流の仲介者としてはたす役割も重要であると指摘されている(6)。図書館が地域資料の収集に努めることによって、地域内の交流が活性化し、図書館自身の情報拠点としての存在価値のアップあるいはアピールにもつながるのである(7)。

(4) 備考

このように地域資料は観光やまちづくりに様々な面で有用であるが、大きな課題もある。それは、地域資料が図書館にあるということがあまり知られていない点である。図書館に地域資料があることを観光者が知らないと、図書館で地域に関する情報が得られるとは思いつきにくい。同様に、地域住民も地元に関する様々な資料が図書館にあるということを知らないと、まちの歴史や文化を知ろうとした時に図書館に行くことが思いつきにくい。国立国会図書館(2007, p.1)も地域資料に関する調査結果をふまえて「地域の活性化や市民の課題解決に生かすために積極的に取り組んでいるところは、少なかった」とコメントしており、また大塚(2008, p.228)も、地域資料は図書館がもつ重要な「資源」のひとつだが、従来あまり注目されてこなかったのが残念であると指摘するなど、地域資料が十分には活用されていない状況がうかがわれる。

地域資料がまちづくりにはたす可能性や、観光者にとっていかに有用な資料であるかを図書館および地域は改めて認識し、その存在をアピールし、より有効に活用されるように努力すべきである。例えば配架や展示の工夫、所蔵目録や内容紹介パンフの作成などによって地域資料の活用を図る必要がある。特に「地域資料が観光者にも有用」という視点はこれまであまり指摘されてこなかったので、観光担当部署や観光案内所との連携も試みられるべきであろう。どのような地域資料があって、それがどのように役立つかを「観光振興」というテーマから再検討してみると、図書館が収集した地域資料の有効活用につながると思われる。

(A-1-2) 地域テーマに沿った蔵書

(1) 説明

前項であげた「地域資料(A-1-1)」とは別に、図書館の蔵書が地域文化をわかりやすく反映している事例があるとすれば、それは観光者にとっても有益である。

そこで、地域文化を理解するのに役に立ったり、地域性を感じられるような資料群が図書館にあるかを調べてみると、地域文化に関連する資料を重点的に収集している図書館が多いことがわ

かった。例えば、府中市立中央図書館では府中市に競馬場があることから「馬」に関する資料、宇治市図書館では宇治茶の産地であることから「茶」に関する資料をそれぞれ収集しているなどである。これを本研究では「地域テーマに沿った蔵書」と名付けておく。これらは「○○コーナー」などにより一箇所にまとめられることが多く、図書館の個性を形成するとともに、地域文化を理解するのに重要な資料である。

なお、図書館では地域住民のニーズに配慮して資料を購入しているため、例えば、ガーデニングが市民の間で盛んな地域であれば園芸関連の図書が豊富に揃えられるなどの傾向もみられる。これも広い意味で地域性が感じられる蔵書といえる(8)。

(2) 参考事例

前述した府中市立中央図書館(馬)や宇治市図書館(茶)のように、地域文化に関連する資料を所蔵している事例を別紙1のリストにあげた。リストにあげた以外にも、多くの図書館で地域に関連した様々な資料の収集を行っている。

(3) 分析

こうした資料群は、一冊一冊でみればごく普通の一般的な図書であることが多いが、一貫したテーマ(＝地域との関連性)に基づいて蔵書が構築されている点がポイントである。コーナーの前に立った時、観光者はまず書架全体を通してその地域のイメージを具体的に体感することができるし、もちろんそれぞれの資料から様々な情報を得ることができる。図書館も、コーナーの演出を工夫したり、資料を紹介するパンフレットを用意するなどして、せっかく集められた資料群を「地域文化のアピール」という観点でも有効活用すべきである。

また、図書館にとって「地域資料」は資料の収集や整理に相当の手間を必要とするが、「地域テーマに沿った蔵書」の場合は、テーマに沿って資料を集め、コーナーを充実させていくことは比較的容易にできる。その際には、オンライン書店などでたんに書名やキーワードで検索するだけでは捕捉しえない資料を丹念に拾い集めていくことにより、図書館ならではの優位性を示し、あまり知られていない埋もれた資料との出会いを利用者にもたらすことを考慮すべきである。

こうした資料群は、地域住民にとっても、折にふれて地域文化を意識したり学習するための重要な資料となる。例えば、産業遺産が有名な地域であれば、観光者は住民の誰もがその産業に詳しいと思いがちだが、実際にはそうもいかない。そこで図書館が関連図書を揃えたり、わかりや

すい資料を紹介したり、勉強会を行うなどによって住民の関心を高め、それにより地域全体のホスピタリティ向上につながることが期待できる。このように地域テーマに沿った蔵書を揃えて活用することにより、地域文化にまつわる住民の教養をアップさせ、観光振興にも役立つ。

また、まちづくりの際に、「わが○○市といえば△△」というイメージを設定したり、地域文化のコアとなるテーマを育てていこうとする場合は、図書館と連携して、それに関連する資料の充実が図られるとよい。地域イメージをアピールする方法として、モニュメントを設置したり△△記念館などを設立する方法もあるだろうが、「図書館で関連する資料を集める」という方法も考えられてよいと思われる。

なお、こうした蔵書の中には、一見すると関連性が地域外の者にわかりにくい場合もある。「なぜこれらのテーマに基づく資料群がこの図書館にあるのか」を、適宜パネルなどで解説することも必要である。

前項「地域資料」と本項「地域テーマに沿った蔵書」は、地域の観光資源に関する知識を観光者に与えるのに特に有効であり、観光の様々な場面で有効に活用されることが望ましい。

(A-1-3) コレクション・文庫

(1) 説明

「地域資料(A-1-1)」や「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」はともに「地域」がキーワードであるが、他に図書館の資料が独自の魅力を持ち、観光と融合する可能性があるかを調べてみると、「コレクション」や「文庫」という有力な要素があることがわかった。

図書館では、通常に購入した資料の他に、なんらかの由来を持つ蔵書群を所蔵している場合がある。一般にこれらは「○○コレクション」とか「○○文庫」などと呼ばれる。由来は様々であるが、よくみられる例としては、旧家の資料、個人蔵書の寄贈、企業や団体が収集した資料の寄贈などである。(以下、「コレクション」と「文庫」を合わせて「コレクション」とする)

旧家の資料の場合は、地域との間に大いに関わりがあるが、個人や企業に由来するコレクションの場合は、資料自体は必ずしも地域性を持つとは限らない。しかし、その個人や企業が地域となんらかの関連を持つこと(例えば生誕の地であるとか創業の地であるなど)が多く、その意味では、地域とのつながりをそこから感じることができる。

個人コレクションの場合には収集した人の想いや学問的な背景、団体コレクション場合は団体の活動との関連などをうかがい知ることができるため、その個人や団体に関心がある者にとっては

非常に魅力を持つものであり、ある意味で記念館に相当する価値を持つともいえる。

(2) 参考事例

例えば、長岡市立中央図書館では以下などを所蔵している。

－伊東多三郎文庫（歴史関係資料）

－笠輪勝太郎文庫（長岡市郷土資料関係資料）

－川上四郎文庫（絵本・児童画関係資料）

－斎藤和代文庫（教育関係資料）

－酒井洋文庫（工学関係資料）

－反町茂雄文庫（長岡市郷土資料関係資料）

－星野慎一文庫（ドイツ文学関係資料）

－堀口大学コレクション（堀口大学関係資料）

全国の図書館には様々なコレクションがあるが、いくつかの事例を別紙1のリストにあげた。

(3) 分析

コレクションは、由来も含めてその全体で独自の魅力を持っているし、一冊ごとにみても、他では閲覧できない貴重書や絶版などを含んでいる場合が多いので、コレクションの所蔵は図書館のオリジナリティを高める重要な要素である。コレクションを閲覧するために、所蔵している図書館を訪問するという動機は十分に考えられる。そしてたんに図書館でコレクションを見るというだけにとどまらず、そこから地域への関心や親しみへとつながることもありうる。

ここで注意したいのが、「地域資料」や「地域テーマに沿った蔵書」の場合には、図書館の利用に慣れた人であれば、「ここの図書館に行けばこういう資料があるだろう」という推測がある程度できるのに対し、コレクションの場合は、あらかじめ情報を得ておかないと、推測は極めて難しいという点である。コレクションの閲覧が観光動機になりうるということを図書館も自覚して、自館のコレクションをHPなどで情報発信すべきである。また、コレクションに関する解説をパネルにしたり専用のパンフレットを用意したり、地域との関連をわかりやすく示すなどして、地域外からの来館者に対する配慮も工夫したほうがよい。

一方、地域住民も、地域の図書館にどのようなコレクションがあるのかを確認し、それがまちおこしにつながる可能性を検討するとよいだろう。コレクションの由来や寄贈者の略歴を掘りおこして

みたり、関連する場所（例えば生家や碑など）との連携を図るのも一案である。なお、これは「地域テーマに沿った蔵書」が「地域の特色をふまえて蔵書を構成する」という行為であるのとは逆のベクトルで、「蔵書からまちおこし」という発想になる。

またコレクションは記念館や資料館に準ずる情報量を持つことがあるので、すでにその寄贈元の個人や団体の記念館などが存在する場合は、そうした施設との連携を図ることも大切である。

なお、読書家や本のマニアには「他では閲覧できない図書がある」というだけで十分な魅力を持つ。従って、ここであげたような「コレクション」といえるほどまとまったものではなくとも、その図書館にしかない貴重書や特別な来歴をもつ蔵書は、自館のオリジナリティとして大いにアピールすべきである。

(A-1-4) 資料全体との関連

(1) 説明

これまで、「地域資料(A-1-1)」、「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」、「コレクション・文庫(A-1-3)」という3つの観点から図書館が観光に寄与しうるものがあるかについて考察を進めてきた。ここで、そうした地域特有の資料や個性的な蔵書にとどまらず、図書館の基本的な機能である「様々な資料を保有・提供する」という点に立ち返り、考察範囲を広げてみる。すなわち、「図書館の資料は全体として観光とどのように融合しうるか」という問題意識に沿って、観光との融合について考察を進めてみよう。

(2) 分析

まず、図書館の資料が、観光中の様々な疑問を解決したり、関連する情報を得るのに役立つということがあげられる。観光において体験や学習が重視されるようになってきているため、観光者が観光対象に向ける問題意識も高まり、信頼性のある情報へのニーズも高まる。最近は情報を入手するのにインターネットがよく利用されているが、観光中にインターネットが使える環境にあるとは限らないし、インターネット上での検索が苦手な人もいるだろう。しかもインターネット上の情報は玉石混交で、すべてを信頼するわけにはいかない。図書館に行けば自分で調査できるのはもちろんのこと、レファレンスサービス(→A-2-1)を利用して、安心して情報を入手することができる。

また、地域資料を事典や図鑑類と組み合わせて利用すれば、エコツーリズムや歴史観光などにおいて効果が期待できる。自然観光、産業観光、文化観光というように観光のテーマが多様化

すると、観光者が求める情報も多様化するが、様々な資料を保有する図書館であれば、一般的なテーマのみならず、SIT(Special Interest Tour)的なテーマにも蔵書によって対応できる可能性を持っている(9)。羽田(2008, p.105)が、観光対象に関する知識が旅行者にあれば、得られる効果はより大きいものになると指摘するように、観光において図書館の資料をいかに活用するかは、これからの大きなポイントである。具体的には、

－ツアーの開始前や最後に図書館で学習をする(10)

－図書館でガイド養成講座を開催する

－産業遺産に関する地域資料をまとめたファイルを充実させる

などが考えられる。

あるいは逆に、広島市まんが図書館のように、特定のテーマに蔵書を集中させるという発想も考えられる。

また、最近は滞在型の観光に関心が高まっているが、滞在型の観光においては、滞在中の時間をいかに豊かに過ごせるかがポイントになる。そこで図書館が提供する読書もその選択肢のひとつとして考えられるべきである。実際に「読書コーナー」が充実している施設も登場してきており、そこに滞在客への配慮をみてとることができる(11)。図書館は本を無料で借りることができるし、立ち読みもできる。自由に好きなだけ本が読める場所があることは、長期滞在者やセカンドハウスを保有している者への娯楽提供という点で重要であり、地域外から滞在者が多く訪れる地域では、図書館を充実させることもおもてなしのひとつになりうる。おもてなしという点でいえば、海外からの観光者に対しても、いわゆる「多文化サービス」の一環として、各国語によるガイドブックや対訳辞典を揃え、さらに地域で作成した各国語に翻訳したガイドマップなども配布することによって、便宜を図ることができる。

また、「地域テーマに沿った蔵書」で述べたことに関連するが、まちづくりの際に図書館の蔵書を効果的に役立てるという発想が考えられる。例えば「アートをテーマにまちおこしをする際に、図書館にも画集を充実させる」というように、まちづくりのテーマに応じて、図書館の蔵書構成を工夫することで、観光者に対して資料館的な役割を提供し、まちの印象をアップさせることができる。これによって観光者のみならず、ふだん図書館を利用している地域住民に対しても、まちづくりのテーマへの関心を高めることにつながる。

さらに、金武(2002, pp.132-133)は「観光は経験的価値を創造する行為である」として、具体的に「娯楽経験」「教育経験」「審美経験」「脱日常経験」の4つの経験価値に注目するよう主張しているが、図書館はこれらに対応しうるものを有していると考えられる。すなわち、①娯楽経験＝

娯楽としての読書、②教育経験＝教育（学習）効果をもたらす読書、③審美経験＝画集や写真集、あるいは装丁やデザインの凝った本を読むこと、④脱日常経験＝高額本や貴重本、あるいは他では入手しづらい資料との出会い、と対比できる。このような図書館がもたらす経験と観光がもたらす経験との接点をふまえ、両者の効果的な活用方法を考えることも大切である(12)。

(A-2) サービス

さて、これまで図書館の基本的な三要素（資料、サービス、施設）のうち、「資料」について述べた。

図書館は資料を保管したり、本の貸出を行うことが主な業務であるという印象があるが、それ以外に図書館が提供するどのようなサービスが、観光と融合することがありうるのかについて考察を行う。

(A-2-1) レファレンスサービス

(1) 説明

図書館には多くの資料があるが、「自分が求める情報はどの資料に書かれていれるか」「この本を探しているが、どこの書架にあるか」など、資料を探すのが困難な場合もしばしば起こる。こうした時には、図書館員にサポートをしてもらうことができる。これを「レファレンスサービス」という(13)。

レファレンスサービスはすべての図書館で行われているサービスで、規模の大きい館では専用窓口を設けていることもある。図書館では、レファレンスサービス用の資料を充実させたり、よく質問される事項に関するファイルを用意したり、質問者の意図を正確に把握するためにインタビュー技術を研修したりという努力も行われている。

レファレンスサービスは、窓口で職員に直接問い合わせるだけではなく、電話や手紙などでも問い合わせが可能である。従って、観光の事前事後に疑問を解決する際にも活用できる。例えば、修学旅行などで訪問を予定している地域の図書館に、事前に適当な文献を紹介してもらうような問い合わせもよくみられる(14)。

(2) 参考事例

国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」の中から、地域文化に関連する事例をいくつか紹介する。（レファレンス協同データベース http://crd.ndl.go.jp/jp/public/ downloaded

at 2009.12.15)

－「越谷市荻島のあたりに昭和20年頃、ロンデン飛行場というのがあったが、これはいつできて、いつなくなったのか」

－「香川県の三十三観音について調べたい」

－「昭和30年頃の名古屋市の地図が見たい」

－「讃岐伝統工芸のかがり手まりの作り方を知りたい」

－「福井弁で「あばた」「あばたずら」のことを、「めっちゃ」とか「みっちゃ」とかいうらしいと聞いたが、どうなのか」

－「谷川俊太郎が作詞した合唱曲「きつねのちょうちん」というのがあって、愛媛の民話がもとになっているそうだ。その民話を見たい」

－「昭和初期に久喜駅で駅弁を販売していた「富壽館」（ふじかん）について記載のある資料を見たい」

－「富田林市西板持地区に立っている、古い道標（石標）の文字は何と書いてあるのか」

－「岐阜県の地場産業に関する施策の概要が分かる資料はないか」

－「イッチョライ節」（福井県）「御前踊り」（福井県大野市）の振り付けが詳しく書かれた資料はないか」

これらはほんの一例であり、多くの図書館で、地域文化に関する質問がレファレンスサービスに寄せられている。そのため地域文化についてよく訊かれる質問をまとめてファイル化している図書館も多い。

(3) 分析

レファレンスサービスは利用者と図書館の資料を結びつけるためのサービスであるが、これを観光の場面で考えてみると、観光者に地域の情報を提供する手段として重要な役割を担いうる可能性があることに気づく。昨今はインターネット上の検索エンジンを利用したり、観光協会や自治体、口コミなどで観光情報を入手することが多いが、地域固有のローカルな情報については、キーワードによる検索ではうまくヒットしないことがあるし、そもそもインターネット上にデータがない場合も多い。また文献で調べたいと思っても、どのような資料があるかをインターネットで調べられないことも多い。レファレンスサービスを活用することで、観光者は訪問地に関する的確な情報を得られるし、また実際の資料を閲覧することもできるため、観光体験をより深めることができる。

図書館および地域の側も、レファレンスサービスを「観光者の相談窓口」という視点でとらえ直し、「地域のことでわからないことは、どうぞ図書館でお訊ねください」という案内をしてはどうだろうか(15)。こうした対応を行うことにより、地域に関する様々な質問が図書館に集まり、それによって、どのような地域情報が必要とされているかを図書館が把握できる。さらに受けた問い合わせを分析し、行政や観光関連団体などと情報を共有して、パンフレットやガイドマップに掲載する情報を変えてみたり、観光スポットの案内板を工夫したりすることで、観光者に対するいっそうの便宜を図ることが可能になると思われる。

また、レファレンスサービスが、観光者と図書館員との直接コミュニケートであり、交流につながっている点にも注意したい。観光者は、図書館員の親切な対応や適切な文献を紹介されたことによって感動を覚え、地域に対する好感度がアップすることもあるだろう。

(4) 備考

レファレンスサービスは、図書館員の個人的な記憶に頼るのではなく、情報源となる資料を提示することが要求される。従って、レファレンスサービスに必要な資料を図書館が充実させるには費用や手間がかかる。特に地域文化についての詳細な質問に答えるためには、地域資料の目録づくりや整理が欠かせない。また観光に関する情報を提供する場合でも、図書館では宿の手配をしたり交通切符の予約などはできないので、問い合わせ内容に応じて観光案内所などとの役割分担を図ったり、図書館で回答が可能な情報とそうでないものの吟味をしなければならない。

また、そもそも図書館がレファレンスサービスを行っているということ自体が広く認知されているとはいい難いので、「観光や地域に関する情報を、図書館で問い合わせることができる」という認識も低いと推測される(16)。こうした状況を改善するひとつの方法として、図書館がレファレンスサービスを行っているということを、まず地域住民に周知することが必要である。そうすれば地域住民が観光に行った際にも、「図書館に行って訊いてみよう」と思いつくことが期待できるのである。

(A-2-2) イベント・行事

(1) 説明

地域の文化施設のなかでは公民館や市民ホールなどでイベントがしばしば行われているが、図書館でイベントをやっているというイメージはあまり一般的ではない。しかし実際には、図書館でも多彩なイベントや行事や展示会などを開催している(以下、まとめて「イベント」と称する)。イベ

ントの中には、地域文化に関連したものもしばしば行われており、観光者もこれらを見学したり参加することで、地域文化を学んだり体験することができる(17)。

『図書館ハンドブック』(日本図書館協会，2005，p.101)では「地域の専門家や展示に関心のある人たちの協力を得ることで、展示の可能性を広げることができる。思わぬ貴重資料に出会うこともある。展示スペースを一般に開放して町のコレクターを紹介したり、地域の人々による絵画展や写真展を開いたり、生け花や工芸作品展など文化的な行事や研究発表の場に利用することも積極的に行われている」と述べて、図書館で行われるイベントの重要性を指摘している。また塩見(1991，p.76)も、「図書館における企画は、豊富な関連する資料が身近に備わっている場での学習であり、それを契機として、自発的に資料を活用しての学習を継続・発展させることができるというところに大きな特徴がある」と図書館で行うイベント(企画)の特色を説明している。

(2) 参考事例

地域文化に関するものでは、例えば以下のようなイベントが行われている。

－所蔵資料展、貴重書の特別公開

－地元ゆかりの作家による講演会

－郷土史講座、地域文化の勉強会、祭りや年中行事の文化講座

－戦争体験を聞く会、地元の歴史を語る会

－観光ポスターの展示、地域の特産品の展示

文部科学省の調査によれば、2007年度の実績で、読書会や研究会、資料展示会などを実施した館は全国で2403館(全体の約76%)におよび、実施総件数は約8.3万件におよぶ(18)。

各地の図書館で行われた地域性のあるイベントのうちいくつかを別紙1のリストにあげた。

(3) 分析

図書館で行われるイベントは以下の特徴を持っている。

①比較的小規模なイベントが多いので、アットホームな雰囲気になり、参加者同士の交流も起こりやすい。またイベントの運営や講師などにボランティアが関わっていることが多いので、地域住民の活動ぶりを知ることができるし、地域のキーパースンとのつながりが生まれる。

②図書館の所蔵資料との連携が多角的にできる。例えば、地域に関するものであれば、地域史や統計などを参照することができし、地元出身作家の講演会などでは実際の作品がすぐ

読める。たんにイベントに参加するだけでなく、このように必要に応じて資料にあたることができるので、参加体験をより深めることができる。特に観光者のようにその地域になじみが薄いものにとって、この点は重要である。

図書館も、地域文化に関連したイベントが、地域外へも情報発信の役割を持つことや交流をもたらすという点に着目して、様々なアイデアでイベントを行うとよいだろう。企画内容によっては、他の地域の文化施設などと協同して、広域連携的あるいは地域横断的なイベントを開催するなども面白いと思われる。

(4) 備考

上記で考察したように、図書館で行われるイベントと観光との融合は様々なものが考えられるが、多数の集客を見込んだ派手なイベントは少ないので、開催予定を知る手段が限られる点に注意が必要である。地元の新聞などで告知されることもあるが、観光者にとって事前に情報を得にくいタイプのイベントである。図書館も、イベントの開催を自館や自治体のHPなどで広く周知するよう努力すべきである。

なお、図書館が行っているイベントや行事は、地域社会との連携からみて重要なものが多くみられるので、それらは「様々な連携(B-2)」や「交流の場としての図書館(B-3)」で扱う。また特に図書館の見学会については、「図書館とツアー(D-2)」で扱う。

(A-2-3) 様々なサービスとの関連

(1) 説明

これまで「レファレンスサービス(A-2-1)」と「イベント・行事(A-2-2)」について考察してきたが、図書館ではそれ以外にも様々なサービスを行っている。特に最近は、図書館が新たなサービスを展開しつつあり、それらとの関連について考察してみよう。

図書館が行っている新たなサービスのなかで、なんらかの課題を解決するためのサービスには特に関心が集まっており、それらは「課題解決型サービス」と総称されている。例えば、『地域の情報ハブとしての図書館』(図書館をハブとしたネットワークのあり方に関する研究会, 2005)では、「地域課題の解決支援」として「ビジネス支援」、「行政情報提供」を、「個人の自立化支援」として「医療関連情報提供」、「法務関連情報提供」を、「地域の教育力向上支援」として「学校教育支援」、「地域情報提供・地域文化発信」をあげ、さらにそれぞれを詳細に分析している。

根本(2004，p.93)は、こうした新たなサービスが注目を集めるようになった背景を、「recreationからcreationへのパラダイム転換がはかられようとしている」と分析し、一般市民への教養・娯楽施設としての位置づけだけではなく、仕事や経済面にも図書館のサービスが焦点をあてるようになったことにあるとしている。また渡部(2006，p.12)は、「現在の図書館に求められるものは、地域の実情にあった図書館サービスである。何故ならば公共図書館としての公共性を追求すると、“まちづくり”を視野に入れた図書館サービスの視点が重要だからである」として、新たなサービスを、地域の実情をふまえたまちづくりの一環としてとらえられるべきだと述べている。

もとより図書館は、所蔵資料などを通して利用者の疑問や問題の解決に寄与してきたが、「課題解決」を明示的に意識するようになったのは最近のことであり、その意味では「課題解決型サービス」は新たなサービスといえる。従って、こうしたサービスの必要性については議論もあり、そのあり方や実施にあたっての問題点などについても検討が進められている。観光と図書館の融合を考察するうえで、こうした図書館の新たなサービスに着目することは大切であるが、同時に、未知数の部分が多いという点にも留意が必要である。

(2) 参考事例

『これからの図書館像』(これからの図書館の在り方検討協力者会議，2006)では、「課題解決を支援する図書館サービス」の事例として北広島市図書館、静岡市立御幸町図書館、鳥取県立図書館が紹介されており、「多様なニーズへのサービス」の事例として倉吉市立図書館が紹介されている。また大串(2008)では、鳥取県立図書館(ビジネス支援事業)、上田情報ライブラリー(青年・女性のキャリアアップと就労支援)、福岡県立図書館(仕事と暮らしに役立つ図書館)、福井県立図書館(食育支援)、横浜市立図書館(行政支援サービス)などの事例が紹介されている。

なお、「ビジネス支援図書館推進協議会」(http://www.business-library.jp/index.html downloaded at 2009.12.15)という非営利組織もある。

(3) 分析

このような新たなサービスは、本来は地域住民のために行われるものであるが、地域外の人々にとっても大いに刺激となる。まず、こうした事例がメディアなどで紹介されると関心を集め、「どのようなサービスなのだろう」→「なぜあそこの図書館では、そのようなサービスを行っているのだろう」→「地域の実情とどう結びついているのだろう」→「実際に地域で歓迎されているのだろうか」と

いう具合に、地域への関心につながる可能性がある。このようにして、地域の課題解決に取り組む図書館の姿勢が、ある種の情報発信効果を持つことがありうる。

また、自分にとって有用だと思われるサービスの場合は、地域外であってもその図書館を訪問して体験してみたり、視察をしたり、図書館員にサービスの内容を質問するということも起こるだろう。このような訪問動機をもたらしたり、そこから交流が生まれることも十分考えられるのである。従って、新たなサービスを行う場合には、地域外にもインパクトを与えることを考慮して、地域内のみならず地域外へも周知をすべきである。

さらに、広い意味で「地域支援」という発想をとらえると、その対象は必ずしも地域住民とは限らない。例えば、ビジネス支援であれば、地域外に向けてアピールすることによって企業や人材の誘致につながる可能性がある。健康情報サービスに力を入れることで「あそこのまちは健康意識が高く、健やかに暮らせる地域だ」という印象を地域外に与えることもあるだろう。それをふまえてヘルスツーリズムと連携するなどの展開が考えられるのである。このように、図書館における新たなサービスが地域外にも及ぼす効果を考慮してみると、まちづくりや観光振興につながる可能性を持っていることがわかる。

また、今後の新たなサービスの方向性として、「観光支援」や「交流支援」という発想に基づいて、地域内と地域外の双方を意識したサービスがあってもいいと思われる。

(4) 備考

なお、前述したような「新たなサービス」のみならず、従来から行われてきたサービスについても、観光との融合という観点から見直しが可能であることを指摘したい。例えば以下などが考えられる。

①図書館が地域の団体などに資料をまとめて貸し出すサービスがあり、これを「団体貸出」という。このサービスを応用して、例えば学会やコンベンションなどが開催される際に、関連図書を会場で展示したりすることが考えられる。あるいは地域で行われる様々なツアーと連携して、必要な図書を一時的に貸与するなども考えられる。

②図書館への来館が困難な人々に配慮するサービスを「アウトリーチサービス」という。このサービスを応用して、例えば湯治客、病気による保養者、障害者グループの旅行団体などへ便宜を図るということが考えられる。点字図書は目の不自由な観光者に、大活字本は高齢の観光者に便宜をもたらすだろう。

③図書をバスや船に積んで地域を巡回するサービスを「移動図書館」という。このサービスを応用して、交通が不便な山間部や離島などにある観光地へも、巡回サービスを行うことが考えられる(19)。

④宿泊施設や観光施設などの「図書コーナー」の開設にあたって、図書館が選書や配架などをサポートすることが考えられる。

上記であげたようなサービスの実施にあたっては検討すべき点も多いと思われるが、既存のサービスを観光と融合させるアイデアについて、地域と図書館が知恵を出し合っていくことが必要である。図書館の可能性は「新たなサービス」だけにあるのではなく、既存のサービスを応用することにもあると思われる。

(A-3) 施設

ここまで「資料(A-1)」、「サービス(A-2)」について考察してきたが、次に、図書館の(物理的な建物としての)「施設」が観光とどのように融合する可能性を持つかについて考察する。

(A-3-1) 設計やデザインの効果

(1) 説明

図書館の建物はどちらかというと外見は無愛想で、内装的にも「本がただ並べられているだけ」というイメージがあるが、調査をしてみると、個性的なものや、様々な意味で楽しそうな図書館も全国あちこちでみられた。デザイン面でも、スペースの取り方や書架の配置、色遣いや家具などに至るまで細かい部分について工夫された図書館も増えている。特に「滞在型」を意識した図書館では、「図書館に来てもらおう」、「図書館でくつろいでもらう」という配慮が感じられる。

なお、最近の図書館建築については、「人と資料群が出会い対峙する伝統的な場から、新たな要素－資料が媒介する個とコミュニティとをつなぐ空間デザイン－へ志向する図書館の変貌が垣間見られる」(20)という指摘がある。図書館がコミュニティスペースとしてとらえられ、それを意識した設計がなされるようになってきていることは、交流を重視するようになってきている観光にとっても重要な意味を持つといえる。

(2) 参考事例

設計やデザインに特徴がある図書館の事例を別紙1のリストにあげた。

また現代的なデザインではなく、例えば大阪府立中之島図書館のように重厚長大風な建物が歴史を感じさせることもある。あるいは森鴎外の自宅であった文京区立本郷図書館鴎外記念室のように、建物の由来や設立の経緯などに歴史性を感じられるケースもある。

なお、設計が優れたものは表彰を受けることがあり、それにより見学者が訪問するきっかけになる。(→D-1)

(3) 分析

図書館の設計やデザインは、地域住民に親しみを持ってもらったり、アメニティ向上のためにあるので、観光者への集客効果を狙ったものではないが、特徴のある図書館であれば、見学のために訪問してみたいという気になり、観光者を呼ぶ効果も起こる。また、「行ってみたくなる図書館」や「使い勝手のよい図書館」という狙いが効果をあげている場合は、地域住民がよく利用し、愛着を持たれる図書館になっている可能性も高く、そこに観光者と地域住民の出会いのきっかけがもたらされる。

また、「ユニークな図書館(建物)を訪問したい」という動機は、図書館のファンや建築に興味がある人には特におこりやすいと考えられるし、インターネットでもユニークな図書館が話題として取り上げられることがある。(→C-3)

なお、設計やデザインの効果によって図書館の施設が観光対象になった場合でも、せっかく訪問して来た観光者に対し、建物の見物だけに終わることがないよう、地域資料の紹介などをうまく工夫して、地域理解への誘導を行うことが望ましい。

(A-3-2) 複合施設の効果

(1) 説明

前項「設計やデザインの効果(A-3-1)」でとりあげたような特徴がない場合であっても、施設が持つ特徴が観光と融合する可能性について考察してみると、注目すべきケースが2点ほどあるように思われる。

ひとつめは、博物館や郷土資料館などの文化施設と併設(あるいは隣接)した「総合文化センター」のようなケースである。最近は複合施設の一部として図書館が建設されるケースもみられる。

もうひとつは、鉄道駅や道の駅など交通関連施設に併設(あるいは隣接)した図書館の事例である。これも全国に多く存在する。薬袋(2008)は、「最近は駅前に図書館をつくる自治体が増え

ていて、にぎわい創出や中心市街地活性化などが期待されています」と述べてまちづくりとの関連を指摘する(21)。また桂(2001, p.154)も、「駅前再開発などで、地域開発の中心的な施設として図書館が位置づけられることが多くなっているのです。図書館には集客力があるからです。多くのユーザーが利用するため、新しい市街地を計画する際に、その地域の商店街などが活性化するという見込みによるものです」と、図書館の立地条件が重要であることを指摘している。

(2) 参考事例

例えば駅舎に併設して効果をあげている事例として、舟橋村立図書館がよく知られている。こうした複合的な施設に関連した図書館の事例を別紙1のリストにあげた。

また、「複合施設」をより広くとらえると、カフェや物販コーナーなどを併設する図書館も増えてきており、これによって利用者にリラックス効果や交流をもたらしている。

(3) 分析

他の施設と併設あるいは隣接されている場合は、観光者にとって移動の負担が少ないし、図書館の存在にも気づいてもらえるので、相乗効果による利用が期待できる。しかし図書館が様々な点で観光や地域文化の理解に役立つということが、まだあまり知られていないので、観光中に図書館を利用しようという考えがおこらず、博物館や郷土資料館などと隣接されていても、図書館だけ素通りされてしまうこともあるだろう。複合施設全体でお互いをうまくアピールし、例えば「お帰りには、図書館もご利用ください」と誘導をしたり、郷土資料館で質問を受けた係員が「図書館に行くと、関連する資料がありますよ」と案内するなどの連携が必要である。また、博物館や郷土資料館、美術館などはしばしば団体見学も行われるので、見学後のルートとして図書館を組み込んでおき、見学内容を図書館の資料でさらに深く掘り下げるといった連携も考えられる(22)。

駅舎や駅ビルと一体化していたり駅の近くに図書館がある場合は、観光者が列車の発車待ちや乗り換えのため時間つぶしに図書館を訪問するという動機がありうる。道の駅の場合では休憩やトイレの利用などに併せてぶらりと訪問するということが考えられる。このように特に目的意識がなく訪問した観光者に対しても、ディスプレイや案内などを工夫すれば、観光情報や地域の魅力をうまく発信することができる。それをきっかけにして、観光者が予定外の観光を追加することもあるだろう。また「駅」という施設自体が、観光において独自の役割を持っているといえるので、ターミナル性を持った施設に隣接した図書館では、「情報センター」的な役割を持たせることも考えられ

る[23]。

さらに、カフェや物販コーナーなどのスペースをうまく利用して、交流イベントや地域の物産展示などを行うことも考えられる。

(4) 備考

ここで、観光者に対する図書館の利便性についても考察をしておこう。

最近の図書館は、開館時間が夜間まで延長されたり、祝日や休日も開館するなどの傾向がみられる[24]。こうした傾向は観光中に図書館を訪問するのに都合がよい。また、地域住民以外への貸出を認めている図書館も多いし、返却用に市内各所に返却ポストを設置しているところもある。こうした配慮により、観光者が現地に滞在中に本を借りたり返却することが容易になる。

(B) 地域社会との関連

これまで、図書館の基本的な要素(「資料」「サービス」「施設」＝分類A)における観光との融合の可能性について考察を行ってきた。しかし、図書館は地域とかけ離れて独立した存在ではなく、地域と密接に関わる施設である。従って、図書館の基本的な要素についての考察のみでは不十分であり、「図書館と地域社会の関連が、どのように観光と結びつくか」という問題意識による考察が不可欠である。

そこで考察の範囲を広げて、図書館と地域社会との関連から、観光との融合の可能性を考察してみる。

(B-1) まちづくりとの連携

(1) 説明

図書館が本を貸したり読書の場を提供するだけの施設でないことは、これまでにも述べてきたが、「図書館がまちづくりに関わっている」というイメージは、一般的にはなじみが薄いと思われる。しかし、塩見(2008, p.110)は「一つのまちに図書館をつくることは、それ自体がまちづくり構想にのっとった計画の一環」だと述べて、図書館の設立自体がすでにまちづくりに関わりがあると指摘している。

また、吉田(2008, p.135)は、「ニューパブリックマネージメントの導入を背景に、図書館から利用者への一方向型のサービスモデルにかわる住民参加型の図書館運営が求められるようになっ

た」として、「従来、図書館サービスの対象者としてのみ認識されていた利用者は、図書館運営に主体的に参加する存在として再規定される必要が出てきている」と現状を分析する。地域分権の動向などに伴い、図書館とまちづくりや住民活動が相互に連携しあうことがいっそう求められてきているといえる。

そうしたなかで、特に顕著な活動を行っている図書館が文献で紹介されたり、住民らによる図書館づくりの過程が実践記録として出版されたりしており、これらは図書館とまちづくりの関わりを知るうえで貴重な手がかりとなる。

(2) 参考事例

まちづくりとの連携というテーマでよく知られている事例としては、浦安市立図書館、置戸町立図書館、斐川町立図書館、静岡市立御幸町図書館などがある。

また、『週刊ダイヤモンド』(2007年6月2日号、ダイヤモンド社)では、「知恵と熱意で地方が取り組む図書館を核にしたまちづくり」という特別レポートで、矢祭もったいない図書館、舟橋村立図書館、斐川町立図書館、東近江市立図書館がとりあげられている。また、『これからの図書館像』では、図書館とまちづくりに関する事例として、愛知川町立図書館の事例を紹介している。『開発こうほう』(2008年3月号、北海道開発協会)では、鳥取県立図書館、北広島市図書館、置戸町立図書館の事例が紹介されている。

上記以外にも様々な事例があるが、主な参考文献を別紙1のリストにあげた。

(3) 分析

前述したような図書館がまちづくりに関わっている事例は、観光と直接結びつくわけではないが、「観光まちづくり」を考える際には大いに参考になる。また、こうした事例が文献などで紹介されることによって、「図書館の活動が活発なまち」、「地域住民が図書館づくりに積極的に参加しているまち」といった印象を与え、地域の好感度アップにつながるという側面もある。地域と一体になった図書館の活動は、地域への寄与のみならず、地域外住民にとってもアピール効果を持つと考えられる。

『地域の情報ハブとしての図書館』(図書館をハブとしたネットワークのあり方に関する研究会, 2005, p.50)では、「公共図書館が地域情報・地域文化情報を集約し、地域内外に向けた拠点となることは、地域住民にとっても、自らの地域文化を認識することに繋がるとともに、地域への愛着

を高め、結果として地域コミュニティ全体の安定と発展に貢献するものであると言える」と指摘したうえで、「地域住民の地域文化に対する深い理解に基づき、地域の魅力を発信・アピールしていくことは、観光・訪問・移住という形で地域に還元されていくと言える」と述べ、図書館の活動が観光にも結びつくことが明確に示されている。

第1章2節「(2)地域貢献のあり方」でも述べたが、図書館が「まちづくり」との連携を改めて重要視するようになり、一方、観光も「まちづくり」から始めることが必要な時代になってきている。すなわち図書館と観光は「まちづくり」をキーワードとして共通の意識(あえていえば危機意識)を持っているのである。

(B-2) 様々な連携

(1) 説明

前項では特に「まちづくりとの連携」に注目したが、より広い観点で「連携」をとらえて調べてみると、図書館が行政当局や様々な機関・団体などと連携して活動を行っていることがわかった。そうした参考事例のなかには観光に関連するものがみられるので、観光と図書館の融合を考えるにあたってヒントになると思われる。

(2) 参考事例

図書館が行政や市民らと連携して活動している事例として以下などがある。

- 東京都立図書館が五輪誘致に合わせて、「オリンピックを楽しむ」という展示会を行った。(2008年8月8日～9月3日)
- 横浜市立図書館は、市内の全18館で横浜開港150周年に合わせた記念イベント「港の150年、この地の150年」を開催した。(2009年4月1日～6月30日)
- 山口県立図書館は、山口市と共催で「山口市中心市街地まちと文化推進事業」として「山口県立図書館 まちなかライブラリー in 商店街」を実施した。このイベントでは商店街の空き店舗を利用して、県立図書館が展示をしたり本の貸出をした。(2008年10月11～13日)
- 葛飾区立図書館とNPO法人ユニコムかつしかは、葛飾に関する様々な情報を収集・公開するサイト「区民がつくる葛飾百科」の企画・作成を協働事業として行っている。
- 逗子市ではフィルムコミッションに力を入れているが、図書館でも無料上映会を行うなどにより連携した活動を行っている。

他にも「出前講座」として図書館員が各所で講座を行ったり、「ブックスタート」として乳児のいる家庭へ絵本を配本したり、総合学習の受け入れによって学校と連携するなど、様々な活動を図書館は行っている。参考事例を別紙1のリストにいくつかあげた。

(3) 分析

図書館が様々な意味で「連携」をしながら活動していることは、観光と図書館の融合を考える際にも重要である。なぜなら、図書館という存在をそれのみでとらえることから一歩進めて、その先にある「連携」を含めた展開の可能性を見いだすことができると考えられるからである。そして「連携」はさらに「交流」にもつながる要素であり、そうした観点からも重要性を指摘することができる。

しかし、一口に「連携」といっても様々であるので、ここでは「連携」を、「地域内連携」と「地域外連携」に分けて考察を行う。

①地域内の連携

観光振興にあたって、図書館のもつ様々な資料は重要な情報源であるから、観光に関わる行政部署や商工会、NPO、観光業者などは、どのような資料が図書館にあるかを確認し、資料の有効的な活用を常に心掛けるべきである。さらに資料の活用のみならず、図書館の持つノウハウや場所の利用なども含めて、図書館とどのような連携ができるかを図書館と共に検討していくことが望ましい。

また、図書館が地域資料を収集する際に、行政情報センターや文書館、博物館などとの連携が重要であることが国立国会図書館(2007)などでも指摘されているが、こうした連携を密にすることで地域資料の把握が容易になり、まちづくりなどで資料が有効に活用されることが期待できる。すでに図書館が様々な記録の集約拠点・保存機関として十分に活動している場合は、そうした図書館の役割が、地域において明確に意識されることも大切である。

また、「レファレンスサービス」の項でも述べたが、観光者へ地域情報の提供を行う場合には、図書館や観光案内所などでそれぞれ得意とする分野が異なるので、役割分担を確認したり相互に情報を提供しあうなどによって連携を図るとよいだろう。仮にそのような連携がなかなか実現できないとしても、せめて観光ガイドマップに図書館を掲載するという配慮は最低限行うべきである。これによって観光者が図書館の存在を意識し、「図書館にも行ってみよう」と思ってもらうことができる(25)。

こうした主に資料面・情報面での地域内連携を図書館が軸となって進めることによって、地域内のどの機関がどういう資料を保有し、あるいは今後どのように保存していくかという点について地域としての共通認識が生まれ、地域文化の保存と活用が期待できる。それにより、地域振興や観光振興のためのいわば「基礎体力」が養成されるのである。しかも、そうした連携の中で、地域内の交流や連帯感が促進されることも期待される。

なお、もうひとつ重要なポイントとして、地域によっては図書館が本館と分館を持つ場合があるが、これを「図書館のネットワーク」としてのみとらえるのではなく、「地域の情報網」という視点でとらえると、ここから様々な連携の可能性が考えられる点もあげておきたい。

②地域外との連携

図書館は、資料の相互貸借などで協力した活動を行うために「図書館協力」というネットワークを有し、日本中の図書館と様々な連携を行っている(26)。こうした図書館同士のネットワークを、お互いの地域文化の情報交換や交流のための仕組みとして有効に活用することによって、まちづくりや観光振興に役立てることも考えられてはどうだろうか(27)。また地域が設定している「姉妹都市」や「友好都市」との連携を図書館も意識し、相互展示や相手都市の紹介イベントを行うなどによって、観光のための周知・交流活動を行うことも試みられるべきである。

(4) 備考

ちなみに、最近では大学図書館も、公共図書館と相互提携を結んだり、地域住民に開放するなどのオープン化の傾向がみられる。大学図書館にもコレクション(→A-1-3)が保有されていることがあるので、一般に開放されればこれも観光資源になりうる。

(B-3) 交流の場としての図書館

(1) 説明

地域の施設でいうと、地域住民が交流する場としては公民館や文化センターがまずイメージに浮かび、図書館は利用者が個別に黙々と読書をしているかのようなイメージがある。図書館が地域住民の交流に寄与することがあるかについて、検討を行ってみよう。

『図書館情報学事典』(日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編，2007，p.174)では、「(図書館は)共時的には、社会における知識や情報の伝播を円滑にするコミュニケーションの媒

介機関としての役割を果たす」として、図書館にコミュニケーションの媒介機能があることを明確に定義している。この定義ではわかりにくいので、図書館が交流にはたす役割をより具体的に、①図書館運営への参加、②図書館を舞台とした交流、の2つに分けて考え、以下それぞれについて概説する。

①図書館運営への参加

図書館の運営に対して住民の参加の仕方は主に三とおりある。まず、a)ボランティアとしての参加、そして、b)図書館友の会などへの参加、最後に、c)図書館協議会の委員としての参加である(28)。このなかでボランティアに注目してみると、全国の図書館の約68%にボランティアの登録制度があり、約3.2万人が活動している(29)。活動内容は様々で、書架の整理、受付、読み聞かせ、各種行事のサポートなどである。ボランティアなどによって図書館の運営に地域住民が参加することで、図書館は地域社会との連携を深めて多様な意見を反映することにつながり、地域住民は活動意識が高まり、住民間の交流をもたらすきっかけとなる。

このような図書館ボランティアが、他の人々の学習を支援すると同時に、自らの学習意欲を維持・昂進させることにつながるため、生涯学習社会を推進させる重要な担い手であることを指摘する意見もある(30)。

②図書館を舞台とする様々な交流

図書館が資料を購入する際は、地域住民のリクエストに応えたり、地域のニーズを考慮しているが、その際にカウンターでの住民とのやりとりなども参考になる場合があるという(31)。そのような職員と利用者との交流以外にも、利用者同士の交流も様々な場面で起こる。例えば、図書館で行われるイベントや行事(→A-2-2)を通してであったり、あるいは読書会、郷土文化研究会などが図書館で会合を開いたり、さらには利用者同士の情報交換などにより、図書館が地域住民の交流の場としても機能していることは、多くの図書館員が認めるところである。

菅原(1999, p.54)は「地域に住む人々の心を一つに結び、地域のありようを支えるものが求心力である。その求心力はどこにあるか。いうまでもなく、図書館である。(中略)　図書館はいま、図書の館にとどまっていない。本を読まない人も気軽に出かけ、思い思いに時間を過ごすことができる。(中略)　図書館は本に出会い、人に出会うところだ。人と人との出会い、求心力はそこから生まれる」と述べ、地域社会の空洞化や崩壊を防ぐためにも図書館が大きな役割を果たすことを期待している。長年、図書館界で活動をしてきた著者の思いも込められた文章ではあるが、交流の

場として図書館が持つ重要性が、ここに端的に示されているといえるだろう。

(2) 参考事例

『これからの図書館像』(これからの図書館のあり方検討協力者会議，2006)では、「市民参加での図書館づくり」として伊万里市民図書館の事例が紹介されている。また、前述した「図書館友の会」は、最近では「サポーターズクラブ」などの名称で設置され、会員同士の交流活動が盛んなものもみられる。

地域の交流に図書館が関連している事例を別紙1のリストにあげた。

(3) 分析

以上みたように、図書館は「交流の場を提供している」ととらえることができる。この機能は、これまで一般的にはあまり意識されておらず、今後の新たな図書館のあり方を探るうえでひとつのポイントになるが、こんにちの観光が「交流」を意識するようになってきた事実に照らして考えると、さらに重要な意味を持つといえる。

地域住民によく利用され、交流が活発な図書館であれば、観光者にとっても「地域住民との交流が期待できる場所」という新たな魅力を持つだろう。図書館を「本を借りたり貸したりする場所」としてのみとらえるのではなく、交流をもたらす場所としてとらえたとき、それは「交流としての観光」という発想と結びつき、図書館の可能性が広がるのである。

ただし、これまで図書館は地域住民のための施設としてとらえられていたため、地域と観光者との交流に対して図書館がどのような機能をもつかについての分析は、今後の研究課題として残されている。これについて、本論の第4章において、「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」というかたちで試案を提示している。

一方、観光振興においても、堀川(2007，p.172)は「観光振興のためのさまざまな活動をほんとうに息長く実のあるものにするためには、学生や市民を中心としたNPOの、“底辺”での地域に密着した活動こそが、直接の観光事業者を中心にして発展させる同心円の拡大に大きな役割を果たせるものとして期待されている」と述べて、ボランティアの重要性を指摘している。

また、まちづくりとの関連でいえば、地名の保存運動や戦争体験を伝える活動、後継者が不足している伝統芸能の保存活動などが図書館と連携していくことも考えられる。中谷(2005，p.27)は「地域文化は決して排他的なものではなく、地域以外の人々をも巻き込んで展開する可能性を秘

めているのである」と述べて、地域文化の担い手が地域外にもありうることを示し、人の交流のなかでこそ文化創造が可能であると指摘しているが、こうした観点からも図書館がもたらす「交流」の意義がとらえられるべきである。

(4) 備考

図書館が「交流をもたらす場」であるという点についてもう少し考察してみよう。インターネットの発達に伴い、資料やデータを得るだけなら図書館に行かなくて済む場合もあるし、今後もますます資料などのデジタル化は進むだろう。しかし一方で、インターネットが普及して仮想空間で情報が容易に入手できるような時代であるからこそ、改めて「場所としての図書館が必要である」という指摘があることにも留意しなければならない(32)。こうした指摘をふまえると、図書館という実空間（場所）が存在し、そこで人と資料、あるいは人と人の出会いが身体性を伴って行われることが重要なのだと考えられる。観光者が訪問先の図書館で、見知らぬ資料や地域性を持った書架に出会うことで生まれる体験や感動、あるいはそこで地域住民らとの交流が生まれること、このような「図書館を実際に訪問することによって得られる体験」の意義が改めて認識されるべきである。

古池（2007，p.182）は、「文化が、人と人、あるいは人と場の相互作用のなかで生まれるものだとすれば、こうした相互関係を実践する場に社会関係資本が蓄積していくことは容易に想像できるだろう。そのため、文化を支える基盤としての劇場や美術館、博物館、競技場などは欠かせない」と指摘する。この文章に「図書館」は登場していないが、当然含まれるものとして考えてよい。インターネット時代であるからこそ、身体性を伴った交流や体験を観光や図書館がもたらしうることに注目される必要がある。

(C) インターネットの発達との関連

ここまで、まず、「図書館の基本的な要素（分類A）」について述べ、次に「地域社会との関連（分類B）」において、図書館と地域社会との関係における直接的あるいは間接的な観光との融合の可能性について考察した。

しかし、周知のように現代社会はインターネットの普及が急速に進み、これによって観光も図書館も大きな影響を受けている。例えば、観光でいえば、訪問先情報の入手方法、交通機関や宿泊施設の予約方法が大きく変化しているし、図書館でいえば、インターネット上での蔵書検索やインターネット経由での貸し出し予約などが進んでいる。従って、観光と図書館の融合を考察する

にあたっても、「基本的な要素(A)」や「地域社会(B)」といういわばアナログ的身体的な項目だけではなく、デジタル的仮想的な面についての考察も不可欠である。

そこでここで分類項目を改めて、「インターネットの発達との関連」という観点から、図書館と観光との融合について考察を行う。

(C-1) デジタル・アーカイブズによる情報提供

(1) 説明

図書館が所蔵している資料をスキャナーなどを使ってデジタル画像化し、それをインターネットで公開することが増えている。その際に、図書館が保存している貴重資料や地域資料などがデジタル化の対象になることが多い。これらは「デジタル・アーカイブズ」と呼ばれるが、「アーカイブズ」とは「書庫」という意味である。図書館のHP上に、いわばデジタルデータによる仮想の書庫を用意し、自館の持つ資料を広く公開することによる情報提供である。

地域資料は、すでに述べたように地域のことを知るのに重要であるが、内容がデジタル化されるか、あるいは資料のタイトルや概要がデジタル化されてインターネットに公開されない限り、インターネット上では存在しないに等しいことになってしまう。デジタル・アーカイブズ化の推進は、図書館にとっては手間暇がかかる作業であるが、こんにちのインターネットの普及を考慮すると、社会的な意義は大きい。

(2) 参考事例

2点ほど参考事例をあげる(33)。

①デジタル岡山大百科(岡山県立図書館)

岡山について百科事典的に調べられることを目指して構築された県民参加型の電子図書館システム。岡山県庁の行政情報(観光映像を含む)、岡山県古代吉備文化財センターの文化財情報、岡山大学の学術成果情報などを網羅している。特筆すべきは、県民から提供された4千件以上の情報を収録するなど、県民の参加を積極的に呼びかけている点で、これまでに「デジタル絵本」づくり、ボランティアとのネットワーク構築、映像コンテスト「デジタル岡山グランプリ」の実施などが県民との連携によって実施された。(http://www.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/ downloaded at 2009.12.15)

②デジタル資料館(函館市中央図書館)

「函館史市デジタル版」「はこだて人物誌」「ポスターコレクション」などをはじめ、古地図、古写真、絵はがきなどのデジタル化を進めている。また、公立はこだて未来大学の作成した古文書撮影システムを導入したり、ボランティアの協力を得るなど、デジタル化作業において様々な連携が行われている。(http://www.lib-hkd.jp/digital/index.html downloaded at 2009.12.15)

上記以外の参考事例を別紙1のリストにあげたが、これらはほんの一部であり、あちこちの図書館で、資料のデジタル化が進められている。

(3) 分析

デジタル・アーカイブズと観光との融合についてはいくつかの可能性が考えられる。

まず、図書館が保有する貴重な資料の存在が広く認知され、さらに実際の資料の画像を簡単にインターネットで閲覧することができるようになることは重要である。なぜなら、観光と深い関連のある資料(例えば古地図や絵はがきなど)のデジタル化は、それをインターネット上で観た人が、その地域に関心を持ち、観光を促進するきっかけとなりうるからである。また「デジタル画像ではなく、実際の資料を見てみたい」と考え、所蔵している図書館への訪問が増える可能性もある。

次に、観光スポットなどで「そこが以前はどのような姿をしていたか」、「昔のメディアではどのように紹介されていたか」などを簡単に紹介できる可能性を持っていることにも注意したい。例えば観光スポットに端末を置いて、図書館のアーカイブズを表示すれば、こうした演出が可能になる(この場合、インターネット経由でなくともコンテンツをDVD化してもよい)。また、地元メディアのアーカイブスとリンクさせたり、「より詳しい情報はこの本にあります」と関連資料を紹介するといった、多角的な情報提供への発展も考えられる。

本来、図書館は観光のためにデジタル化を行っているわけではないが、もし観光への効果をあえて意識するならば、昨今のレトロブームを利用して、戦前戦後あたりのレトロ的な雰囲気を持った資料(例えば、当時の観光ポスターや地方紙の記事など)を優先的にデジタル化することも考えられる。

またデジタル化は図書館が所有する資料に限定するのではなく、地域住民に資料の提供を呼びかけるなどして、地域全体の様々な資料のアーカイブズ化を進めることも考えられる。それにより地域内で情報を共有化し、地域住民の持っている貴重な資料を地域外へ情報発信することができる。

図書館が所蔵するデータのデジタル化はまだ始まったばかりであるため、前述したような「図書館によるデジタルデータの公開が、観光の呼び水となる」という効果がどの程度期待できるかは、今後の検証を必要とする。とはいえ、インターネットがこんにち主要な情報入手の手段となっていることをふまえると、様々な地域情報をデジタル化してインターネット上にアップロードすることに、マイナス面があるとは考えにくい。例えば、ある地域に関するキーワード検索などにおいて、(信頼性ある)図書館によるデータがヒットすれば喜ばれるし、その地域への関心が高まると考えてもよいだろう。従って図書館の側も、「どのようなキーワードで検索されているか」、「どのリンクをたどってサイトを訪問したか」などをきめ細かく分析し、地域に対する関心のあり様を敏感にキャッチして、観光関連部署と連携して対応策を講じることが必要である。

(C-2) 情報発信の多様化

(1) 説明

これまで図書館による情報発信は、「図書館報」や「図書館だより」などの紙媒体が主であったが、インターネットが普及するにつれて、図書館も自館のHPを持ち、情報発信をするようになってきた(34)。しかし、内容やデザインなどで相当のバラつきがみられ、どのような情報発信を行えばいいかなどについて模索中の図書館も多い。

そうした状況にあって、先進的な試みとして、ブログやメールマガジンを利用した情報発信などを行っている図書館も登場しており、注目を集めている。

(2) 参考事例

図書館によるブログ、メールマガジンなど情報発信の事例を別紙1のリストにあげた。

(3) 分析

図書館のHPが、たんに所在地図を掲載してあったりするだけでは、観光との融合はあまり考えにくい。しかし、自館の所蔵する地域資料を積極的にアピールしたり、行事への参加を呼びかけたり、ボランティアなどの活動状況をHPで報告するということを、「地域情報の発信」という視点から見直すと、観光との融合がみえてくる。額賀(2008)は、観光における地域間競争の核心を「旅行者の誘致」であるとしたうえで、自治体が十分に観光を意識し、外に向けて情報発信を充実させることの重要性を説いているが、図書館のHPもそうした観点からとらえなおす必要があるだろ

う。その場合、従来の紙媒体による広報の延長としてみるのではなく、インターネットならではの工夫を行い、コンテンツにバラエティを持たせ、更新を適度に行い、ユニークな内容を盛り込むことが、閲覧者を増やすことになる。そしてその結果、その地域への関心が高まり、訪問動機につながることが期待できるのである。

これまで図書館が蓄積してきた様々な地域資料などは、図書館でなければ提供し得ない貴重な情報を多く含んでいるので、そうした情報をインターネットで公開することによって、地域の文化や歴史をアピールすることになる。

図書館は地域情報の発信拠点といわれているが、インターネット上においても、そうした役割を意識することが必要である。インターネットの発達により、昨今では「その土地について知りたい」と思った時には自治体のHPや観光協会のHPがチェックされることが多いが、そこでチェックするHPのひとつに地域の図書館も含まれるように、図書館もコンテンツの充実に努めるべきである。

また、情報発信の手段として、HP、ブログ、メールマガジンなど様々なインターネット上の手法を工夫し、さらには携帯電話や情報ツールなどとの連携も検討していくことで、観光者がよりアクセスしやすい地域情報の提供が可能となるだろう(35)。

「ACADEMIC RESOURCE GUIDE」というHPを運営し、図書館界に対して様々な提言を行っている岡本真は、第17回京都図書館大会で「いま図書館に求められる新たなウエブ活用戦略」と題する講演を行い、図書館がインターネットをより有効に活用して、図書館の存在感を高めるべきだと指摘した。その際、観光支援に図書館が貢献する可能性をひとつの試論として示し、図書館が自らをコンテンツプロバイダーとして意識し、観光に関連した様々な情報を組み合わせて提供することによって、新たな価値を生み出すことに図書館がもっと熱心になるべきだとした。またその際、図書館からの目線・論理ではなく、利用者を主体とする考え方こそがこれからの図書館の情報発信に必要だとも指摘した(36)。岡本の講演は、「図書館の情報発信、図書館によるインターネットの活用」という点に主眼が置かれたものではあるが、観光と図書館の融合のひとつの理想型として重要な示唆を含んでいるといえる。

(4) 備考

インターネットでの情報発信や広報活動にあたっては検討すべき課題も多い。まず、作業を外注するか館内スタッフで行うかという問題がある。予算状況が厳しいなかでの外注はなかなか難しいだろう。しかし館内で行うとなると、担当スタッフはインターネット関連の技術やデザインテクニッ

クなどをひととおり習得しなければならない。

またコンテンツの確保や更新などの作業にも（内部で行うにせよ外注するにせよ）相当の負荷がかかる。また、地域系情報は自治体の広報担当部署が、観光系情報は観光担当部署や観光関連の団体などが、それぞれHPを運営していることも多いので、どのような情報発信を図書館が行うかなどについて、関連部署との連携や調整が必要になる。内容のバランス面でも、地域内と地域外へ提供される情報の情報量の配分などを検討しなければならない。

(C-3) ネットコミュニティの影響

(1) 説明

これまで、「デジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)」、「情報発信の多様化(C-2)」という観点で観光との融合の可能性を考察してきたが、より広い観点で、インターネット社会の発展が図書館に影響を与えることがあるのかについて考察してみよう。

インターネットの発達に伴い、観光は様々な影響を受けているといわれる。例えば交通機関や宿泊施設の予約が簡単になったり、口コミ情報による評価が広まったり、非常にマニアックな観光行動に注目が集まるなどである。

図書館も様々なブログで話題としてとりあげられたり、インターネット上のコミュニティでテーマとなったりして、図書館に関する情報交換が行われている。また図書館員や図書館学研究者のブログも多く存在し、それによって図書館の動向が詳しくわかったり、専門的な知識を得られる機会も増えている。

(2) 参考事例

図書館に関連するHPやブログ、図書館系サイトなどを別紙1のリストにあげた。

(3) 分析

以前であれば、「ここの図書館に行ってきた」とか「あそこの図書館はおもしろい」といった情報を広く交換しあうことはなかなかできなかったが、インターネットの発達により簡単に情報交換ができるようになった。また、こうした影響を受けて、「自分の住んでいる地域以外の図書館を訪問してみるのも面白そうだ」と関心を持つ人が増えることも考えられる。さらには、図書館を訪問対象とするSIT的なHPも存在し、そうしたHPを見た人が「図書館も観光の対象になりうる」ということに気づ

くようになり、新たな「図書館ファン」を生む可能性もある。このようにインターネットの発達によって、図書館が観光対象になる可能性が高まったと考えられる。

また、直接訪問するまでに至らないとしても、図書館に関する様々な情報がインターネット上で増えていけば、個性ある図書館についての情報を通して、その図書館が設置された地域への関心が高まることも考えられる。そうした関心を、図書館自身がHPや情報発信を工夫するなどによってうまくフォローすることができれば、地域の認知度を高めたり観光に結びつけられる可能性もあるだろう。

「どこどこの図書館に行ったら、観光の役にたった」、「図書館で親切にしてもらった」、「図書館で地元住民と交流した」という情報がインターネットで簡単にアップされ、多くのユーザがそれを参照する時代であることを、図書館も改めて意識すべきである。

(D) その他

ここまで、「図書館の基本的な要素との関連(分類A)」、「地域社会との関連(分類B)」、「インターネットの発達との関連(分類C)」という観点で考察を進めてきたが、最後に、これまでの項目には分類しにくいものについて考察する。

(D-1) 図書館への視察・見学

(1) 説明

一般的にいって「視察・見学」の対象としては、ユニークな施設や工場などがイメージされるが、図書館が視察や見学の対象になることはあるだろうか。調査をしてみると、図書館は意外にも視察や見学の対象になっている。

主な視察目的としては、①運営方法やサービスの内容に特徴があったり、まちづくりに貢献している事例として知られている場合、②図書館の設計や構造に特徴があって、建築物として見学される場合、があげられる。①では議員、行政担当者、経済団体、大学や研究機関、NPO関係者、マスコミ、一般市民らが主な参加者であり、②では建築科の教師・学生らが主な参加者となる。

①の場合、視察の対象になる図書館は、新聞や雑誌の報道、あるいは専門雑誌などによって活動が紹介されたことがきっかけとなるほか、日本図書館協会による「日本図書館協会建築賞」の受賞や、「NPO法人　IRI知的資源イニシアティブ」による「Library of the year」の受賞なども注目を集

めるきっかけとなる。

②について補足すると、建築や設計を学ぶ学部・学科では、設計課題や卒業研究に図書館や博物館などの公共施設がテーマとしてしばしばとりあげられる。特に図書館は、書架、読書スペース、貸出受付、書庫など固有の設計要素を持っているので、建物を見学するだけでなく、利用者や図書館員に取材して実際の使い勝手などを確認することも必要になる。建築やデザインに関わる者は、図書館をそういう関心から見学に行く。また、図書館学の科目にも「図書館建築論」という学問分野がある。

(2) 参考事例

例えば、浦安市立図書館では平成19年(2007年)度実績で、全国各地および海外から、109件(493名)の視察、取材6件があった(『浦安市立図書館概要　平成20年度』より)。函館市立中央図書館では平成20年(2008年)度実績で、24件(413名)の視察・見学があった(『函館市の図書館2009』より)。

また図書館アンケートの結果でも、視察が「よくある」「ときどきある」を合わせて全体の72%ほどあり、予想外に視察が活発に行われていることがわかった。

別紙1のリストに関連情報をあげた。

(3) 分析

視察や見学は、2つの点で重要である。

1点目は、図書館と視察者との間で交流が行われるという点である。視察を受け入れることによって人脈が拡がり、視察後でも、例えば図書館が新たなサービスを開始した時や「市制○○年記念行事」を行う際などに案内をするなど、様々な点で人脈を地域振興に活かすことができる。

2点目は、視察の際に併せて他の施設も視察したり、あるいは特産品の紹介や宿泊施設の利用などといった副次的効果が期待できる点である。図書館への視察をそれだけで完結させてしまうのではなく、視察者に地域全体への関心を持たせる機会であることを認識し、行政当局や観光協会などと連携して対応にあたることも検討されるべきである。

図書館自身も視察者が多く訪問すれば、自館に誇りを持つようになり、また視察者の意見や感想をふまえてさらに活動が活発になるだろう。これは地域全体にとってもプラスの効果をもたらす。

(D-2) 図書館とツアー

(1) 説明

前項で、図書館が視察や見学対象になっていることを述べたが、他にも図書館がツアーの対象になったり、あるいは図書館自身がツアーの主催者となる事例がないかを調査したところ、様々な事例があることがわかった。博物館や美術館でガイド付き館内ツアーが実施されたり、水族館などでナイトツアーが行われるなど、社会教育施設でも様々なツアーへの取り組みがみられるようになってきたが、図書館でも様々なツアーが行われているということは、あまり知られていないように思われる。

(2) 参考事例

図書館とツアーの関連について、例えば以下などの参考事例がある。

①図書館ツアー

図書館が見学対象となるもの。この場合、図書館全体をガイド的に案内するものや、ふだん利用者が見ることができない書庫などを特別に見せる「バックヤードツアー」などがある。例えば愛知県図書館では、「小中学生向けツアー」や「一般向けイブニングツアー」といった「図書館探検ツアー」をしばしば開催している。

②図書館によるツアー

図書館がツアーの主催者となるもの。あるいは、図書館の応援組織である「友の会」などが主催するものもこれに準じるといえる。例えば小松市立図書館友の会では、ほぼ毎年バスツアーを行い、社会教育施設の見学をしたりして、会員同士の親睦を図っている。

③選書ツアー

図書館員が選書を行うのではなく、「“図書館の本を選んでみたい人”を市民から公募し、彼らを図書館が書店などに連れていき、そこで本を選んでもらう」という方法を実施した図書館があり、これを「選書ツアー」という。「選書ツアー」はこれまで北広島市図書館や大学図書館の一部などで行われたことがあるが、「本を誰が選ぶのが妥当であるか」という点などで議論も呼んでいる。

④その他

ツアーではないが、「スタンプラリー」のような方式により、図書館に親しみを持ってもらったり図書館への訪問や図書の貸し出しを促進するという試みが行われている。市内の分館を巡るものや館内の本棚にカードが隠されていてそれを探すもの、本を借りる度にスタンプを押すものなど様々形態がみられる。例えば、伊万里市民図書館の事例（平成20年10月～平成21年2月末）では、「本を借りて、応募用紙にスタンプを押印→スタンプが30個たまると、抽選により記念品（図書カード）がもらえる」という方式で、これは県による「図書館先進県づくり推進事業」の一環として行われている。

(3) 分析

観光と図書館の融合の可能性について考察する際に、上記であげたような事例は、図書館の側から観光へのアプローチという点で、他の項目にない独特な意味を持っている。

今後、図書館が新たなサービスの展開や地域貢献のあり方を模索していくなかで、図書館がどのような積極性を発揮していくかが、ひとつのポイントであると考えられるが、そうした「積極性」という観点で観光と図書館の融合を考えたとき、図書館自身がツアーを企画したり、図書館への訪問を何らかのインセンティブによって促進するという発想は、大きな可能性を秘めている。すなわちこれは、「地域主導型の観光」という表現になぞらえていえば、「図書館主導型の観光」ということでもある。

特に図書館が主催するツアーについて考えてみると、「図書館の楽しさや有効性をアピールする」、「所蔵資料と実際の観光資源を結びつける」、「文化交流のためのきっかけとする」など、様々な目的やプランを設定できるし、対象も地域住民、地域外という区分のみならず、例えば児童、高齢者、障害者、外国人といったグルーピングを想定することができる。また実施にあたっては、例えばNPO団体や市民サークルなどに運営をまかせて、図書館はツアーのバックアップ（資料提供など）に重点を置くという方法も考えられる。「図書館主導型」とはいっても、図書館がツアーのイニシアチブを握るという意味ではなく、「図書館の機能を有効に活用したツアー」と柔軟に考えてみることが必要である。

3　観光に関連した取り組みを行っている図書館の事例

3-1　説明

「観光と図書館の融合」という発想ではないが、観光に関連した取り組みを行っている図書館がいくつか存在する。その中から、観光地域の中に立地し、平素から観光者への対応を行っている図書館として草津町立図書館を選び、また、観光系の展示などを積極的に行っている図書館として、鳥取県立図書館、高知県立図書館の2館に注目し、アンケートにより質問を行った。

観光と図書館の融合を実践していく際に参考になる点も多いと思われるので、その回答の要点をまとめつつ分析を行った。

3-2　各館の状況

●鳥取県立図書館

住所:鳥取市尚徳町101／竣工:1990年3月／蔵書冊数:843千冊

回答者:支援協力課くらし・産業支援担当蟻坂様

［概要］

・片山善博前知事の時代に県全体で積極的な図書館改革が進められ、県立図書館もビジネス支援や地域活性化などへの取り組みが盛んになった。そうした様々な取り組みのひとつとして、図書館が持つ「情報発信力」の価値に着目して、観光展示に関する活動が展開されている。

・例えば主な活動に以下などがあるが、複数の館で企画を相互に交換するかたちで行われている点が興味深い。

－津山市立図書館で「忘れられない夏～とっとり県の海、鳥取県の夏～」観光案内展示（2008年7月17～8月8日）

－鳥取県立図書館で「ぶらっと高知、おもいっきり高知、やっぱり高知」観光案内展示（2008年10月1～31日）

－高知県立図書館で「鳥取千年往来」文化・観光紹介展示（2008年12月2～27日）

－徳島県立図書館で「雪のある風景を楽しむ！　鳥取県の冬景色」展示（2009年1月6～25日）

－鳥取県立図書館で「津山市の観光」展（2009年3月）、「徳島県観光展示」（2009年7月）等

－「山陰の魅力大発見～食のみやこ・鳥取で大自然とマンガ文化にふれる旅～」（観光ポスターやパンフの展示配布。県内の物産の紹介などを交換展示。／2009年6～7月にかけて福

山市中央図書館、広島市立中央図書館、はつかいち市民図書館、岩国市中央図書館等で実施）

－また、山陽小野田市立図書館との交流がきっかけとなり、同館に「鳥取県と出会うコーナー」が設置されている。（2009年2月）

●高知県立図書館

住所：高知市丸ノ内1-1-10／竣工：1973年8月／蔵書冊数：520千冊

アンケート回答者：利用サービス担当チーフ山重様

［概要］

・予算状況が厳しい状況にあって、図書館行政のあり方について見直しが進められており、「情報提供機関」としての機能についても様々な試みが進められつつある。そのなかで図書館1Fの展示用スペースを「情報発信の場」として有効に活用するための発想として「観光」に着目した。

・観光に関する交換展を積極的に展開しており、平成21年(2009年)度では以下などが行われた。

－「新宿・漱石・寅彦展　～高知・新宿観光展示エクスチェンジ～」（6月3日～8月27日）

－「いざ鎌倉！　～高知・鎌倉観光展示エクスチェンジ～」（9月12～11月29日）

－「龍馬が最後に訊ねた地、福井　～高知・福井観光エクスチェンジ～」（12月2～27日）

●草津町立図書館

住所：吾妻郡草津町大字草津28／竣工：1988年11月／蔵書冊数：42千冊

アンケート回答者：中沢様

［概要］

・「心の湯治を＠あなたの図書館で」をキャッチフレーズに、平素から観光者もサービス対象として活動しており、利用登録者全体の4割が町外者である。

・「観光・温泉を知るためのブックリスト」を作成したり、観光マップ・観光パンフなども配備して、観光案内所的な役割も担っている。

・図書館が地域住民以外の利用者にも親しまれている様子が、同地域のリゾートマンション所有者に国土交通省が行ったアンケートの回答から知ることができる。（回答例：「草津の滞在中に図書館が利用できてよい」「図書館の受付の方々が親切」など）

（国土交通省住宅局，2008，別荘・リゾートマンション定住団塊世代の参加による高原都市の

まちおこし人材づくり調査報告書）

3-3　アンケートの回答および分析

以下、アンケートの回答とそれをふまえた分析を述べる。（具体的な回答については別紙3を参照。また館名は、それぞれ「鳥取」「高知」「草津」と略した。）

[問1：観光に着目するきっかけについて]

「厳しい財政状況のなかで、図書館の特長を活かせる活動として」（高知）、「図書館の受身的なイメージを打破するため」（鳥取）、「もともと町全体が観光で成り立っていることから」（草津）と、きっかけはそれぞれ異なっているが、高知と鳥取からは新しい試みにチャレンジして図書館の新たな可能性をひらこうという意気込みが感じられる。

また草津の場合は、もともと観光者の利用が多いため、新たな試みということではないが、はっきりとした使命感をもって、観光者に対応している様子がうかがわれる。

[問2：地域住民への奉仕と観光者への奉仕のバランスについて]

高知および鳥取は、展示などによる周知活動が主であるため、今のところ奉仕のバランスを気にするまでには至っていない。一方、草津は観光者の利用が日常化しているが、図書館はこれを歓迎しており、町民も迷惑に思う様子はないとのことで、職員と町民の意識が一致している様子がうかがわれる。

図書館アンケートでは、「観光シーズンになるとトイレの利用が増える」「駅に隣接しているので観光案内所的な問い合わせもある」といった回答もあり、立地条件などによっては、本来の図書館業務に支障を招きかねない状況もうかがわれる。「今後、観光者の利用が増えて支障が出るようであれば、利用上の注意事項などを整備する必要がある」（鳥取）という回答をみると、図書館によっては「観光者への対応マニュアル」などを整備する必要が生じるかもしれない。

[問3：観光に関する活動の評価について]

「効果の検証は行っていない」（草津）、「効果の測定や評価をどうするかは課題である」（鳥取）と回答にあるように、観光に関する活動を行った場合、それが例えば観光者の増加などにどのような効果をあげたかを具体的に判定することは難しいと思われる。

数値的な測定は難しいのであれば、利用者へのアンケートやヒヤリングの中から次の活動のヒントを探したり、地域内外の連携を深めるといった質的な面に目を向けて、活動の方向性を探るのがいいのではないだろうか。

[問4:行政当局や市民などのからの反応について]

高知や鳥取の回答をみると、観光に関する活動は概ね好評を得ている様子が感じられる。また、草津の場合は「特に反応はない」とあるが、これは活動が十分に浸透していることの現れであると思われる。

ただし「ごく一部」としながらも「なぜ他地域の情報を展示するのかという様子もみられた」(高知)とあるように、他地域の観光展示を相互に行う際などには、イベントの背景を説明するなどの配慮が必要な場合もあるのではと思われる。

[問5:観光者が多く来館することによる懸念について]

いずれの館も基本的には特に懸念を感じてはいない。もちろん「集団での利用や館内案内を希望する場合は事前に申し込みをしていただく」(鳥取)とあるように、見学などのために団体訪問に対応する場合は、それなりの配慮が必要になるだろう。

宿泊施設や観光施設においては、「旅の恥はかき捨て」的な行為もおこりやすいだろうが、図書館の場合は、観光者が特別にマナー違反をおこしやすいということは考えにくいと思われる。

[問6:「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」に対する感想について]

→これは第4章で紹介した。

[問7:これまでの活動をふまえての意見などについて]

「期待が高まると負担も増えてしまい、手軽な方法を考える必要がある」(高知)、「先方の図書館を訪問して展示を行うと、館内業務が手薄になる」(鳥取)という回答からは、観光に関連した活動を行う際に、他の業務とのバランスや人員の配置などについて検討すべき事項が多いことがうかがわれる。「観光」をテーマにした活動は図書館で比較的なじみが薄いので、どのような業務がどの程度の量で発生するかの見通しを立てにくいという事情もあると思われる。

また、「司書はもっと自分の町のPRをすべきである」(草津)という回答からは、これまで長年に渡って、観光者に対応してきた自負が感じられた。さらに「発信が足りないと思う」(草津)というコメ

ントは、観光との関連だけではなく、広く図書館全体の課題として受け止められてよいと思われる。

3-4　全体的なコメント

上記の「観光に関連した取り組みを行っている図書館へのアンケート」をふまえると、観光と図書館の融合を考えるにあたって、留意すべきポイントが2点ほどみえてくる。

まず1点目は、図書館による自己の可能性に対する意識である。

図書館の役割を限定的固定的にとらえるのではなく、「図書館が置かれた地域、および図書館自身の状況をふまえると、どういう活動ができるか」という問いかけにより、新たな可能性へのアプローチを積極的に模索していくオープンな意識が必要だと思われた。

なお厳密にいえば、草津町立図書館の場合は「新たな可能性」とはいえないが、自らの立地条件や利用者像を常に認識しており、他の図書館にはみられない独自なポリシーによって運営されているという意味で、自己の可能性に対する意識の高さをうかがうことができる。

2点目は、活動評価の難しさの問題である。

これまでの図書館活動では「貸出冊数」や「登録者数」といった数値が重視される傾向にあったが、昨今注目を集めている新たなサービスでは、そうした旧来のような「数値による評価」がしにくいものも多くみられる。さらに、本論で考察している「観光と図書館の融合」となると、その図書館の奉仕対象地域外への効果も考慮しなければならず、いっそう評価が難しくなる。

そうした困難さがあるにせよ、今後、観光と図書館の融合を進めていく場合には、例えば「図書館がいかに地域文化の保存に貢献しているか」、「地域内外の交流をどのようにもたらしているか」などの点について、なんらかの方法によって評価を行うことが必要になるだろう。

なお上記3館の他にも、観光を意識した取り組みを行っている図書館には、奈良県立図書情報館、千代田区立千代田図書館、津山市立図書館などがある。こうした図書館の活動は図書館系の文献で紹介されることはあるが、観光学系の文献で紹介されることがほとんどないため、観光学の観点からの分析が今後必要である。

4　本章のまとめ

4-1　まとめおよびメリット等についての考察

以上、図書館に関する様々な要素について、(A)図書館の基本的な要素との関連、(B)地域社会との関連、(C)インターネットの発達との関連、(D)その他、に分類して、観光との融合の可能性を具体的に考察した。実際の現場においては、各館の事情により現実的には対応が難しい提案なども含まれていると思われるが、ここではできるだけ広い観点に立って検討を行った。「観光と図書館の融合」という表現をみると「図書館へ観光に行くこと」というイメージを強く与えるかもしれないが、実に様々な連携の可能性があることが、本章の考察から浮かび上がってきた。

今後、「観光と図書館の融合」の実践にあたっては、本章であげた各要素を個々に着目してもよいし、複数を組合せることも考えられる。また、観光や図書館、あるいは社会の変化などに伴い、ここであげられていない新たな要素や可能性が今後出現することも十分にありうる。

本章で述べた各要素の典型的な活用方法をふまえて、「観光と図書館の融合」によってもたらされるメリットを、「観光者」、「図書館」、「地域」のそれぞれについて簡単にまとめると以下となる。

①観光者にとってのメリット

図書館を利用することで地域に関する様々な情報が得られる。図書館員に地域のことを質問したり、図書館で行われる地域に関連した展示を観て学習したり、イベントに参加して地域との交流を広げることもできる。また、地域情報のみならず観光中に疑問に思ったことの解決にも図書館の蔵書は役立つし、観光中の息抜きスポットとしても利用できる。

また、観光中だけの利用に限らず、事前に訪問先のことを問い合わせたり、事後に交流を発展させるなどのきっかけを与えてくれる。

②図書館にとってのメリット

観光者の利用を意識することで、活動の幅を広げ、地域内外の交流の場としても機能できる。また様々な機関や団体と連携して情報を提供したり、イベントを行ったり、HPのコンテンツを充実させるなどにより、情報発信の拠点として存在感を示す。活発な活動や独創的なサービスを行うことにより、視察を迎えて地域への関心を高めることもできる。これらによって地域貢献をはたす。

③地域にとってのメリット

図書館を通じて観光者に地域の様々な情報を提供できる。また、図書館の持つ資料を活用したり、図書館が行っている課題解決型サービスのサポートを受けるなどして、まちづくりや観光振興と図書館を連携させて地域を活性化し、地域の魅力を高めることができる。

なお、デメリットについて考えてみると、観光者および地域にとっては、特にこれといったデメリットはなさそうに思われる。ただし、図書館にとっては、仕事が増えたり新たなサービスへの対応が必要となるし、場合によっては図書館が混雑したり騒がしくなるなどのデメリットが考えられる。もしこうしたデメリットが、従来からのサービスを大きく低下させたり、地域住民の利用をスポイルするようなことになるようであれば、それらと引き替えにしてまで、観光と図書館の融合を進めるのは望ましいことではない。

4-2　効果からみた考察

『観光実務ハンドブック』(日本観光協会編，2008，p.602)によれば「観光施設が提供する役割には、目的的役割と補助的役割がある」との説明がある。この説明を応用して、図書館が持つ効果を以下2点において考察してみよう。

①集客効果:図書館に行くことが観光の目的になるもの。

②補助効果:図書館にある資料や図書館が提供するサービスなどが、本来の観光目的に対して補助的な効果をもたらすもの。

まず「①集客効果」としては、「コレクション・文庫(A-1-3)」「イベント・行事(A-2-2)」「設計やデザインの効果(A-3-1)」「図書館への視察・見学(D-1)」が重要であると思われる。これらはいずれも図書館を訪問すること自体が観光動機となりうる。「図書館とツアー(D-2)」も(多少特殊な事例ではあるが)ここに含められる。

また「②補助効果」としては、「地域資料(A-1-1)」「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」「レファレンスサービス(A-2-1)」「デジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)」「情報発信の多様化(C-2)」が重要であると思われる。観光者が訪問地のことをより深く知りたいと思った際に、これらはいずれも非常に役に立ち、観光体験をより豊かにしてくれる効果が期待できる。これらの考察を表3-2にまとめた。

表 3-2 効果からみた項目の仕分け

①集客効果が強い項目
- ーコレクション・文庫(A-1-3)
- ーイベント・行事(A-2-2)
- ー設計やデザインの効果(A-3-1)
- ー図書館への視察・見学(D-1)
- ー図書館とツアー(D-2)

②補助効果が強い項目
- ー地域資料(A-1-1)
- ー地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)
- ーレファレンス・サービス(A-2-1)
- ーデジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)
- ー情報発信の多様化(C-2)

なお、上記は典型的な効果についての分類であるが、実際には複合的な効果がもたらされる点に留意が必要である。例えば、「地域資料(A-1-1)」「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」は補助効果がメインであるが、地域のことに興味を強く持つようになれば、「地域資料を閲覧するために図書館に行く」ということが動機になることも考えられる。また「コレクション・文庫(A-1-3)」は集客効果があるが、すでにそのコレクションに関連した資料館などが地域に存在する場合は、それと連携することにより補助効果ももたらされる。また「イベント・行事(A-2-2)」は集客効果があるが、地域文化を知るための観光に対しては補助効果もある。また「様々なサービスとの関連(A-2-3)」「まちづくりとの連携(B-1)」などは、それ自体は集客効果も補助効果もあまりないが、図書館の活動を地域外にアピールすることによって視察や見学などを招けば、結果的にある種の集客効果をもたらすことになる。このように、基本的な効果以外に、観光者の意識や状況によっては別の効果を持ちうるということも意識しておくべきである。

さらに『観光実務ハンドブック』(前掲，p.607)では、博物館や美術館や民俗資料館が観光にはたす役割として「集客効果」と「文化発信効果」をあげている。この「文化発信効果」について考えてみると、図書館も地域の情報拠点として総体的に文化発信の機能を備えているし、特に昨今ではインターネットを通じての情報提供(「デジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)」、「情報発信の多様化(C-2)」)も、文化発信(あるいは地域情報の発信)として重要な役割を持っている。そしてこうした「文化発信効果」は、地域への関心を集めるという意味で「集客効果」を持ち、コンテンツの内容によっては「補助効果」ももたらすのである。

このように、「集客効果」「補助効果」「文化発信効果」という視点から各要素の特性をとらえ、その効果をより高めるための方策を検討することも、融合の実践にあたって必要である。

【補注】

(1) この種別については、根本(1999)を参考にした。

(2) この部分については、国立国会図書館(2007)などを参考にした。

(3) 例えば岡崎・梅宮(2009, p.55)は、まちづくりを進めるうえで一般的な段階として、[知る]段階、[活かす]段階、[広げる]段階があるとして、「活動初期の[知る]段階では、まず住民が地域資源を認識、発掘することが必要である」と述べている。

(4) 石田(2004)は、観光振興にあたって「郷土史家を発掘育成せよ」(p.184)と述べ、また「地元で郷土教育にもっと力を」(p.188)とも述べている。

(5) 例えば八王子市中央図書館ではわらべうたをDVD化しているし、宇都宮市上河内図書館では民話をDVD化している。また、愛知川町立図書館では「町のこしカード」というシステムにより、市民らと協力して地域文化の収集を行っている。全国の図書館で、このような地域文化保存への取り組みがみられる。

(6) 根本(1999, pp.45-46)では、地域資料は地域に存在する様々な機関や団体が発行するものがあるので、それらの機関や団体とこまめに接触し、連携を図ることによって、一般住民との仲介役あるいは交流の場として機能することが必要だと説明されている。

(7) 大串(2008, p.247)は、「図書館は地域資料の積極的な提供を求め地域との連携を図り、地域住民の認知度を上げることで収集の確実性を高めることが今後の課題となる」と指摘する。

(8) なお、ここでいう「地域テーマに沿った蔵書」は「地域資料」に含めて考えられることも多いが、本稿では内容の違いを明確にするため、地域で作成され、地域のことを主題にしている資料を「地域資料」とし、一般に流通している資料の中からテーマや内容が地域文化に関連を持つものを集めた場合を「地域テーマに沿った蔵書」として区別した。

(9) 伊東(2008, p.36)は、「図書館を利用する最大の利点は、そこを通じて入手できる本の幅広さにある。特に公立図書館は、乳幼児から老人まで、年齢に関わりなくすべての住民を対象に整備されたサービスがおこなわれているところであり、いわば乳児向けの絵本から専門的な学術論文まで、どのような種類の本や文献でも入手して利用できるところに特徴がある」と述べて、図書館の多様性を強調している。

(10) 例えば帯広市図書館で、小学生を対象にして「午前中に図書館で動物について調べ、その後動物園に移動して動物を観察する」という行事が開催された。(2009年7月29日)

(11) 例えば以下などの事例がある。

－竹田市にある「B・B・C長湯」には、山岳図書13,000冊を保有する図書館があり、長期滞在者へのアメニティを提供している。

－宮崎市の青島観光ホテル1階ロビーには「建築図書館」という図書コーナーがある。

－仙台市には「ライブラリーホテル東二番丁」、「ライブラリーホテル仙台駅前」というホテルあり、美術や建築系などの専門書が用意されている。

－奈良市のホテル日航奈良では、奈良県立図書情報館と連携して「千田稔（館長）が選ぶ20冊」というリストを用意し、宿泊者への図書の貸出サービスを行っている。

(12) ボワイエ（2006, p.217）は、想像された旅行（事前）、現実の旅行、延長された旅行（思い出）という旅行における3つのフェーズに、それぞれ3種類の文学が対応すると述べている。また「紀行文学」というジャンルがあったり、「読書と旅」や「本との出会い」などをテーマとする文献が数多くみられることを考えると、観光体験と読書体験には「他者」「異文化」「学習」「交流」などにおいて様々な関連性があると考えられる。

(13)『図書館ハンドブック』（日本図書館協会, 2005, p.81）では「レファレンスサービス」とは「何らかの情報要求をもつ利用者に対して図書館員が行う人的援助である」と説明されている。

(14) これに関連する事例として、鎌倉市図書館では修学旅行用に鎌倉市のことを紹介したビデオの貸し出しをしている。

(15) 例えば千代田区立図書館では、「コンシェルジュ」というコーナーを設け、総合案内や図書館内のガイドツアーを行っているほか、「街案内」業務として、古書店を案内したり、地域のおすすめスポットやイベントの紹介なども行っている。

(16) 旅の販促研究所（2009, pp.134-139）によれば、旅先で情報を得る方法として、観光案内所の利用は8割に達しているという調査結果があるとされているが、図書館で観光情報を得ようとする人がいるかどうかについてはまったくふれられておらず、図書館の認知度が低いことがうかがわれる。

(17) 図書館がイベントなどを行う根拠は、図書館法の第3条6号に「読書会、研究会、鑑賞会、映写会、資料展示会などを主催し、及びその奨励を行うこと」とあるのに由来する。

(18)『社会教育調査（平成20年度中間報告）』（文部科学省, 2009）

(19) 例えば兵庫県新温泉町では「ささゆり号」という移動図書館が、2007年から温泉地域へも巡回を行っている。

(20) 図書館雑誌編集委員会 「特集にあたって」, 図書館雑誌, 102(6), p.368

(21) 薬袋秀樹（インタビュー） 地域を支えるこれからの図書館像, 開発こうほう, 2008年3月号,

pp.1-10)

※なお、同記事のなかでインタビュアーが「青森市では駅前に図書館ができたことにより、買い物ついでに図書館を利用する人が増えた」という主旨の発言もしている。

(22) こうした工夫は図書館が複合施設でない場合でも行うとよいと思われるが、複合施設の場合には移動の負担が少ないので、より実施しやすいといえる。

(23) 古池(2002, pp.81-90)は、「"駅"が街になる」という論考のなかで、駅の多機能性や駅が情報発信にはたす役割を考察している。

(24)『日本の図書館　2008』(図書館協会, 2009)の統計によれば、年間開館日数が300日以上ある図書館は510館あり、さらに330日以上の館も164館ある。また、閉館時間が19時以降の図書館は1115館あり、21時以降の館も58館ある。

(25) 例えば、草津町立図書館や新潟市立中央図書館は地元が作成したガイドマップに掲載されている。

(26) このことは図書館法第8条で規定されている。

(27) 高知県と鳥取県での観光に関する相互展示は、図書館同士の交流がそもそものきっかけであったという。

(28) この分析は、大串(2002)を参考にした。

(29)『社会教育調査(平成20年度中間報告)』(文部科学省, 2009)

(30) 森(2000, p.140)は、「(図書館ボランティアは)他の人々の生涯学習を支援するために、自らの知識・技能を提供するものであることを明確にして活動を始めている。そして、他の人々に生涯学習を支援することによって、自らに刺激と活力を得、自らの知識・技能を維持し、一層高める必要から自らも生涯学習を継続する。図書館ボランティアはまさに生涯学習社会の重要な担い手である」と述べている。

(31) 塩見(1991, pp.193-194)の対談で、図書館員が選書をする際に、平素からの住民との交流が重要な役割をはたしている事例が語られている。

(32) これについては、大串夏身(2007)、バーゾール(1996)などで論考されている。

(33) この箇所は、『別冊環(15)』(藤原書店, 2008)を参考にした。

(34)『日本の図書館 2007』(日本図書館協会, 2008)によれば、全国の図書館のうち、2365館(全体の約77%)がHPを開設している。

(35) 旅の販促研究所(2009, p.66)によれば、自治体の観光地情報サイトにアクセスした経験のある人は8割以上いるという。

(36) 第17回京都図書館大会実行委員会「第17回京都図書館大会記録集」(CD-ROM)より。実施日:2008年9月3日、場所:同志社大学寒梅館／ACACEMIC RESOURCE GUIDEのHP (http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/index.html)(downloaded at 2009.12.15)

第4章　図書館を媒介役とする「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」試案

1　モデルの構築にあたって

第3章では、図書館に関する様々な要素が観光と融合しうる可能性について具体的に考察した。本章では、それらを別の角度からとらえて分析を行う。

第3章で行った考察の内容について、「観光者と図書館の間で、どのようなコミュニケーション(1)が交わされるか」という点に着目して見直してみると、一見すると図書館自体が観光者とコミュニケーションをしているようにみえて、それらの中には、図書館が「観光者と地域との媒介役」として機能しうるものがあることがわかる。

例えば、「観光者が地域のことについて、図書館で質問する」というシチュエーションでは、観光者の「質問」という行為によって、図書館は「観光者は、このようなことを知りたいと思っているのか」と認知することができる。さらにそうした情報を地域の観光課へ伝達すれば、地域内で情報を共有することにつながり、図書館はコミュニケーションの媒介役として機能することになる。こうした一連の情報フローは、観光者の質問を「発信」ととらえ、地域がこれを「受信」しているとみることができる。また、「地域産業の活動を展示によって示す」という図書館でのイベントを想定してみると、これは今度は、地域からの「発信」が、図書館を通じて観光者に「受信」されるというフローであるといえる。このような観点に立つと、「観光者」と「地域」、「発信」と「受信」という四分法によってマトリックスを構成し、その中心に媒介役としての「図書館」を設置するモデルが想定できると思われる。

こうした発想は「観光と図書館の融合」を考察することによって初めてとらえらることができるポイントである。なぜなら「観光者が図書館を利用し、図書館も観光者の存在を意識する」という状況を想定しない限り、こうした役割を図書館が担いうるということに気づくことは難しいからである。従って、この媒介役としての機能について分析を行うことによって、「観光と図書館の融合」において図書館がはたす独特な役割を考察するための手がかりがもたらされると考えられる。

そこで、これを一般化したモデルを試案として図4-1に示し、以下、このモデルについて解説をする。

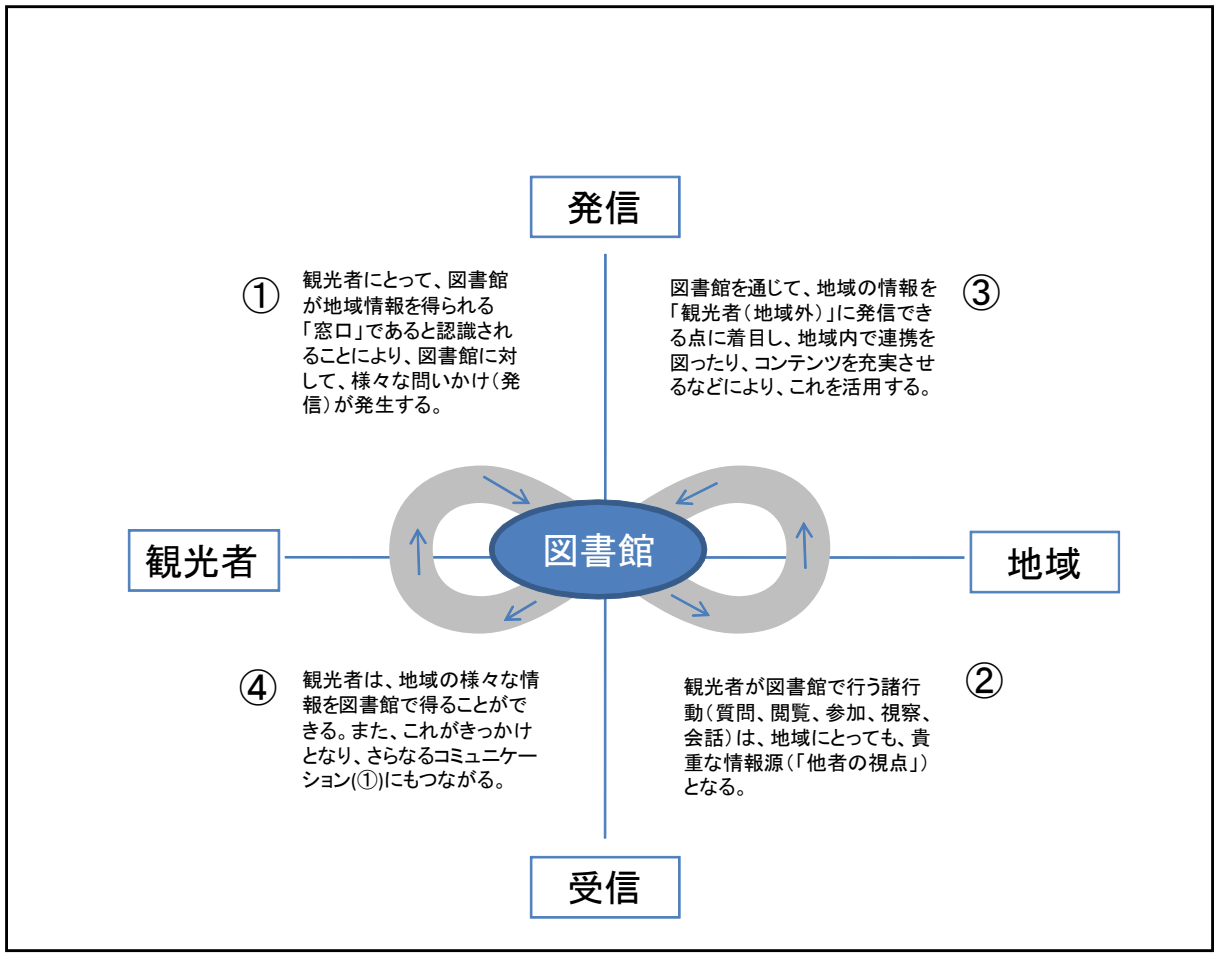

図 4-1 観光者と地域とのコミュニケーションモデル

2 モデルの説明

まず、コミュニケーションの主体をそれぞれ「観光者」と「地域」[(2)]とする。また各主体においては「発信」と「受信」がある。これらの要素を、左半分を「観光者」とし右半分を「地域」とし、また上半分を「発信」とし下半分を「受信」としたマトリックスを用意すると、図のように4つのフェイズにそれぞれが配置される。双方の媒介役としての図書館は、このマトリクスの中心部に置かれる。また「∞」（および内部の矢印）は、コミュニケーションの流れをイメージしている。

それぞれのフェイズで具体的にどのような内容が想定されるかを以下に列挙する。

図の① 「観光者－発信」

観光者が図書館に対して発信する主なメッセージとして、例えば以下などがある。ここでは、観光者からの“質問”も発信とみなすことができると考えて示している。

－地域に関する質問をする

－地域資料や特別コレクションなどを閲覧したり、資料について質問をする

－図書館で行われるイベントや行事に参加する

－観光パンフレットや市民活動のチラシなどを図書館で入手する

－図書館のHPやブログをインターネット上で閲覧する

－図書館を視察に訪問し、活動内容や市民との連携状況などを訊ねる

－観光施設や他の文化施設などについて、場所や概要を問い合わせる

図の②　「地域－受信」

上記①のメッセージを受信することによって、図書館は以下の情報を得ることができ、これを地域へ還元することができる。

－観光者が、地域のどういう点に興味や関心を持っているのかを知ることができる

－地域に関することで、疑問に思っている事項を知ることができる

－地域住民が気づかなかった地域の魅力や観光資源を発見するきっかけが与えられる

－地域を紹介するのに不足している資料を知ることができる

－イベントや行事などの反応を通して、より効果的な情報発信方法についてのヒントが得られる

－観光パンフレットやガイドマップなどに、どの程度のニーズがあるかをつかむ

－HPやブログへの注目度を知る。また検索キーワードなどで関心を測ることができる

－図書館の運営や自治体行政への関心を知ることができる

－観光施設や文化施設などのニーズを知ることができる

図の③　「地域－発信」

地域は図書館を媒介役として様々な情報を発信する。ここでは、上記②によって得られた情報も参考にして、情報の充実やわかりやすさなどへの対応が行われる。

－地域資料を提供する

－地域文化や地域テーマに関連した蔵書を揃える

－独自の資料を用意して、図書館の個性をアピールする

－地域文化を紹介するイベントなどを開催する

－まちづくりやNPO、市民などの様々な実践活動の状況を知らせる

－同人誌やミニコミ誌を展示して、地域の文化的活動の状況を知らせる

－地域で頑張っている企業や地場産業、地域ブランドなどを紹介する

－観光スポットなどを紹介する

－HPやブログで地域情報を発信する

－行政施策など自治体の諸活動について周知を行ったり統計情報を提供する

－ボランティア団体や市民活動グループとの交流の場を図書館が提供する

図の④ 「観光者－受信」

上記③を受けて、観光者は以下などを知ることができる。そして、さらに次のコミュニケーションにつながることも想定される。

－地域の様々な情報を得ることができる

－地域文化を理解することができる

－まちづくりや地域振興などの活動状況を知ることができる

－地域の住みやすさや行政全般の充実度などを測ることができる

－地域住民や職員などと交流する

全体のプロセスを改めて簡単にまとめると、①観光者が図書館で質問をしたり資料を閲覧する、②そうした行為を図書館がとらえて、「観光者が地域のどこに関心を持っているか」などを把握する、③図書館は地域と連携して、様々な地域情報の発信を行う、④観光者は地域情報を図書館で入手し、そこからさらに次の質問や交流が生まれる、となる。

上記の説明では便宜上「観光者－発信」をスタートとしているが、実際には特にどのフェイズがスタートということはない。また、各フェイズは「∞」の矢印に沿って循環的なサイクルを持っている。すなわち相互的に全体が関連しあい、コミュニケーションが進行したり、別のコミュニケーションが派生する可能性を持つ。

なお、上記の中には、観光者と図書館員との直接的なコンタクトを伴うものと伴わないものがあるが、ここでは「コミュニケーション」を広くとらえてある。

3 モデルの意義と活用

このモデルの意義は、観光者と地域との関係において、図書館が媒介役としてどのような役割を担うことができるかを、具体的なイメージを通して示すことにある。少々荒っぽい枠組みではあるが、観光と図書館の融合を実践していくにあたって、全体的な構造を大まかにとらえ、こうしたコミュニケーションが行われうるという認識を持つのに、それなりの有効性があると考える。

従来より、図書館はコミュニケーションの媒介機関としてとらえられてきた(3)が、「観光者（地域住民以外の者）」が図書館を利用する場合に特に焦点をあてた考察はなされていなかった。「地域外の者が、その地域のことを知りたいために図書館を利用する」という状況は意識されていなかったといってもよい。しかし、すでに述べたように、こんにちの観光が「地域」を重視するようになり、観光者が多様化・高度化すれば、訪問地の図書館を観光者が利用する機会も増えることが予想される。また図書館の側も、新たなサービスを模索するなかで、観光者を利用者として想定するという発想がありうる。そこで、観光者が利用した場合に、どのようなコミュニケーションが行われるか（あるいは行われる可能性があるか）について、このようなモデルを参照することによって、図書館のポジションを把握することができる。

まちづくりにとって、「よそ者」は重要な要素であるとよくいわれる(4)。しかし現実には、「よそ者」をどのように受け入れるか、交流の場をどのように設けるかなどについて課題も多い。また、「まちの魅力は住民自身では気づきにくい」(5)という指摘もよくみられるが、実際に地域外からの感想を聞く方法を考えても、適当な手段がないこともあるだろう。そのような悩みを地域が抱えている場合は、このモデルをふまえて、図書館が「よそ者」と交流し、地域外の声を聴く窓口として機能しうる可能性について検討してみるとよいのではないだろうか。その際には、図書館側も観光者による利用を歓迎し、図書館がコミュニケーションの場であるというイメージをしっかり持つことが大切である。

また、このモデルが敷田・末永（2003）による「サーキットモデル（図4-2）」(6)によく似た構造を持っている点に注目したい(7)。敷田らはこのモデルについて、「（サーキットモデルは）よそ者の知識を活用して地域の持続的な発展を自律的に進める“デザインツール”となりうる」と述べ、またループになっている点について、「何度も繰り返すことで順応的に管理を実現していくモデルである」と指摘している。「サーキットモデル」と本モデルはイコールではないが、いくつかの類似点を持っていることから、敷田らの理論を本モデルの分析に応用してみると、①観光者が発信する情報を活用して、地域の持続的な発展を進めるヒントになる、②こうした循環的なコミュニケーションを持続させていくことにより、図書館は観光者向けのサービスを洗練させ、観光者と地域のコミュニケーションをさらに促進する、という仮説が成り立つのである。ただし、この仮説の検証は今後の研究

課題である。

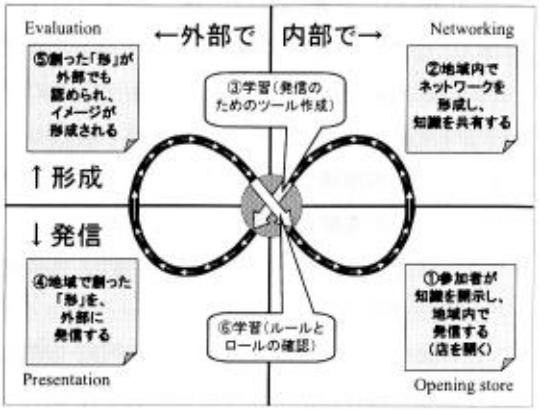

図２　一般化したサーキットモデル

図 4-2 敷田・末永による「サーキット・モデル」

（敷田・末永(2003)から転載）

なお、もちろん観光者と地域とのコミュニケーションは、図書館以外でも様々な場所で起こりうることである。従ってここであげたモデルは、全体的な構造だけをみれば、場所の設定を観光案内所や旅館や土産物屋としても、概ね類似したものになるかもしれない。しかし、図書館におけるコミュニケーションには、図書館のもつ特性が何らかの影響を与えることが考えられるので、そうした特性のうち主なものを以下に5点ほど指摘したい。

まず1点目として、図書館の独自性があげられる。吉田(2008a，p.135)が「公共図書館はコミュニティの公的空間を構成する重要な要素であり、地域住民のアクセスを確保する点において、他の文化機関が担うことのできない固有の役割を有している。そして図書館の持つ様々な機能は、そうした公共空間を動的に創出するための可能性を内包している」と指摘するように、図書館は地域のなかで他に代替のできない機能を有している。このことは、観光者にとって図書館が必要な用件は、他の施設では代用しにくいことを意味している。

2点目として、図書館の開放性があげられる。これを植松（1998，p.10）は、「公共図書館は、すべての公共施設のなかで、あらゆる年齢層の利用者を対象とする施設であり、無料で開放されていて開館時間中であれば自由な時間に訪れることができ、自由に館内の室・スペースを利用して、自分の目的とする行動をし、好きなだけとどまることができる、唯一の施設であるという特徴を持つ」と説明する。こうした図書館が持つ自由度や開放性は、観光者にとっても、図書館の利用を容易にさせ、コミュニケーションを促す大きな要素である。

3点目として、図書館にはある種の安心感や信頼性をもたらす雰囲気があることがあげられる。これには、①吟味された資料があること、②図書館員という専門家がいること、③「知の殿堂」を感じさせるような厳かさが存在すること、などが背景にあると考えられる。このことによって、「様々な質問に答えてもらえそう」という期待により観光者も安心して図書館を利用することができるし、そこで交わされるコミュニケーションにも信頼性が与えられることになる。

4点目として、図書館は平素から住民が利用しているという点があげられる。古池(2007, p.132)は、「観光化という現象が空間的に限定的な場合、その進行は、観光／非観光の図式を生みやすく、観光空間として孤立することがよく見られる」と述べて、観光空間が閉鎖的で表層的なものになりやすいことを指摘している。しかし図書館は、地域住民が日常的に特段の目的もなく利用できる施設であって、観光空間ではない。すなわち、図書館で交わされるコミュニケーションは、いわば「観光モード」ではなく「日常生活モード」だと考えられるのである。

5点目として、図書館はそもそも公共施設であり、いわゆる「ビジネス原理」とは関係がない。観光施設でよくみられるような「商売っ気」や「売らんかな」という雰囲気とは無縁である。また他の公共施設では利用にあたって費用が発生したり、サービスの対価を求められる場合もあるが、図書館はコピーサービスなどごく一部を除いて、基本的に無料で利用できる施設である。こうしたことは、観光者が図書館を訪問する際の心理的な敷居を低くすると考えられる。

上記であげたような特性がもたらす効果によって、図書館で行われるコミュニケーションには、観光者にとって訪問先の他の場所や施設で行うコミュニケーションとは異なる性格を持つ可能性が生じる。媒介役としての図書館も、このような特性を持っていることを理解し、観光者と地域とのコミュニケーションを促進させるために、さらにその特性を有効に活かす方法を考えていくべきである。

4　モデルの留意点

なお、このモデルに関連して、以下の点に留意が必要である。

①利用者が観光者かどうかは外見だけでは判別が難しい。また、たんに書架を眺めているだけの人に「どちらからいらっしゃいましたか」と訊ねるわけにもいかない。従って、図書館員への問い合わせなどの機会をうまく利用し、観光者であることを確認して、コミュニケーションや提供するサービスの方向性を必要に応じて切り替えることが求められる。

②図書館は、受信と発信の媒介役であることを意識し、観光者とのコミュニケーションによって得ら

れた様々な情報を、図書館内でとどめておくのではなく、地域に還元する意識を持つことが大切である。例えば、祭りの由来についてしばしば問い合わせがあるようなら、これを観光協会に伝え、観光パンフレットに由来をわかりやすく明記してもらう、というように、地域内の連携を図るようにすべきである。

③本モデルは、第3章の具体的な考察をベースに、筆者の図書館での実務体験や観察、図書館員への取材などをふまえたものであるが、十分な実証には至っておらず、「このようなコミュニケーションが想定される」という試案である。コミュニケーションの具体的な内容については他にも様々なものがあると思われるし、コミュニケーションが観光者、図書館、地域へどのような効果を及ぼすかについてもさらに研究が必要である(8)。

【補注】

(1) ここでいう「コミュニケーション」とは、発話や行動などによってなんらかの意思表示をしたりメッセージを交換することを意味する。

(2) このモデルでいう「地域」とは、地域住民や自治体、企業など、その地域の当事者の総称のことを意味する。

(3) すでに引用したように、『図書館情報学用語辞典』(日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編, 2007, p.174)では、図書館は「社会における知識や情報の伝播を円滑にするコミュニケーションの媒介機関としての役割を果たす」と説明されている。

(4) 例えば、藤崎(2002, p.60)は、「観光まちづくりに“よそ者”が必要とされる理由」という見出しで論考を述べている。

(5) 例えば、川口(2003, p.96)は、「まちの魅力は住民視点だけではわからない」と指摘する。

(6) 敷田麻実・末永聡(2003), p.32 ／ このモデルについて簡単に説明しておく。まず①において、地域やコミュニティで参加者が知識を開示する(これを筆者らは「店を開く」と表現している)。次に②において、地域内やコミュニティ内でネットワークが形成され、知識が共有される。次に③において、学習コア(発信のためのツール)が形成され、④において外部への発信がなされる。次に⑤において、それらが外部で認められ、イメージが形成される。次に⑥において、学習コアにそうした外部からの情報が取り込まれ、ルールとロール(役割)についての確認がなされ、これが次の①へとつながる。

(7) 両者ともに、構造的に4つのフェイズをもっており、コア部分を経由した情報の循環構造を持

っている点。また敷田モデルでいう「外部」と「内部」はそれぞれ「観光者」と「地域」に、「形成」と「発信」はそれぞれ「受信」と「発信」に対比できると考えられる。

(8) このモデルについて、観光に意欲的な取り組みをしている図書館（草津町立図書館、高知県立図書館、鳥取県立図書館）にアンケートで取材した結果、以下の感想を得た。

－観光者と地域との仲介機能を図書館がはたしていると思うので、このモデルは概ね妥当だと思う。ただし実際には、図書館でコミュニケーションが完結してしまいがちで、行政当局や関連団体への情報発信までおよばないことがある。（草津）

－このように図書館が機能すると良いと思うが、実際にこうしたコミュニケーションが成り立っているかどうかの検証が難しい。（高知）

－観光者といっても様々だし、図書館にもどういう資料をどのように提供すべきかという思いがそれぞれにあるので、モデルを一般化できるかどうか難しい。（鳥取）

第5章　まとめ

1　本研究によって示されたこと

本研究では、観光と図書館が持っている課題について「両者の融合が、双方の課題解決に役立つのではないか」という仮説をもとに、図書館の特性が観光と関連性があることをまず示したうえで、図書館の資料・サービス・施設や、図書館の地域との関連やインターネットの発達との関連など様々な点から、観光と図書館が融合しうる可能性を具体的に考察した。その結果、融合の可能性があること、またそれにより双方および地域に様々なメリットがもたらされる可能性があることを示した。さらに、これらの考察をふまえ、図書館を媒介役とする「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を試案として示した。

これまでにも図書館によっては、観光者に対応したり、観光ポスターの展示を行ったり、観光情報の問い合わせに応えるなどが行われていた。また最近では、観光に関する取り組みを積極的に行う図書館もみられるようになってきた。しかし図書館界全体で総体的にみれば「観光」への配慮はあまりなかったといってよい。

一方、観光においても「図書館」はこれまでほとんど考慮されることのない要素であった。ここで示された可能性が実践で活かされるためには、図書館が観光を意識し、観光が図書館を意識し、さらには地域が両者を融合させようと意識することが必要である。本研究がそのきっかけをもたらすことを期待するものである。

麦屋(2009, p.235)は「観光まちづくりを1軒の家にたとえて考えてみる。玄関・廊下・台所・応接間・寝室はどこになるだろうか。玄関は空港、駅、高速道路のインターチェンジや道の駅、駐車場、廊下は玄関から観光資源や施設までの道路、散策路、遊歩道、台所は田畑や海、川、そしてレストランだろう。応接間を考えると、特定の文化財や名所旧跡、温泉など観光関連施設だけが観光客を迎え入れる応接間ではない」と述べ、家を比喩とした観光まちづくりのイメージを示している。この比喩を借りるならば、図書館はまさにまちの書斎であろう。しかし、「観光と図書館の融合」という試みはそれだけにとどまらず、「寝室には愛読書があり、応接間には画集があり、リビングには趣味のハウツー本がある」というような「家のあちこちに本が置いてある状態」に喩えるほうがより適当だと思われる。図書館の持つ情報や機能やノウハウが観光と融合するためには、図書館が地域の書斎として存在するだけではなく、地域の様々な場所において、あるいは観光の様々な場面において、図書館が活躍することが望ましいのである。

2　融合によってもたらされる「新たな価値」について

第1章で、「“融合”とはお互いの要素を連携・活用・協働しあうことによって、新たな価値が創造されること」と述べた。では、観光と図書館の融合がどのような「新たな価値」をもたらしうるかについて、改めて指摘してみよう。

まず、図書館にとっては、「新たな利用者の出現」という点があげられる。これまで多くの図書館では観光者を利用者として特に意識してこなかったので、融合によって図書館に新たな利用者が出現することになる。また、図書館を新たに「観光者と地域との交流の場」としてとらえることもあげられる。従来から図書館は交流の場であったが、地域外から来訪する観光者と地域住民との交流の場としての意識が新たに生まれるのである。

次に、観光にとっては、「図書館も観光資源である」という認識をもたらす。博物館や動物園などはすでに観光資源として認知されているが、これまで図書館が観光資源であるというとらえ方はほとんどされてこなかったので、新たな観光資源が生まれることになる。また図書館を、地域情報や観光情報を提供したり、観光と様々に連携しうる機関としてとらえる見方をもたらす。これはすなわち図書館が新たな「観光のインフラストラクチャー」として出現することを意味する。

さらに地域へは、「図書館は、“まちづくり”という営為の記録を次世代に残す仕組み」という認識をもたらす。持続的な営為としてまちづくりをとらえた時、記録の保存は重要な事項であるが、ここで図書館が社会的な記憶装置であり、地域文化の可視化装置であり、情報の濾過装置であることを意識すれば、「まちづくり」の記録を図書館が担うことについて地域として共通の理解ができる。そして、図書館が観光と融合することによって、たんに記録を保存するだけではなく、観光者（地域外の人々）にも、まちづくりの有り様に関心を持ってもらったり、地域文化との関連を理解してもらうことができ、そこから様々な反応を得たり、交流につなげることができるのである。

また、図書館が観光を意識した活動を行うことによって、地域住民にも新たな周知効果をもたらす可能性があるという点も強調したい。地域住民が地元の観光案内所に行く機会はあまりないだろうが、図書館は日常的に利用される施設である。そうした場所で地域文化や地域の観光資源をアピールしたり情報を提供することによって、地域住民も日常生活のなかで地元の文化や観光情報を知る機会がもたらされる。このように「地域住民に対して、地域の観光情報を周知する」というユニークな役割を図書館に与えることができる。

石森（2008）は、地域住民が主役となり、地域住民が誇りを持つことのできる地域資源を持続可能な形で訪問者（観光者）に提供することにより、地域住民と訪問者がともに感動や幸せを共有で

きるような「新しい観光の創造」が、日本が観光立国を推進する際の最重要課題であると主張している。これまでの考察をふまえると、観光と図書館の融合はこうした「新しい観光の創造」にも、貢献しうる可能性を持っていると考えられるのである。

3　融合にあたって留意すべき点について

観光と図書館が融合する際に留意すべき点は、第3章でもそれぞれ指摘してきたが、最後に総論として特に留意すべき点を述べる。

これまで述べてきた「観光と図書館の融合」というテーマは、視点を変えると、図書館にとっては「地域住民以外へのサービスをどう考えるか」という問題に帰着する。図書館は条例や財源でみれば地域住民へのサービスが基本であるが、公共施設という点でみれば、地域住民であるとないとに関わらず、誰でも平等に利用することができる。しかし、例えば「資料の貸出」についてみても、「地域住民以外の利用者登録を認めるか」、「地域住民以外へ資料の貸出を認めるか」などは図書館によって対応が様々である。図書館が提供するサービスの中には、地域住民と地域外住民に対して同じように対応できる部分と対応しにくいものが存在しているのである。

同様に「観光と図書館の融合」についても、「図書館が観光に寄与することによって、地域のためになる」という考え方もあれば「そこまで図書館がする必要はない」という考え方もあるだろう。さらに「現実問題として、予算や人員の問題から対応が難しい」という事情などもあって、取り組み方は様々になると思われる。本研究は、「すべての図書館が観光との融合を意識せよ」とか「観光振興には図書館が不可欠」などと主張するものではないが、図書館と観光と地域が共に活性化しうる方策のひとつとして、「観光と図書館の融合」について具体的な実践が進むことを期待している。その際にどのようなスタンスをとるかは、地域における図書館の位置づけや地域全体の特性などと合わせて、各自治体それぞれが検討しなければならないが、そこでは、地域住民も当事者意識を持って意見を表明したり議論に参加することが必要である。これはまさに、これからの観光が「地域主導型」になるべき方向性と同じである。

4　今後の課題について

「観光と図書館の融合」をテーマとする先行研究がないため、本研究では、今後の研究の出発点となるべく、図書館の諸要素からみた融合の可能性をできるだけ網羅的に考察することを主眼とした。従って今後の課題としては、融合の実践にあたって検討すべき点を、より詳しく考察するこ

とが必要である。その際にはそれぞれの地域によって、観光や図書館などをめぐる状況が異なるため、一般化できる部分と個別に判断すべき部分があると思われる。また参考事例としてあげたものについても、より詳しい調査や分析も必要である。

さらに関連するテーマとして、①専門図書館や大学図書館など公共図書館以外の図書館と観光との融合の可能性、②海外における観光と図書館の融合事例、③図書や読書体験と観光との関係、などの研究も必要だと考えている。

また「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」についても、社会学などの知見をふまえて理論的な裏付けを精緻化し、現場へのフィールドワークも行うなどにより、さらに考察を行う必要がある。

【参考文献】

油川ほか（2009）新しい視点の観光戦略，学文社，200p.

バーゾール＝ウィリアム，根本彰ほか訳（1996）電子図書館の神話，頸草書房，254p.

ボワイエ＝マルク，成沢広幸訳（2006）観光のラビリンス，法政大学出版局，410p.

中央教育審議会（2008）新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について，56p.

第17回京都図書館大会実行委員会（2009）第17回京都図書館大会記録集（CD-ROM）

藤崎慎一（2002）第1章第3節　観光まちづくりは人づくりから，観光まちづくり研究会編集，新たな観光まちづくりの挑戦，ぎょうせい，pp.58-77

福永智子（2005）Ｖ－３　情報と利用者，根本彰ほか編，図書館情報学の地平，日本図書館協会，pp.315-320

羽田耕治（2008）地域振興と観光ビジネス，ジェイティービー能力開発，278p.

長谷政弘（2003）第1章　新しい観光振興に何が求められるか，長谷政弘編著，新しい観光振興，同文舘出版，pp.5-24

廣瀬誠（1990）図書館と郷土資料，桂書房，253p.

堀川紀年（2007）日本を変える観光力，昭和堂，185p.

井口貢（2002）第3章　観光文化立国の実現に向けて，井口貢編著，観光文化の振興と地域社会，ミネルヴァ書房，pp.27-42

石田順一（2004）観光立国マーケティングのコツ，JDC出版，214p.

石森秀三（2008）観光立国時代における観光創造，石森秀三編著，大交流時代における観光創造，北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院，pp.1-20

伊東達也（2008）第1章　読書の重要性と図書館，大串夏身編著，読書と図書館，青弓社，pp.16-39

金武創（2002）第9章　地酒文化と観光振興，井口貢編著，観光文化の振興と地域社会，ミネルヴァ書房，pp.127-140

桂英史（2001）人間交際術，平凡社，212p.

川口直木（2003）第四章　全国の都市観光に向けた取り組み，都市観光でまちづくり編集委員会編，都市観光でまちづくり，学芸出版社，pp.95-98

古池嘉和（2002）第6章　「駅」が街になる，井口貢編著，観光文化の振興と地域社会，ミネルヴァ書房，pp.81-90

古池嘉和（2007）観光地の賞味期限，春風社，211p.

国立国会図書館（2007）地域資料に関する調査研究（図書館調査研究リポートNo.9），201p.

米良信男（2008）現代観光のダイナミズム，同文舘出版，210p.

これからの図書館の在り方検討協力者会議（2006）これからの図書館像，93p.

窪田亜矢（2009）10章　観光の視点から考えるまちづくりの課題，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.268-283

薬袋秀樹（2005）公共図書館行政，三田図書館・情報学会編，図書館・情報学研究入門，頸草書房，pp.142-145

薬袋秀樹（2008）地域を支えるこれからの図書館像(インタビュー)，*開発こうほう*，20，pp.1-10

望月照彦（2002）第1章第2節　人々が喜んで集まり交流するまちづくり，観光まちづくり研究会編集，新たな観光まちづくりの挑戦，ぎょうせい，pp.33-58

文部科学省（2009）社会教育調査（平成20年度中間報告）

森　茜（2000）4章　図書館ボランティア，図書館ボランティア研究会編，図書館ボランティア，丸善，pp.103-152

麦屋弥生（2009）7章　持続可能な観光まちづくりの担い手たち，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.227-241

中谷哲弥（2005）第1章第3節　地域文化を見つめ直す，奈良県立大学地域創造研究会編，地域創造への招待，晃洋書房，pp.21-28

根本彰（2004）続・情報基盤としての図書館，頸草書房，199p.

根本彰（2002）情報基盤としての図書館，頸草書房，255p.
根本彰（1999）第1章　地域資料サービスの意義，三多摩郷土資料研究会編，地域資料入門，日本図書館協会，pp.1-54
根本彰（2008）日本の知識情報管理はなぜ貧困か，別冊環15，藤原書店，pp.59-70
日本観光協会編（2008）観光実務ハンドブック，丸善，942p.
日本図書館協会町村図書館活動推進委員会（2001）図書館による町村ルネサンスLプラン21，日本図書館協会，62p.
日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編（2007）図書館情報学用語辞典，丸善，第3版，286p.
日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編（1979）図書館ハンドブック，日本図書館協会，補訂4版，548p.
日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編（2005）図書館ハンドブック，日本図書館協会，第6版，652p.
日本図書館協会，日本の図書館(各年版)
日本図書館協会，図書館年鑑(各年版)
日本図書館協会図書館雑誌編集委員会，図書館雑誌(各号)，日本図書館協会
日本図書館協会編（1997）公共図書館の特別コレクション所蔵調査報告書，日本図書館協会，127p.
西村幸夫（2009）1章　観光まちづくりとは何か，西村幸雄編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.9-28
西村幸夫（2002）第1章第1節　まちの個性を活かした観光まちづくり，観光まちづくり研究会編集，新たな観光まちづくりの挑戦，ぎょうせい，pp.16-32
額賀信（2008）観光統計からみえてきた地域観光戦略，日刊工業新聞社，175p.
小川徹・奥泉和久・小黒浩司（2006）戦後の出発から現代まで，日本図書館協会，276p.
大串夏身（2008）課題解決型サービスの創造と展開，青弓社，261p.
大串夏身（2002）これからの図書館，青弓社，196p.
大串夏身（2007）最新の技術と図書館サービス，青弓社，256p.
岡野英伸（2004）「観光学」論考，アートデイズ，252p.
岡崎篤行・梅宮路子（2009）2章　まちづくりから観光へ，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.54-63

大塚由良美（2008）第10章　地域文化と図書館，大串夏身編著，課題解決型サービスの創造と展開，青弓社，pp.208-228.
阪田蓉子（2006）情報サービス論，教育史料出版会，補訂2版，246p.
三多摩郷土資料研究会編（1999）地域資料入門，日本図書館協会，287p.
佐藤一子（2003）序章　生涯学習における「公共空間」の形成，佐藤一子編，生涯学習がつくる公共空間，柏書房，pp.10-26
社会経済生産性本部（2007）レジャー白書 2007，社会経済生産性本部，150p.
敷田麻実・末永聡（2003）地域の沿岸域管理を実現するためのモデルに関する研究，*日本沿岸域学会論文集*，15，pp.25-36
島川崇（2002）観光につける薬，同友館，183p.
塩見昇（2006）図書館サービス論，教育史料出版会，補訂2版，244p.
塩見昇（1991）生涯学習と図書館，青木書店，227p.
塩見昇（2008）UNIT19　まちづくりと図書館，塩見昇編著，図書館概論，日本図書館協会，新訂版，pp.107-110
菅原峻（1999）図書館の明日をひらく，晶文社，274p.
旅の販促研究所（2009）旅人の本音，彩流社，205p.
高山正也（2008）日本における文書の保存と管理，別冊環15，藤原書店，pp.42-58.
竹内比呂也・豊田高広・平野雅彦（2007）図書館はまちの真ん中，頸草書房，180p.
図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会（2005）地域の情報ハブとしての図書館，76p.
内田州昭（2004）第9章　観光文化と生涯学習，北川宗忠編著，観光文化論，ミネルヴァ書房，pp.201-228
植松貞夫（1998）総論，*SD*，別冊(31)，pp.5-11
梅川智也（2009）3章　観光からまちづくりへ，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.97-112
渡部幹雄（2006）地域と図書館，慧文社，235p.
山崎博樹・蛭田廣一（2008）第11章　地域情報と図書館，大串夏身編著，課題解決型サービスの創造と展開，青弓社，pp.230-261
柳与志夫（2009）知識の経営と図書館，頸草書房，254p.
安村克己（2006）観光まちづくりの力学，学文社，166p.

吉田右子（2008b）コミュニティにおける公共図書館の位置づけ，*言語*，37(9)，pp.46-53.
吉田右子（2008a）住民による図書館支援の可能性，日本図書館情報学会研究委員会編，変革の時代の公共図書館，勉誠出版，pp.135-152

【添付資料】

（別紙1） 参考事例リスト，10p.
（別紙2） 「観光と図書館に関するアンケート」調査結果，9p.
（別紙3） 「観光に関連した活動に意欲的な図書館への追加アンケート」調査結果，4p.

Discussion on the possibility of the fusion of tourism and libraries

MATSUMOTO Hideto

ABSTRACT

The purpose of this study is to suggest the role of the fusion of tourism and libraries in solving the issues faced by tourism and libraries today. In order to achieve this purpose, the possibility of the fusion of tourism and libraries is discussed from various angles, with special focus on the tourism and public libraries in Japan. The paper first describes the issues of tourism and libraries and then suggest a hypothesis stating that "the fusion of the tourism and libraries could be helpful in solving the issues faced by both of them. In the next step, after preliminary discussions, the possibility of the fusion of tourism and libraries is discussed with concrete examples. Lastly, "a communication model with tourists and local communities" in which libraries are considered as intermediaries of communication to connect tourists and local communities is presented.

This paper points out two main challenges faced by the tourism in Japan today, that is, (1) tourism promotion led by local communities, and (2) response to the diversification and advancement of tourism. As an organization to provide solution to these issues, this paper focused on the public libraries.

At the same time, the public libraries in Japan also face various difficulties. Of them, two main issues are (1) how new services are developed, and (2) how public libraries can contribute to the local communities. If concepts of "new services = services to tourists" and "contribution to local communities = contributing to local communities through transmission of local information and tourism promotion" are introduced, the tourism-conscious activities by libraries are considered as one of the measures to solve the issues they face.

As such, backed by the incentives to cooperate of both tourism side and libraries side, a hypothesis stating that "the fusion of tourism and libraries may generate benefits to both sides" are formulated as a basis for the discussion.

Next, we conducted preliminary discussions on relevance to tourism indicated by characteristics of libraries, and similarities observed in a way for tourism and libraries to respond to the social issues.

Following these preliminary discussions, specific examples are used to discuss the possibility of the fusion of libraries with tourism. Here, each of the constituents of libraries is examined from various perspectives. Also, the examples under discussion are also classified into several categories. Then, analyses are conducted from the perspective of libraries in the order of (1) the basic constituents of libraries ("materials", "services" and "facilities"), (2) the factors related to "libraries and local communities", (3) "relationship with the internet society", and (4) "other issues". Analysis on each of these topics consists of description of the each issues, introduction of reference examples, and analysis on the possibility of the fusion. This approach has been designed with an intention to indicate specifically that tourism and libraries could fuse in various ways and also to provide a check list for the further study in future.

In addition, communications between tourists and libraries are discussed, and "a communication model between tourists and local communities" is suggested as a preliminary model to indicate libraries' role as intermediaries between tourists and destination communities. This model highlights the point that libraries could function as intermediaries of communications between tourists and local communities in the fusion of tourism and libraries.

Finally, "new values" realized by the fusion of tourism and libraries are discussed. That is, the fusion will "create new users" for libraries, enable tourism-related parties to "recognize libraries as tourism resources", and make local residents "consider libraries as a mechanism to keep the record of the activities of 'town-development' to the next generation". In this way, the fusion of tourism and libraries has the possibility of creating values that has not existed before, and furthermore, the fusion of tourism and libraries could also contribute to "tourism creation" when viewed holistically.

（別紙１）

2009年度修士論文
松本秀人

第３章　融合の可能性についての具体的考察

参考事例リスト

【A-1-2　地域テーマに沿った蔵書】

図書館名	内容
浦河町立図書館	サラブレッドコーナー（馬牧場が多いので）
音更町図書館	伊福部昭資料室（伊福部にゆかりの地なので）
市立士別図書館	羊関連資料を収集（牧羊の盛んな土地なので）
市立富良野図書館	ワインコーナー（ワイン作りの盛んな土地なので）
紋別市立図書館	流氷やオホーツク海に関する資料を収集
弘前市立弘前図書館	リンゴ関連資料を収集（リンゴにゆかりのある地なので）
北茨城市立図書館	石炭産業関連資料を収集（かつて常磐炭田の中心地だったことから）
草津町立図書館	温泉、高山植物、スキーの重点収集（いずれも同地に関連が深いので）
戸田市立図書館	漕艇関連資料を収集（荒川、戸田競艇などボートにゆかりのある地なので）
福生市立中央図書館	立川基地関連資料を収集（立川基地があるので）
あきる野市五日市図書館	自由民権関連資料を収集（“五日市憲法草案”にゆかりのある土地なので）
千代田区立図書館	出版関連資料を収集（出版社や出版業が地場産業なので）
佐渡市立真野図書館	能や狂言関連資料を収集（佐渡島に能舞台が多いので）
越前市中央図書館	源氏物語関連資料を収集（旧武生市の時代に、町名に源氏物語の各巻名が用いられた歴史から）
佐久市立臼田図書館	宇宙関連資料を収集（宇宙観測所があり、「星のまち」をアピールしているので）
中津川市立済美図書館	林業や石材関連資料を収集（市の主要産業なので）
富士宮市立中央図書館	富士山関連資料を収集（富士山にゆかりのある地なので）
常滑市立図書館	陶磁工芸、窯業関連資料を収集（同市の主要産業なので）
守山市立図書館	蛍関連資料を収集（ほたるにゆかりのある地なので）
芦屋市立図書館	村上春樹、小川洋子のコーナー（作家にゆかりのある地なので）
姫路市立城内図書館	城郭関連資料を収集（姫路城の一角にあり、また「日本城郭研究センター」の一部門としても機能）
勝山市立図書館	恐竜関連資料を収集（恐竜の化石が多く出土するので）
島根県立図書館	竹島関連資料を収集（島根県に属しており、関心を集めているので）
倉敷市立玉島図書館	良寛文庫（良寛がこの地で修行したことから）
広島市立中央図書館	被爆文献資料を収集（被爆地なので）
呉市立中央図書館	海の文庫コーナー（瀬戸内海や海軍にゆかりの地なので）
尾道市中央図書館	林芙美子コーナー（作家にゆかりのある地なので）
徳島県立図書館	橋と川に関する資料を収集（橋や川が県内に豊富なので）
佐世保市立図書館	旧海軍資料を収集（海軍にゆかりの地なので）
別府市立図書館	温泉コーナー
中津市立小幡記念図書館	福沢諭吉関連資料を収集（諭吉にゆかりの地なので）

【A-1-3　コレクション・文庫】

図書館名	内容
幕別町図書館	「北の本箱事業」（全国の著名人から蔵書の一部を図書館に寄贈してもらっている）
八雲町立図書館	徳川文庫（旧尾張藩主徳川慶勝が同町を開墾した経緯などから徳川家と同町はゆかりが深い）
群馬県立図書館	小野寺文庫（養蚕関連資料）
桐生市立図書館	羽仁文庫（羽仁五郎の寄贈による文庫。洋書、和書、雑誌合わせて約2万点）
神奈川県立図書館	ベストセラーズ文庫（明治以降約130年間のベストセラーを所蔵）
神奈川県立川崎図書館	社史コレクション（会社史、経済団体史、労働組合史など、約1.4万冊を所蔵）
茅ヶ崎市立図書館	市民文庫　斎藤昌三文庫（初代館長でもあった読書人斎藤昌三のコレクション）
湘南大庭市民図書館	マイアミビーチ文庫、片山哲文庫、古在由重文庫など藤沢ゆかりの文庫多数
小千谷市立図書館	西脇順三郎記念室（小千谷出身の詩人西脇の洋書や絵画、原稿など）
富山県立図書館	洗足学園富山文庫（洗足学園魚津短期大学による近代文学関連資料を引き継ぐ）
金沢市立玉川図書館	近世史料館に加越能文庫など約8万冊の史料を所蔵
福井県立図書館	松平文庫（日本史において非常に評価の高い重要史料）
豊橋市中央図書館	司文庫（丸善相談役の司忠の寄贈による）
京都府立図書館	教科書のコレクション（小中高の教科書約2万冊を所蔵）
京都市醍醐図書館	「醍醐図書館だけが持っている絵本」（他では閲覧しにくい絵本を約170冊所蔵）
向日市立図書館	椿コレクション（渡邊武による日本中の椿に関するコレクション、約1,500点）
奈良県立図書情報館	戦争体験文庫（戦中・戦後の生活や社会の様子を記録した資料）
出雲市立大社図書館	おおやしろ文庫（出雲大社からの寄贈書約1,400冊）
田布施町立田布施図書館	岸文庫・佐藤文庫（岸家、佐藤家からの寄贈書）
愛媛県立図書館	伊予俳諧文庫（高浜虚子の虚子文庫などを含む俳諧関連資料）
大村市立図書館	大村家史料、彦右衛門文書（隠れキリシタン関連など）
熊本市立図書館	蘇峰文庫（徳富蘇峰の自著を中心に約400冊）
宮崎県立図書館	杉田文庫（日本の俳諧三大文庫のひとつとされる）
沖縄県立図書館	琉球王国時代の文書などの特殊文庫を所蔵

※『公共図書館の特別コレクション所蔵調査報告書』（日本図書館協会編, 1997）によれば、全国の 308 館に 735 件のコレクションが存在する。（ただしこの文献には、本研究でいう「地域テーマに沿った蔵書」なども含まれている）

【A-2-2　イベント・行事】

図書館名	内容
北海道立図書館	歴史講演会「資料で語る北海道の歴史」(9/20)
むつ市立図書館	「映画監督川島雄三生誕90周年展」(8/6-9/7)(→川島はむつ市出身)
五戸町図書館	「昭和の五戸町風景写真展及び民具展」(8/9-17)
岩手県立図書館	「斎藤實伝－生誕150周年記念展」(12/15-2009.1/25)(→斎藤は岩手県出身)
仙台市図書館	歴史講座「政宗の長女、五郎八姫と下村愛子」(11/22)
秋田市立図書館	市民文化講座「江戸文学と秋田」(9/23-10/13)
横手市立図書館	企画展「佐々木康の世界」(7/22-8/24)(→佐々木は横手市出身の映画監督)
上山市立図書館	市民講座「上山文学散歩」(第二土曜)
いわき市立図書館	企画展「地名の変化にみる　いわきの近代化展」(10/11-11/30)
柏市立図書館	「柏の“まち”を知る歴史資料・写真展」(10/21-11/1)
山武市立図書館	「私のイチオシ本(お勧めしたい本の手作りPOP募集)」(1月)
袖ヶ浦市立図書館	「ようこそ図書館へ　子ども読書の街袖ヶ浦(図書館まつり)」(10/18-19)
船橋市図書館	展示会「浮世絵に描かれた房総」(10/31-12/14)
新潟県立図書館	「小熊ゆかり　コンサート」(10/4)(→小熊は新潟県出身)
新潟市立図書館	「ほんぽーとマンガ大学(県内出身マンガ家らによるシンポジウムなど)」(9月)
見附市図書館	地元の文化を学ぶ講座「郷土を知ろう」(11/2-)
山梨県立図書館	文化講座「山梨百科」(6月, 9月, 11月)
都留市立図書館	「谷のまち・史(ふみ)の里　まちの記録・記憶展」(10/28-11/9)
韮崎市立図書館	「保阪嘉内 宮沢賢治 花園農村の碑」碑前祭(10/18)
荒川区立図書館	荒川区の10代が選ぶ100冊・心に残った大切な一冊」(12/1)
江戸川区立図書館	企画展示「江戸前の海」(7/16-31)
北区立図書館	展示「赤レンガ・近代産業」(9/26-11/26)
江東区立図書館	郷土資料講演会「時代を越える芸の世界－庶民に愛された下町大衆芸能」(11/22)
台東区立図書館	郷土史講座「隅田川をめぐる文化と歴史」(2-3月)
中野区立図書館	展示「中野交通ノスタルジイ」(3/1-9/25)
昭島市民図書館	地域史講演会「昭島の玉川上水と水車」(12/6)
青梅市図書館	講演会「私の東京、私の青梅(浅田次郎)」(3/15)
小平市立図書館	写真展「小平市郷土写真展」(2/2-3/6)
府中市立図書館	テーマ展示「ハス博士大賀一郎と府中」(7/7-8/4)
魚津市立図書館	講座「米騒動90周年記念歴史講座」(11/18)
加賀市立図書館	講座「ふるさと歴史講座」(10/17-11/7)
白山市立図書館	企画展示「図書館利用者が作られた絵本メッセージカード」(4/1-2009.3/31)
中能登町立図書館	「中能登検定(図書館まつりのイベント)」(8/2)
福井県立図書館	展示「福井再発見ふるさとの地図－ちょっと昔の福井を見る」(2/5-24)
福井市立図書館	展示「福井の桜風景『桜木町』という地名をたずねて」(3/22-4/30)
豊橋市図書館	展示「東三河の作家展」(10/25-11/24)
蟹江町図書館	企画展「黒川紀章の軌跡」(1/12-27)(→黒川は蟹江町出身)
亀山市立図書館	パネル展示「鈴鹿川の環境」(5/30-6/30)
和歌山県立図書館	開館100周年記念事業・記念講演「紀州人(津本陽)」(7/11)
大山町立図書館	民工芸品展示(10/2-15)
日野町図書館	セミナー「生田長江入門セミナー」(1/19)(→生田は日野町出身の小説家)
岡山県立図書館	講座「岡山の正月行事－各地に伝わる興味深い習わし」(12/6)
広島市立図書館	講演会「広島は私の街－新藤兼人監督と広島」(8/23)
周南市立図書館	特別資料展示「周南ゆかりの書画展」(3/7-13)
萩市立図書館	講演「益田親施の時代－幕末の政治社会」(3/14)(→益田は萩藩家老)
土庄町立中央図書館	写真展「73年前の小豆島」(4/8)
佐賀県立図書館	企画展「肥前の古武道」(10/17-11/24)
諫早市立図書館	展覧会「諫早市中学校美術教師作品展」(2/9-17)
熊本県立図書館	パネル展「人吉・球磨地域情報パネル展」(3/1-31)
水俣市立図書館	講演「蘆花文学のおもしろさ」(11/1)(→徳富蘆花は水俣出身)
西原町立図書館	記念講演会「過去を振り返り、未来を展望する－沖縄を見つめて48年(ランドフル・スラッシャー)」(8/10)

※ 2008 年の実施事例。『図書館年鑑　2009』より採録。

【A-3-1　設計やデザインの効果】

図書館名	内容
置戸町生涯学習情報センター	新聞・雑誌コーナーに薪ストーブを設置したり、「木と暮らしのコーナー」など多様なコーナーを設置。
石狩市民図書館	「図書館の中に賑わいをつくろう」をコンセプトに、レイアウトやデザインを工夫。
斜里町立図書館	昭和4年に建設された旧斜里町役場を図書館として利用。
水戸市立西部図書館	ドーム状の閲覧室と楕円形の回廊が話題になった。“吉田五十八賞”を受賞。
文京区大塚公園みどりの図書室	ドイツの山小屋風。屋外の公園で閲覧が可能。
本郷図書館鴎外記念室	森鴎外の屋敷跡。
秦野市立図書館	丹沢が近いので、山小屋をイメージしたデザイン。
藤沢市総合市民図書館	「本の中に入る」をコンセプトに、館内あちこちに閲覧席を用意。
勝山市立図書館	合掌造りにからくり時計というユニークな建物。
上野原市立図書館	ドーム型の建物で「リンデンドーム」と呼ばれる。館内の床はカーペット敷き。
各務原市川島ほんの家	展望台ラウンジがある。
浜松市佐久間町図書館	林業の町なので、ロッジ風の木造建築。ロビー中央に樹齢百年の杉の大黒柱がある。
志摩市立阿児図書館	瀟洒な洋館風の建物。
大阪府立中之島図書館	ネオバロック様式の重厚な建物。重要文化財に指定されている。
出雲市立大社図書館	可愛いデザインで「でんでん虫」の愛称で呼ばれている。
山口県立山口図書館	煉瓦造りの書庫は、現在「クリエイティブ・スペース赤れんが」として活用されている。
宇和島市立簡野道明記念図書館	陣屋を復元した建物で、中には茶室もある。
北九州市立中央図書館	磯崎新の設計による、ユニークなデザインとレイアウトが特徴。
苅田町立図書館	パティオや野外読書席などがあるユニークなデザイン。
伊万里市民図書館	中庭を開放したり、「のぼりがまのおへや」「イスの木のコーナー」など多様なコーナーを設置。
唐津市近代図書館	クラシックな洋館を思わせるデザイン。
五島市立図書館	天守閣風な建物。

【A-3-2　複合施設の効果】

図書館名	内容
大空町女満別図書館	駅舎と一体の施設。
厚岸図書情報館	駅に隣接しており、「情報プラザ」が集いの場になっている。
石狩市民図書館	地場産品を販売する売店が設置されている。
北広島図書館	駅前の立地であることから“旅”のコーナーを設置。
滝上町図書館	バスターミナルとの複合施設のため、観光シーズンになると案内はもちろん、荷物を預かったり宿の手配も行うことがある。（アンケートより）
日高町立日高図書館郷土資料館	道の駅に隣接しているため、観光シーズンはトイレの利用が多い。（アンケートより）
浦河町立図書館	総合文化会館との複合施設。ショッピングセンターやホテルとも隣接。
弘前市立弘前図書館	郷土文学館と併設。
青森県立図書館	近代文学館を館内に有する。
塩竈市民図書館	「壱番館」という総合センター内に設置。“タイムシップ塩竈”という郷土博物館的ミニコーナーもある。
美里町近代文学館	図書館、ギャラリー、千葉亀雄記念文学室で構成。
鹿角市立花輪図書館	民俗資料室が付設されている。
庄内町立図書館	内藤秀因水彩画記念館と併設。
塙町立図書館	磐城塙駅および塙町コミュニティプラザと併設。
日立市立記念図書館	「日立シビックセンター」の一角にあり、科学館や音楽ホールと併設。
大平町立図書館	公民館、町民ホールなどが集まって総合的な“文教ゾーン”を形成。
戸田市立図書館	郷土博物館が図書館内にある。
町田市立中央図書館	「エルムビル」という複合施設内に設置。同施設にはホテルもある。
文京区真砂中央図書館	ふるさと歴史館が隣接。
福生市立中央図書館	郷土資料館を併設。
厚木市立中央図書館	「厚木シティプラザ」という複合施設内に設置。
新潟県立図書館	新潟県立自然科学館に隣接。
三条市立図書館	三条市歴史民俗産業資料館に隣接。
上越市立高田図書館	小川未明文学館が図書館内に併設。
新潟市立中央図書館	「ほんぽーと」という愛称で、多目的ルームなどの設備が充実。
小浜市立図書館	再開発によって整備された繁華街の複合ビルの４～６階をしめる。
藤枝市立図書館駅南館	「BIVI藤枝」という複合施設内にあり、駅にも隣接。
常滑市立図書館	陶芸などの展示室がある。
宇治市中央図書館	宇治市文化センター内にあり、文化会館、歴史資料館、中央公民館との複合施設。
和歌山県立図書館	「きのくに志学館」という名称で、文化情報センターの一角をしめる。
徳島県立図書館	文化の森総合公園内の一角にある。
高松市図書館	「サンクリスタル高松」という総合施設内にあり、菊池寛記念館、歴史資料館が併設。
福岡市総合図書館	福岡市文学館を併設。
熊本県立図書館	「温知館」という名称で、図書館と近代文学館が併設。

【B-1　まちづくりとの連携】

［浦安市立図書館］
・竹内紀吉（1985）図書館の街・浦安, 未来社, 227p.
・竹内紀吉（1989）浦安の図書館と共に, 未来社, 231p.
・常世田良（2003）浦安図書館にできること, 頸草書房, 270p.
・鈴木康之（2004）浦安図書館を支える人びと, 日本図書館協会, 301p.

［置戸町立図書館］
・図書館問題研究会（1981）まちの図書館, 日本図書館協会, 424p.
・澤田正春（1992）山あいの図書館と地域のくらし, 日本図書館協会, 251p.

［斐川町立図書館］
・白根一夫（2008）町立図書館をつくった, 青弓社, 315p.

［静岡市立御幸町図書館］
・竹内比呂也・豊田高広・平野雅彦（2007）図書館はまちの真ん中, 頸草書房, 180p.

［その他の文献例］
・岩田雅洋（2000）図書館をつくる, アルメディア, 219p.
　（府中市、東村山市の実践記録）
・扇元久栄ほか著（1997）図書館づくり運動実践記, 緑風出版, 348p.
　（仙台、鶴ヶ島、伊万里の実践記録）
・小林幸三（2003）枝幸図書館物語, 文芸書房, 107p.
　（枝幸図書館について）
・鈴木雄介（1998）図書館は楽しさいっぱい, 静岡教育出版社, 191p.
　（竜洋町立図書館について）
・ちばおさむ（1992）本のある広場, 教育史料出版会, 238p.
　（墨田区図書館について）
・増田浩次（1997）苅田町立図書館の 3000 日, リブリオ出版, 135p.
　（苅田町立図書館について）
・身近に図書館がほしい福岡市民の会（2006）おーい図書館！, 石風社, 276p.
　（福岡市の図書館づくり運動について）
・山本宣親（1996）図書館づくり奮戦記, 紀伊国屋書店, 224p.
　（富士市立中央図書館について）

【B-2　様々な連携】

図書館名	内容
北海道立図書館	「歴史発見！　自然発見！　ウォークラリー」(5/3-5)(→博物館等と連携事業)
帯広市図書館	「おびひろからわかる?!　地球のようす展」(6/28-7/30)(→洞爺湖サミットに合わせたパネル展示・クイズなど)
秋田県立図書館	県立博物館・県立近代美術館との3館交流事業(展示や講演会、図録コーナーの設置など)
伊勢崎市	「読書の街いせさき計画」事業
日野市立図書館	テーマ展示「動物園へ行こう」(5/1-6/15)(→多摩動物園と連携)
静岡県立中央図書館	「徳川家康と静岡展」(9/27-28)(→県立美術館等と共催)
若桜町立わかさ生涯学習情報館	講演会「SLと若狭鉄道の魅力」(4/13)(→若桜鉄道沿線図書館の連携事業)
滋賀県立図書館	資料展示「湖国の医史－先人たちの活躍を知る」(10/16-26)(→滋賀医科大学付属図書館と共催)
松江市立図書館	展示と講演「出雲国に伝播した華岡流医術とその時代」(3/9-14)(→県立図書館、島根大学付属図書館との合同企画)
米子市立図書館	講演会「小泉八雲と山陰」(11/22)(→高専との連携事業)

※ 2008 年の実施事例。『図書館年鑑　2009』より採録。

【B-3　交流の場としての図書館】

図書館名	内容
札幌市立中央図書館	児童書コーナーで、利用者がお勧めする本を“カード”で掲示し、利用者同士の交流が行われている。
北広島市図書館	ボランティア団体が「フィールドネット」というネットワークを組織して活動している。
柏市立図書館	地域ボランティアが中心となって、地域の歴史資料を収集するなどの活動が行われた。（平成20年）
塩尻市図書館	塩尻市民読書の会が、活動が顕著だとして文部科学大臣表彰を受けた。（平成21年）
由利本荘市本荘図書館	外国人が自国の絵本を母国語により読み聞かせする活動をしている。
藤枝市立図書館	自分が読んだ本を紹介する「よむゾーくん大賞」（小中校生が対象）を募集している。
静岡県立中央図書館	中国浙江省の浙江図書館との間で「友好提携書」を締結した。（2009年2月24日）
金沢市立玉川図書館	「ユースライブラリーコーナー」の設置にあたって学生ボランティアが活躍した。
奈良県立図書情報館	公募で選ばれた市民が役者となり、図書館を舞台にした劇を上演。（2009年2月28日）
葛城市立新庄図書館	「短歌の故郷“新庄”」をめざして、図書館が短歌を募集している。
長井市立図書館	市民の要望を受けて、「街なか図書館」として、長井駅待合室内や小桜館などにミニ図書館を設置している。
出水市立図書館	「読書活動日本一のまちづくり」（平成19年策定）により、図書館が活発に活動している。

※『図書館年鑑（各年版）』および図書館の HP 等から採録。

【C-1　デジタル・アーカイブズによる情報提供】

図書館名	内容
宮城県図書館	「叡智の杜」という専用サイトで貴重書のデジタルアーカイブを公開。（http://eichi.library.pref.miyagi.jp/）
秋田県立図書館	明治時代から昭和時代初期にかけての秋田県内の観光案内誌がデジタル化されているコーナー「名勝案内による秋田の昔の旅」などがある。（ http://www.apl.pref.akita.jp/）
長岡市立中央図書館	「ながおかネット・ミュージアム」という名称で、直江兼続の書状など貴重資料をデジタル化。（ http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/museum/index.html ）
調布市立図書館	「市民の手によるまちの資料情報館」というコーナーがあり、市民が集めた情報のデジタルライブラリーがある。（http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/machi/index.htm）
立川市図書館	朝日、産経、東京、日経、毎日、読売の新聞各社の許諾のもと、立川市に関連する新聞記事の見出データベースを提供している。（http://www.library.tachikawa.tokyo.jp:8080/）
岡崎市立中央図書館	「バーチャル郷土資料館」が充実しており、郷土コレクションを様々な角度から検索できるほか、図書館が所蔵する、冊子、掛け軸、浮世絵などのデジタルアーカイブがある。（http://www.library.okazaki.aichi.jp/tosho/local_search.html）
福井県立図書館	松平文庫、酒井家文庫などの貴重資料のデジタルアーカイブがある。（ http://www.library.pref.fukui.jp/kyoudo/digital_archives.html ）
広島市立図書館	特別集書のコーナーの中に、被爆体験談の動画が見られる「被爆体験談記録ビデオ」コーナーがある。（http://www.library.city.hiroshima.jp/special/collection/index.html）
長崎県立長崎図書館	「郷土ライブラリー」に様々な郷土資料があるほか、「来館者芳名録」の一覧リストなどもある。（http://www.lib.pref.nagasaki.jp/index.php?id=5）

※各 URL　downloaded at 2009.12.15

【C-2　情報発信の多様化】

①図書館のブログ例
- 伊万里市民図書館ブログ（http://blog.goo.ne.jp/imari_library）
- 「指定管理者日誌－山中湖情報創造館にて」（http://yamanakako.exblog.jp/）
- 厚岸情報館（http://www.town.akkeshi.hokkaido.jp/jouhoukan/cgi-bin/wordpress/）
- 市立竹原書院図書館（http://www.takeharashoin.jp/index.html）
  →「図書館長エッセイ「図書館徒然草」」のコーナーがある。
- 鳥栖市立図書館（http://librarytosu.sagafan.jp/）「名誉館長のブログ」
- 横芝光町立図書館（http://blog.goo.ne.jp/hikari_library）「マロニエの花咲く」

②メールマガジンの発信例
奈良県立図書情報館、厚岸情報館、静岡県立中央図書館

③その他の関連事例
- 平塚市図書館のＨＰ（http://www.lib.city.hiratsuka.kanagawa.jp/）では、「みんなの掲示板」として市民活動のバナーを募集している。
- 成田市立図書館のＨＰ（http://www.library.narita.chiba.jp/）は、リンク集が非常に充実していることで知られている。
- 千代田区立図書館が「千代田 Web 図書館」（https://weblibrary-chiyoda.com/）として日本初のインターネットによる電子図書の貸出返却サービスを行っている。
- 国立国会図書館（http://www.ndl.go.jp/）のカレントアウェアネス・ポータルは（http://current.ndl.go.jp/）図書館に関する情報ポータルとしてよく知られている。

※各 URL　downloaded at 2009.12.15

【C-3　ネットコミュニティの影響】

①図書館に関連するＨＰ例

・図書館駅訪問記（http://munozy.ld.infoseek.co.jp/lib-eki.htm）
・東京図書館制覇（http://www.tokyo-toshokan.net/）
・おへんろ図書館めぐり（http://www.geocities.jp/kuuu2004/henro.html）

②図書館関連のブログ例

・かたつむりは電子図書館の夢をみるか（http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/）
・図書館断想（http://d.hatena.ne.jp/katz3/）
・図書館退屈男（http://toshokan.weblogs.jp/）
・Traveling LIBRARIAN　－旅する図書館屋（http://d.hatena.ne.jp/yashimaru/）
・おばちゃんらいぶらりあん日記（http://t-amana.cocolog-nifty.com/）
・図書館屋の雑記帳（http://blog.goo.ne.jp/mimuk）
・ほどよい司書の日記（http://moderate.cocolog-nifty.com/hodoyoi/）
・愚智提衡而立治之至也（http://jurosodoh.cocolog-nifty.com/）
・酔いどれ図書館員の日記（http://diary.cbsquare.net/）
・Tohru's diary（http://sakuraya.or.tp/blog_t/index.cgi）
・Myrmecoleon in Paradoxical Library. はてな新館（http://d.hatena.ne.jp/myrmecoleon/）
・LisBlogger - 図書館系ブログポータル Wiki（http://www20.atwiki.jp/lis-blogger）/

③コミュニティ関連の情報

・mixi に「図書館」をテーマとするフォーラムは 490 件ある。（2009.12.15 時点）（http://mixi.jp/）
・趣味人倶楽部には「図書館倶楽部」「図書館を語ろう」などのコミュニティがある。（http://smcb.jp/）

④その他

・「ACADEMIC　RESOURCE　GUIDE」（図書館関連および、広く学術情報や情報処理に関するテーマを扱っているサイト）（http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/）
・図書館と本の情報サイト（ブレインテックによるサイト）（http://www.jcross.com/）
・レファレンスクラブ（日外アソシエーツによる「調べものをする人のための情報とコミュニティサイト」）（http://www.reference-net.jp/）
・Library　RSS（図書館関係アンテナ）（http://itasan.mydns.jp/wiki.cgi?page=Library+RSS）

※各 URL　downloaded at 2009.12.15

【D-1　図書館への視察・見学】

①NPO法人 IRI知的資源イニシアティブによる「Library of the year」大賞受賞館

第１回(2006)鳥取県立図書館
第２回(2007)愛荘町立愛知川図書館（会場賞：静岡市立御幸町図書館）
第３回(2008)千代田区立千代田図書館
第４回(2009)大阪市立図書館
（http://www.iri-net.org/　downloaded at 2009.12.15）

②日本図書館協会建築賞について

同賞は、建物の建築様式や図書サービスが優れた図書館を顕彰しようと、同協会が1985年に創設。毎年、自治体や大学、学校などのすべての種類の図書館（室）を対象に公募し、建築専門家や図書館専門家らによる選考専門委員会で優れた図書館を選ぶ。第25回（2008年度）の受賞館は、大手前大学さくら夙川キャンパスメディアライブラリーとあきる野市東部図書館であった。

③その他

優れた建築物に対して「吉田五十八賞」が表彰されているが（1976-93)、この受賞者にも図書館（1993、水戸市西部図書館／1987、脇町立図書館）がある。

【D-2　図書館とツアー】

①図書館ツアーの例

愛知県図書館（小中学生向けツアー、一般向けイブニングツアー、一般向けツアー）
足立区立図書館（図書館見学ツアー）
石川県立図書館（子ども図書館探検隊）
大分県立図書館（バックヤードツアー）
大野市図書館（書庫見学会）
大山町立図書館（夜の図書館）
河内長野市立図書館（親子で楽しむなぞの地下書庫探検隊）
北区立図書館（館内ガイドツアー）
岐阜県図書館（書庫ツアー）
合志市図書館（春の夜の図書館読書探検隊）
市立佐土原図書館（図書館ツアー）
立川市図書館（大人のための図書館見学）
新居浜市立図書館（夏休み図書館こども探検隊、大人のための図書館探検ツアー）
福井県立図書館（図書館探検隊、図書館ツアー）

②図書館によるツアーの例

広島市立中央図書館の「広島市立図書館メイト」、小松市立図書館友の会などがバスツアーを行っている。

③選書ツアー

これまで北広島市図書館、石狩市民図書館、置戸町立図書館、山中湖情報創造館などで実施されている。

（参考文献：田井郁久雄,「選書ツアー」の実態と「選書ツアー論議」, 図書館界, 59(5)， pp.286-300）

④その他（スタンプラリー的なイベント例）

安曇野市図書館「スタンプラリー」
伊万里市民図書館「スタンプキャンペーン」
浦安市立図書館「スタンプラリー」
鹿島市民図書館「図書館スタンプラリー」
奈良県立図書情報館「読書週間スタンプラリー」
横浜市立図書館「読書スタンプマラソン」
輪島市立図書館「読書スタンプラリー」

※①、②、④は 2008 年の実施事例。『図書館年鑑 2009』より採録。

（別紙２）

2009 年度修士論文
松本秀人

「観光と図書館に関するアンケート」調査結果

◎概要：
- 修士論文の補助的調査として、下記の通り、図書館に対して観光に関連する現状や意見などをアンケートで調査した。
- アンケートの主旨は、「観光と図書館の融合」というこれまで図書館界であまりなじみがない発想について、どのような感想や意見があるかについて確認することにある。
- 本来ならば、日本の全公共図書館にアンケートをすべきであったが、①「観光と図書館」というテーマでアンケートを行って、どの程度の反応が得られるか不明であった、②全館（約 3,000）調査をすると　費用や回収、問い合わせ対応、分析などに相当の負荷がかかる、ということなどから、補助的調査でもあり、発送先を絞った。

◎実施：　2009年5～6月(郵送による)

◎対象：　188館　うち戻り数145館(回収率77%)

発送先区分	発送数	戻り数	（備考）
１）北海道内全館	100	71	＊道立図書館以外　（札幌市を含む）
２）都道府県立	47	37	
３）政令指定都市	17	15	＊札幌市を除く
４）主な観光地の図書館	16	14	
５）活動が顕著な図書館	8	8	
計	188	145	回収率 77%

＊「主な観光地の図書館」（観光地内にある場合や隣接する場合を含む）
草津町、日光市、熱海市、伊勢市、奈良市、出雲市、別府市、由布市、沖縄市、高山市、下呂市、軽井沢町、鎌倉市、箱根町、大田市、屋久島町

＊「活動が顕著な図書館」（文献などで、活動ぶりがよく紹介される図書館）
浦安市立中央図書館、矢祭もったいない図書館、静岡市御幸町図書館、上田情報ライブラリー、山中湖情報創造館、斐川町立図書館、愛荘町立愛知川図書館、千代田区立千代田図書館

＜アンケート全体の分析＞

- 「観光と図書館」という比較的回答しにくいであろうと思われるテーマにもかかわらず、予想外に回収率が高かった。事前は「観光と図書館を関連づける主旨がよくわからない」あるいは「図書館は地域住民のためにあるので、観光客はあまり関係ない」という傾向の反応が多いかと予想していたが、どちらかというと否定的な反応は少なく、「サービスのひとつとしてあり得る」、あるいは「これから考えてみたいテーマのひとつである」といった肯定的な反応が多かった。
- ただし、回答やコメントの内容などからみると、地域によって図書館運営そのものや地域外利用者への対応などが様々であることが改めてうかがわれる。また「図書館」の位置づけや「観光」のとらえ方も図書館および地域によって様々であり、今後、「観光と図書館の融合」について実践がなされる場合は、地域の個々の事情や判断を十分ふまえることが必要であると感じた。
- また、「観光と図書館の融合」という発想ではないが、観光パンフを置いたり、観光関連の展示会を開くなどの取り組みは、あちこちの図書館ですでに行われていることもわかった。
- アンケート項目のうち「感想・意見」を求めるものについては、図書館としての公式見解である場合やアンケート回答者個人の感想である場合が混在しているので、分析にあたっては留意する必要がある。

［補記］
・各館のコメントは主旨を損なわない範囲で調整した。
・コメントには、「道内」（＝北海道内の図書館）、「都道府県」（＝都道府県立図書館）、「政令」（＝政令指定都市の図書館）、「観光地」（＝主な観光地の図書館）、「活動」（＝活動が顕著な図書館）の識別を付与した。
・コメント冒頭に「◎」（＝大いに）、「○」（＝ある程度）、「△」（＝あまり）、「×」（＝まったく）の識別マークを付与した。

［問１］ 貴館では、観光客が利用している様子がみられますか？

□よくみかける　11（ 7.6%）
□たまにみかける　71（49.0%）
□ほとんどみかけない　43（29.7%）
□わからない　18（12.4%）
無回答　2（ 1.4%）

【分析】
・「わからない」という回答が多いかと予想していたが、回答者の個人的な感想も含めて、観光客の利用についてなんらかの印象を得ている様子がうかがわれた。

［問２］ 貴館では、観光客の利用状況について、アンケートなどの実態調査をされたことがありますか？

□ない　144（99.3%）
□ある　0（ 0.0%）
無回答　1（ 0.7%）

【分析】
・アンケートの対象館では、観光客の利用状況に関する調査は実施されていなかった。
・なお、図書館の利用状況については、各館でアンケートなどによって調査されることがあり、それにより地域外からの利用状況はある程度把握することができる。「観光客」という限定的なものではないが、参考にはなると思われる。

［問３］ 以下について問い合わせはありますか？ （地域住民、地域外利用者を問わず）

１）貴館地域の観光に関する情報やイベント・祭りなどについて
□よくある　9（6.2%）
□ときどきある　74（51.0%）
□あまりない　62（42.8%）
□わからない　0（ 0.0%）
無回答　0（ 0.0%）

２）貴館地域の交通情報、宿泊施設、グルメスポットなどについて
□よくある　9（ 6.2%）
□ときどきある　69（47.6%）
□あまりない　67（46.2%）
□わからない　0（ 0.0%）
無回答　0（ 0.0%））

３）貴館地域の地域文化や地域の歴史、地域出身の偉人や有名人について
□よくある　65（44.8%）
□ときどきある　62（42.8%）
□あまりない　18（12.4%）
□わからない　0（ 0.0%）
無回答　0（ 0.0%）

【分析】
・１）や２）は、どちらかというと図書館向きではない質問なので「ときどき」が多いのは予想どおりであったが、「よくある」という件数も予想外に多かった。
・また、３）は図書館の得意とする項目なので、「よくある」という傾向が予想どおりみられた。

［問４］ 以下のサービスを実施しておられますか？

１）地域住民以外の利用者登録が可能
□はい　103(71.0%)
□いいえ　40(27.6%)
無回答　2(1.4%)

２）利用者登録をしていなくても、身分証明があればすぐに図書の貸出が可能
□はい　27(18.6%)
□いいえ　115(79.3%)
無回答　3(2.1%)

３）観光用パンフや地域のガイドマップなど観光系資料の展示や配布
□はい　107(73.8%)
□いいえ　37(25.5%)
無回答　1(0.7%)

４）地域の市民活動、NPO、ボランティアなどのポスターやパンフの展示や配布
□はい　112(77.2%)
□いいえ　31(21.4%)
無回答　2(1.4%)

【分析】
・１）は予想外に「はい」が多かった。ただし「地域外」といっても近隣自治体に限る場合もあるので、必ずしも観光客に便利とは限らない点に留意が必要である。また２）は、１）との関連もあり、例えば「誰でも利用者登録ができるので、実質的に“すぐに貸出が可能”と同じ」という館もある。
・３）と４）は予想外に「はい」が多く、地域に関する情報の周知活動に図書館が努力している印象を受けた。

［問５］ 貴館は視察を受けることがありますか？

□よくある　17(11.7%)
□時々ある　88(60.7%)
□ほとんどない　35(24.1%)
□まったくない　5(3.4%)
無回答　0(0.0%)

【分析】
・「よく」と「時々」を併せると 72.4%に達し、予想した以上に視察が行われているという結果であった。
・視察は交流のきっかけになるし、地域の観光資源を紹介したり、交通機関や宿泊施設の利用など副次的効果も期待できる。

［問６］ 地域資料の収集について、どのような方針でいらっしゃいますか？

□積極的に収集するようにしている　109(75.2%)
□ある程度、収集の努力をしている　33(22.8%)
□あまり地域資料の収集には力を入れていない　3(2.1%)
□ほとんど地域資料は収集していない　0(0.0%)
無回答　0(0.0%)

【分析】
・予想したとおり、どの館でも地域資料には関心が高い。ポイントは、せっかく図書館が努力して収集した地域資料について、その存在を地域住民や観光客に周知したり、ある

いは地域で有効に活用を進めていく点にあると思われる。

［問７］ 貴館は地域振興や地域の活性化に貢献していると思われますか？

□大いに思う　20（13.8%）
□ある程度思う　83（57.2%）
□あまり思わない　26（17.9%）
□わからない　16（11.0%）
無回答　0（ 0.0%）

［コメント］
・ボランティア活動や地域住民の様々な交流の場として利用されている。（同様多数）
・行政当局や各種団体・民間企業などへ様々な情報提供を行っている。（同様多数）
・自治体のまちおこし計画と連携して、図書館が活動の一端を担っている。（道内）
・市町村立図書館へのバックアップを行っている。（都道府県）
・地域資料の積極的な収集・保存により郷土文化に寄与している。（都道府県）
・地域のイベントに合わせた行事や企画展などを行っている。（政令）
・図書館は集客力のある施設であり、地域のにぎわいをうみだし、地域の活性化につながっている。（政令）
・観光客や地域に別荘を持っている人への対応を通して地域に親しみを持ってもらい、それにより来村回数が増えたり滞在日数が増えたりしている。（活発）
・地域史の編纂に協力したり、地域文化に関する展示や小冊子の発行をしている。（活発）
・子供の読書活動の推進や市民の生涯学習の場を提供している。（活発）

【分析】
・傾向としては「大いに」「ある程度」が多かった。しかし、質問が抽象的でなにをもって地域への貢献とするかは各館の判断にゆだねてしまったため、図書館自身でもその判断が難しかったと思われる。「わからない」も 16 館あった。

［問８］ 貴館の蔵書は、地域的な個性を持っていると思いますか？

□大いに持っている　55（37.9%）
□ある程度持っている　62（42.8%）
□あまり持っていない　25（17.2%）
□ほとんど持っていない　2（ 1.4%）
□わからない　1（ 0.7%）
無回答　0（ 0.0%）

【分析】
・「大いに」「ある程度」が多数で、自館の蔵書に地域的な個性があると考えている傾向がみられた。コメント欄でも、所蔵するコレクションなどが具体的にあげられていた。
・ポイントは、図書館側で思っている割合に比して、どれだけの利用者が図書館に地域性を感じているかという点である。図書館に地域性を感じている利用者であれば、観光で訪問した土地でも図書館を利用しようという発想が起こりやすくなると考えられる。

［問９］ 「図書館は観光や観光客と様々な関連がある」という主張を聞かれて、どのような感想を持たれますか？

◎大いに納得できる　28（19.3%）
○ある程度納得できる　100（69.0%）
△あまり納得できない　15（10.3%）
×まったく納得できない　1（ 0.7%）
無回答　1（ 0.7%）

［コメント］
○図書館は地域の情報拠点であるから、地域のことを知りたいと思う観光客への情報提供という意味では、関連があるのは当然だ。（同様多数）

（道内）
○地域の文化や歴史などを知るのに図書館は適している。
△図書館だけで観光客に対応するのではなく、各施設や関連機関と連携することが大切だ。

△関連はあると思うが、実際のところは、観光客が地域情報を入手するのは観光窓口や情報誌などが多いのではないか。

（都道府県）
○観光中のみならず､事前の問い合わせにより地域理解に役立つ資料を知ることができる。
◎地域文化や地域史などの情報はネットでは入手しづらいことも多いので、図書館を活用してもらいたい。
△「観光」は図書館に来館する多彩な目的のひとつに過ぎず、当館で特に観光を意識することはない。
○県の観光関連企画に対して情報提供などでサポートを行っており、そうした点で関連はある。
△ある程度納得できるが、訪問先で図書館に行こうとはふつう考えないのではないか。インターネットや市販のガイドブックの情報で済ませてしまうのではないか。
○行事や祭りなどがあると、観光客らしき人の利用が増えるので主張には同感する。
◎豊かな観光を行うにしても提供するにしても情報や資料が必要なので、当を得た主張と考える。
◎県の総合的な情報拠点として、観光関連情報にも目配りがなされるべきであり、観光ポータルとしての役割も担えると考えている。
○単なる観光の案内所ではなく、多くの資料や情報の集積がバックボーンとなっている点が活かせるのではないか。

（政令）
○駅の近くや市の中心部にある図書館においてはそうだと思う。
○旅行ガイドや旅行雑誌などの観光系資料のみならず、地域の文化や歴史などを深く掘り下げたい場合でも、図書館は様々な資料の提供ができる。
◎その土地にわざわざ足を運んだ観光客にとって「そこでしか体験できないもの」は不可欠。図書館に特色や個性をもたせて観光ルートのひとつに組み込むことができれば、地域活性化にもつながるし、観光客はさまざまな資料を閲覧することにより地域への興味もふくらむ。

（活発）
◎主張に同感。ところが観光ガイドに図書館が紹介されることはないし、観光マップに掲載されることもほとんどない。これは改善されるべきだ。

（観光地）
◎地域をより深く観光客に知ってもらうために、サービスの展開を考えたい。
○図書館は、観光情報センターや道の駅とならぶ地域情報発信拠点のひとつである。
◎図書館はそもそも「情報提供を行う施設」なので、観光客へ地域の情報を提供することは重要な任務であると考える。

【分析】
・否定的あるいは懐疑的な反応が多いかと予想していたが、肯定的な反応が多かった。コメントの全体的な傾向をまとめると、「図書館は地域の情報拠点だから、観光者へも地域情報や観光情報を提供するのは当然」となる。
・図書館員であれば、図書館が地域情報を保存・提供する機関であるということを熟知しているが、利用者が単に図書館を「本を借りる場所」としてしかとらえていないと、観光に関連して図書館を利用するという発想は起こりにくい。また地域住民にとっては、「図書館が地域情報の宝庫である」という認識を持つことにより、それが結果的にまちづくりや観光振興にもつながる可能性を持つ。

［問１０］ 「観光客も図書館の利用者として考えられるべきだ」という主張を聞かれて、どのような感想を持たれますか？

◎大いに賛成	33（22.8%）
○ある程度賛成	92（63.4%）
△あまり賛成できない	16（11.0%）
×まったく賛成できない	0（ 0.9%）
無回答	4（ 2.8%）

［コメント］
（道内）
○駅の近くに立地しているので、観光案内所的な役割も実際に行っている。
△貸出を含むすべてのサービスが、居住地域と同じレベルで受けられるというのは疑問で

ある。
△利用者として歓迎はするが、観光客への対応を高い優先順位におく状況ではない。
○テーマを絞った目的の観光であれば、資料館としての側面を図書館は有しているので、図書館の活用も有用だ。
○観光客を利用者として想定すると、設備の充実が必要だ（トイレなど）。
◎観光客が地域を訪れた時に、「まずは図書館に立ち寄ってみよう」と思ってもらえることを目指したい。
◎地域の情報を収集・提供することは図書館の役割の大切な部分であり、その情報の利用者には当然、観光客も含まれる。
△道の駅に隣接しているので、観光シーズンにはトイレの利用者が結構来る。不特定多数の人が自由に出入りする施設としては、危機管理面での対応も必要になる。
○立地にもよる。交通に不便な場所にあると観光客は訪問しにくいだろう。

（都道府県）
◎観光で訪れた地域の歴史を知るうえで､最も的確な情報を得ることができる施設として、もっと活用してもらうべきだと考える。
○立地条件などにおいて、地域住民と観光客の利便性が背反する場合もあると思う。
◎わざわざ他県から観光のために来県されたお客様に、情報提供することは図書館として当然のことと考える。
△当館の運営の柱のひとつに｢調査研究のための図書館」がある。当県について知っていただくことは大いに結構だし、観光客だからといって利用を拒むことはないが、特別扱いして特に便宜を図るつもりはない。
○情報サービスの対象者としてレファレンスサービスは行うが、貸出については県外住民へ拡大する予定はない。
○小規模な図書館の場合は、地域内の利用者が不便にならないように注意が必要だ。
◎訪問先の図書館で、観光客が文化や歴史などを調べることにより、観光体験が豊かなものになるのは喜ばしいことだが、どれくらいの観光客がそれを必要としているのか。またそういった利用者に図書館がどの程度対応できるのか等、課題は多い。
△図書館は誰にでも開かれた施設なので、利用は当然可能であるが、地域住民と同じサービスという訳にはいかない部分もある。
○当館は利用者登録に際して住所による制限を行っていないので､観光客でも登録が可能。図書館を利用したい人がいれば、誰でも利用者として対応すべきである。
◎観光客がその旅先の情報を効率的に得ようとする場合、その土地の図書館を活用するのは選択肢として当然ありうる。
◎当館ではネット環境を利用者に提供しているので、図書館でネット検索をするとか、ブログを旅行中にアップするという利用も可能である。

（政令）
○利用者登録に難はあるが、観光の際に立ち寄って地域資料や地方新聞を手にすることはあり得る。
○閲覧については大いに賛成であるが、館外貸し出しについてはクリアすべき問題が多いと考える。
◎観光客の「知る権利」を満たすためにも、いつでもどこでも図書館は利用して欲しい。また自分の居住地の図書館と比較することで､図書館のもつ様々な面を発見して欲しい。

（活発）
○利用登録や貸出などはできないが、地域の情報を提供することはできる。
◎郷土資料や地域資料などを収集・整理し、提供することは当館の重要な任務だが、そこで「観光客」という全く予備知識のない利用者を想定することによって、「どうしたらよりわかりやすい資料づくりができるか」という点でトレーニングにもなると考えている。
○他の地域の図書館を観光の際などに訪問することによって、地元の図書館と比較ができるので、その感想を地元の図書館が聞くことによってサービスが向上する機会となる。

（観光地）
○体験型観光など「団体ツアー」の対象として図書館をみた場合、蔵書、職員数、建物などの点で、集団での来館は物理的に対応が難しい。
○地域の詳細な情報について最大の拠点なので、役所や他の公的機関が休みの土日に効果が大きい。
○当地では短期・長期滞在者とも図書館を利用している現状があり、観光客にとって有用なサービス機関となっている。
◎当町には「歩み入るものにやすらぎを、去り行く人に幸せを」という町民憲章がある。この町民憲章を全町民がそれぞれの立場で実践しており、図書館も同じである。図書館が観光客を排除するような事態になれば､図書館の存続にもかかわる重大事に発展する。

【分析】
・この質問についても、事前に予想した以上に肯定的な反応が多かった。
・コメントの中で、「利用自体は歓迎するが、貸出には問題がある」という反応が目立った。観光客が図書館を利用すること自体は特に問題がないとしても、実務上は、貸出をはじめとする様々なサービスについて、「観光客（地域外利用者）にどのように対応するか」という判断は、各館ごとに異なってくるだろう。

［問１１］ 「広報や Web などを使って、図書館は地域の情報を積極的に発信していくべきだ」という主張について、どのような感想を持たれますか？

□大いに賛成	62（42.8%）
□ある程度賛成	67（46.2%）
□あまり賛成できない	11（ 7.6%）
□まったく賛成できない	0（ 0.0%）
無回答	5（ 3.4%）

［コメント］
（道内）
○図書館が地域の情報のすべてを把握して発信できるわけではないので、いろいろな所との連携が必要不可欠になると思う。
◎全く正論である。地域情報の発信は、地域の活性化や住民意識の向上にも寄与する。
○地域情報をそのまま発信するのではなく、それらの情報を収集し、図書館の資料により付加価値をつけていくことが重要だ。
△行政には広報を担当する部署がある他、ホームページも開設しており、地域のあらゆる情報は、一元的に収集・発信するほうが利用者にわかりやすい。
◎地域づくりの拠点として情報の収集・発信に努めるべき。
△図書館の業務ではない。
△地域の情報発信は他の部署で行っているので、図書館は自館に関する情報発信でよいと思う。
◎これからの利用増をはかるためにも、図書貸し出しだけではなく、いろいろな情報発信基地としての役割が大切だ。
○主張には賛成するが、現実問題として予算や人員、ノウハウが不足している。

（都道府県）
◎地域の情報拠点として位置づけられる図書館は、暮らしに役立つ情報を広範囲に発信することは図書館の使命と考える。
○現在もＨＰ上で、図書館所蔵の様々な貴重な資料を紹介している。また関係機関ともリンクしているし、デジタル画像ライブラリーなどのコンテンツも豊富に用意している。
○「地域の情報」にどのようなものが想定されるかにもよると考える。たとえば観光情報については専門の部署もあり、図書館としてどう関わるか、細かな検討が必要であろう。
◎当館では「文化と知的探求の拠点」として、生活に関連するテーマを決めて図書を展示したり、地域の活性化につながる文化・産業などについて、他の行政機関と連携して情報発信している。
○図書館はもともと情報や資料を提供する機関なので、その位置づけで行うなら意味がある。
○図書館の所有する資料を、デジタル化などによって有効活用することを考えたい。

（政令）
○チラシやパンフレットなどはある程度置いているが、地域情報の広報までは、あまり力を入れてやっていない。
○地域の歴史について、広報誌での情報発信を実際に行っている。
◎地域住民でも、図書館に来たことのない人はまだまだたくさんいる。広報活動は観光客のみならず、まず地域の人々に知ってもらう上でも積極的に行いたい。

（活発）
◎ほとんどの公共図書館では「広告宣伝費」を予算計上していないので、自治体が発行する「広報」や印刷製本費のかからない「Web」を使った情報発信を、もっと積極的に活用することには大賛成である。

（観光地）
○地域の情報を発信するというよりは、図書館の目的からいって、地域への支援情報をまず発信したい。地域への情報提供が観光へもつながると思う。
○図書館の特性を活かした情報発信は積極的に行っていくべきだ。

○情報を発信しなければ地域の発展は望めないので、必要だと考える。
○図書館が積極的に発信するというよりは、様々な部署や団体などと連携することが大切だと思う。

【分析】
・全体的には肯定的な意見が多かったが、他との連携のあり方や情報発信の内容などに検討が必要というコメントも多くみられた。
・図書館のみならず、パブリックセクターの広報のあり方が全般的に見直しを必要とされている。特に図書館は「地域の情報拠点」という位置づけにあるが、これまでの伝統的な業務の中にはインターネット関連の技術は含まれておらず、インターネットを利用した情報の受信や発信について、図書館もまだ手探り状態であることが、コメントなどからうかがわれた。

［問１２］ 貴館では､観光に直結した活動をなにかされていらっしゃいますか？

［コメント］
・36 館ほどからコメントがあり、まとめると「観光パンフの展示や地域紹介コーナーの設置」「地域の観光イベントに関連したイベントや展示の開催」「複合施設内にあるため、それらの施設と連携して観光客への対応」などが主であった。

【分析】
・「観光に直結した活動」という訊き方をしたため「特になし」という回答も多かったが、各館の真意としては「“直結した活動”と訊かれると特にはないが、資料やサービスを通して、観光客が利用した場合でも、いろいろと役だっている」と感じられたろうと推察する。

［問１３］ このアンケート、あるいは「観光と図書館」というテーマについて、なにかご意見やご感想がございましたら、ご自由にコメントをご記入ください。

［コメント］
（道内）
・図書館にとって郷土資料、地域資料の収集・提供は重要な柱である。観光振興のセクションとの連携を深めて、観光客へのサービス向上につなげたい。
・当館を起点とした観光散策コースの作成など、駅の隣という立地条件を活かした取り組みを行っていきたい。
・「旅先の図書館に行けば、その土地の文化がわかる」ということはすばらしいと思う。そのためには個性ある図書館運営やＰＲ活動が必要だ。
・立地条件などからみて、当館は観光客への直接的な関与より、市の観光課や観光協会の事業協力など、裏方的な観光支援に力を注ぐべきではないかと思う。
・観光振興に図書館との関係を視点に加えることはとても有意義であるし、図書館としても勉強していかなければと感じるが、観光地の地域差は大きいので多様なパターンを考える必要があるのではないか。
・観光客が資料の提供を図書館に求めることがあるとしても、有名観光地でさえ地域住民からの要望に比して副次的なものではないだろうか。図書館のコア活動は地域への奉仕であって、その一側面ととらえるべきである。
・図書館は地域住民のためのもので、特に観光や観光客のために整備しなくてもよいと思う。
・本館は、近隣に特に目立つ観光施設はないこともあって、観光客が立ち寄ることがほとんどない。情報発信とは別に、観光客が立ち寄るための方法を考えることも重要だと思う。
・観光に出かけた先でわからないことなどがあったとき、「とりあえず図書館に行ってきいてみよう」と思う人は多いと思う。期待に応えられる対応ができるように努めていきたい。
・このテーマは、各地域によって受け取り方に差があると思う。当市の場合は観光と結びつく傾向にはない。
・地域の情報発信基地としての図書館の役割は増大しており､今後も力を入れていきたい。

（都道府県）
・観光客へのサービスという部分だけに焦点をあてると､「どうして税負担のない人（地域住民でない人）にサービスするのか」という疑問がおこる。一方で、観光客にとって図書館は有用な資料や情報を揃えており、それが地域外の人を地域へ呼ぶことにつながるという点からみれば肯定的に捉えられると思う。

・観光と図書館の関係は、一般的にいって、①図書館が観光地にある、②図書館が観光ルートの通過点にある、②図書館自体が歴史的・文化的な建造物である、という場合でないと大きな議論になりにくいのではないか。
・図書館界で、これまであまり考えられてこなかった面白い視点だと思う。
・図書館は、観光客にとって必要な様々な情報を持っているので、「観光するときは必ず図書館によって情報を得たい」と思うような情報提供に努めたい。
・県立図書館と市町村立図書館とでは、観光に対する関わり方が異なる面もあるだろう。
・視点は興味深いが、図書館を観光に結びつける過程がイメージしにくい。
・県の商工観光労働部から郷土資料関連のレファレンス依頼があったり、地域情報を提供する機会は多い。観光資源の見直しのためにも、地域資料は重要な情報源といえる。観光客を対象とするだけでなく、観光や地域おこしに関わる行政・商工会・ガイドを行うボランティア・ＮＰＯ・ホテル業界などを視野に入れた「図書館の役割」が考えられるのではないか。
・通りいっぺんの観光の時代は終わり、地域同士の知的交流が求められている今、図書館は重要な観光資源と考える。
・新たな図書館機能を考える上で、重要なテーマだと考えている。利用者のニーズに応えるという従来型のサービスから、サービスそのものを開拓し、新たな利用者を獲得していくという観点で重要な視点である。

（政令）
・観光の現場では資料の保存が困難だと思われるので、観光を主な業務とする部署と図書館が資料の提供や保存で協力体制をとれるとよいと思う。
・図書館がその地域の観光の情報拠点のひとつになるといいと思う。

（活発）
・「市内観光客の半数以上は市民である」という調査を聞いたことがあり、市民サービスとの両立も十分可能と考える。
・これからの観光において必要不可欠となる「地域コンテンツ」をきちんと収集し、地元や観光客に提供できる公的機関として、図書館は重要な役割を持つ。「そこの図書館にしかない地域コンテンツ」に着目することが必要だ。
・「観光のために図書館がどうあるべきか」だけでなく「図書館のために観光がどうあるべきか」も考えるべき。

（観光地）
・観光客へのアピールや誘客は観光課がメインで行っているので、当館がすべきことは観光課への積極的支援である。あくまでも図書館の主たる目的は、地域住民のニーズに応えた蔵書構成を行うことである。
・県外からの来館者のうち一般観光客はごくまれであるし、道の駅や観光情報センターに置いてあるパンフレット以上のものを望む観光客が少ないのが現状。今後、こだわりのある観光を観光客が目指すようになれば、図書館が必要になってくるのではないだろうか。また、いずれ観光ガイドブックに図書館が掲載されるようになれば、観光の熟度も高まるだろう。
・国内外の観光客に多く来訪いただいている当市の状況を意識した図書館サービスを進めていければと、認識を新たにした。
・一般論として、観光地（特に温泉地）には図書館が設置されていないことが多く、あっても貧弱な場合が多いので改善が必要だという感想を持っている。
・観光と図書館を結びつける取り組みとして、まずは郷土資料の掘り起こしをすべきだ。
・このテーマは図書館だけでは成立しない。観光担当の部署や観光協会、旅館組合などとの連携や情報交換も大切な要素だ。例えば、観光協会が発行するガイドマップに図書館が掲載されている事例や、観光協会のＨＰに図書館のリンクが張ってある事例など、図書館と他機関が連携している事例の研究を進める必要がある。

【分析】
・予想していた以上に「これから考えてみたい」「興味深いテーマだ」という傾向の反応が多かった。
・「観光」も「図書館」も様々な点で変化が起こっており、これまでとは異なった発想が求められている。そこで「観光と図書館の融合」についても、その可能性を各図書館が検討することによって、図書館の新たなサービスを展開するためのヒントがもたらされると思われる。
・「観光と図書館」というなじみのないテーマによるアンケートに対して多くの返信が寄せられ、かつ否定的な反応が比較的少なかったことからわかるように、今回のアンケート全体を通しての印象としては、「図書館のあり方に、より柔軟な発想が必要だ」という図書館界全体の傾向を感じることができた。

（別紙３）

2009 年度修士論文
松本秀人

「観光に関連した活動に意欲的な図書館への追加アンケート」調査結果

◎概要： 図書館アンケート(別紙2)の結果および図書館のHPや各種報道などから、観光に関連した活動に意欲的な図書館に対して、より詳しい情報を得るため、追加のアンケートを行った。

◎実施： 2009年11月(郵送による)

◎対象： 高知県立図書館、鳥取県立図書館、草津町立図書館
（奈良県立図書情報館にも送付したが期日までに返送がなかった）

※アンケート全体についてのコメントは本論で述べた。この別紙では、各館の回答コメントを掲載する。各館のコメントは主旨を損なわない範囲で調整した。

問１：前回のアンケートおよび様々な報道などから、貴館では“観光”に関連した活動に意欲的であることを知りましたが、そもそもどのような主旨（あるいは意図）で、観光に着目をされていらっしゃるかについて、改めてお教えください。

【高知】
・高知県は財政状況が厳しく、県の収入を増やすために産業の振興が急務である。観光業は高知県の特長を生かせる重要な産業である。また財政状況が厳しいため、資料費をはじめ図書館への投資が非常に少ない。
・こうした状況をふまえ、図書館がその特長（利用者が多い、資料がある、全国的なネットワークがある）を生かし、観光にも貢献して、めぐりめぐって図書館への投資の原資を増やしたいと考えた。

【鳥取】
・図書館には、膨大な地域情報の蓄積、日常業務（資料の貸し借りや互いの所蔵する資料に対する複写依頼等）を通じて構築された強力なネットワーク、多くの利用者など、様々な特徴がある。観光展示はこの特徴を最大限に活用する企画として考え、図書館の受身的なイメージを打破することを狙って実施したものである。
・また、観光情報はゴールデンウィークや夏休み等の大型の休みに合わせて情報提供がしやすく、利用者の関心も高いこと、ポスターやパンフレット、チラシ等が比較的大量に手に入りやすく、同時に数箇所で実施して高いＰＲ効果が狙えるという利点もある

【草津】
・草津町は観光業で成り立っており、他の産業に従事する町民はきわめて少なく、間接的、直接的に観光に関わっている人がほとんどである。これは非常に珍しい形態を持った町である。観光客が来草し、消費を行うことにより町は存続が可能となる。
・当館も後づけで観光に着目したというより、町民生活のため、町の存続のためには観光客の受け入れや対応をしなければ、館の経営が成り立たたないという観点から自然と観光客の受け入れを行い、サービスに努めている。

問２：公共図書館は誰にでも広く開かれた施設である一方で、各自治体の財源や条例に基づき、“地域住民への奉仕が基本（つまり所在する自治体内の住民がサービスの基本的対象）**”という原則もあるかと思います。観光に関する活動を行ったり観光者の図書館利用を考慮する場合、奉仕対象のバランスについて、どのようにお考えでいらっしゃるか、お教えください。**

【高知】
・公の施設は、地方自治法上、本来利用制限はない。また観光客は、県外の人であっても高知県にお金をもたらしてくれる。行っている観光展示は「相互交換」なので、高知県民に対しても他地域の観光情報をひと味違った切り口から提供している。

【鳥取】
・県外の観光客の図書館利用については、現在本来の利用者への対応に支障が出る程利用が集中していないため、奉仕対象のバランスまで考慮する段階ではない。
・今後観光客の利用や見学が増え、本来の利用者への対応に支障が出る場合は館内で協議の上ガイドラインや注意事項等を整備し、本来の利用者にも観光客にも混乱が生じないようにする措置は必要であると思われる。

【草津】
・確かに、住民をないがしろにするわけにはいかない。しかし１でも回答した背景や、1920（大正９）年に開館した草津図書館の館則をみても、浴客（湯治客）への貸出を容認している（これは、かなり興味深いことである）。当時の図書館は学校に併設されていた。蔵書も少なくスペースも狭かったが、浴客に開放することによって、江戸時代にあった貸本屋の延長かもしれないが、当時の当局や関係者が娯楽を提供していたとみていいだろう。このような伝統があり、現在でも、観光客の利用や登録に関して異議は唱えらていない。（現在の条例では、観光客の利用を促進させるものは特にない。町民以外の登録は、館長が特別に認める場合と他の自治体と同じような規則になっている）
・また、観光地という性質上、住民の出入りが非常に頻繁であり、町民の意識も人を排除するような閉鎖性はなく、迎えいれるような風潮がある。

問３：これまでに貴館で実施された観光に関連する活動（周知やイベント、来館者への対応など）**のうち、主なものについて、その効果をどのように測定したり、評価をされているか、お教えください。**

【鳥取】
・新聞やニュースで取り上げられた頻度等や利用者の反応、パンフレットがどの位持って行かれたか等も宣伝効果の参考のひとつとしているが、具体的な効果の測定や評価をどのように行うかは今後の課題である。

【草津】
・観光に関する活動は、宮城県東松島市との観光チェンジ（2009.10）を行った。これは、観光協会や町観光課の協力が不可欠であった。
・さらに、図書館員が研修会講師として全国の図書館を廻っており、その際には必ず草津のパンフを配布しＰＲして、誘客している。その結果、周知先の図書館員が草津旅行に来た際は、必ず図書館に顔を出してくれるようになった。
・効果の検証や評価は行っていない。

問４：貴館の観光への様々な取り組みについて、行政当局や関係団体あるいは市民などから、これまでどのような反響・反応があったか、主なものをお教えください。

【高知】
・関係部局、機関などからは良い評価をいただいている。アンケートを読む限り、県民からの評価も予想以上に高いが、ごく一部の人からは「高知県なのに、なぜ他地域の情報か」という思いもあるようだ。

【鳥取】
・行政当局から
　－観光PRの一環となり、助かる。
　－観光展示と合わせて、県が「世界ジオパークネットワーク」への加盟を目指している「山陰海岸ジオパーク」に関する展示もお願いしたい。
・利用者から
　－鳥取大学で行った鳥取県の観光展示での留学生の反応：１カ所にこれだけ資料が集まっていると、見入ってしまう。境港市や大山に行ったことがないので帰国するまでには行ってみたい（平成２１年４月２３日　日本海新聞より）
　－津山市立図書館で鳥取の観光展示を設置した際に「昔ここの海岸に行ったことがある。鳥取の海はきれいだ」と話かけられた。

【草津】
・特にない。（当たり前だと認識されているのかもしれない）

問５：地域文化の理解や情報入手、あるいは交流などのために観光者が訪問先の図書館を利用する機会が増えるのは、図書館の活性化につながると思われますが、一方で、混雑を招いたり、マナーの低下、館内案内やレファレンス業務の多忙化なども懸念されます。この点について、どのようにお考えかお聞かせください。

【高知】
・観光客がとくにマナーが悪いということはない。また図書館がせっかく所蔵している地域資料を地元の人しか使わないのでは、宝の持ち腐れになってしまう。全国のみならず外国の方にも見ていただきたい。

【鳥取】
・予め図書館内で観光客の利用についてガイドラインや注意事項を定め、集団での利用や館内案内を希望の場合は事前申込みをしていただく、複写を大量に取る場合は数日掛かることもあることを了承いただく等の注意事項を配布したり、職員が直接注意を促すことによってある程度緩和されるものと思われる。
・現在も観光情報を求めて来館する観光客は時折見受けられ、本来の利用者と同様に対応していることから、一度に数名の観光客の利用であれば、問題ないものと思われる。

【草津】
・観光客や町外者を入れることが、業務多忙につながるとは考えていない。また、マナーの低下もない。町内、町外と分け、どちらの利用者が優れているという判断を下すこともない。そのような懸念をする図書館は観光サービスには不向きである。

※問６：「コミュニケーションモデル」に対する意見
　→この回答はコミュニケーションモデルの章で紹介したので省略する。

問７：今後、各地の図書館でも観光を意識した様々な取り組みが盛んになることが予想されますが、これまで先進的に活動をされてきたご経験をふまえ、その際の課題や、今後の展開の可能性などについてご意見があれば、ぜひお教えください。

【高知】
・今まで図書館の本来業務を損なわない範囲でやってきたが、期待が高まると負担も増え、かえってやりにくくなっている部分も生じている。手軽な方法を考えなければならない。そういうノウハウなどを大学からも提供していただけると力になる。

【鳥取】
・観光展示を設置する際の、相手方の図書館の理解及び協力（県立図書館では職員が相手方の他県図書館を訪れて展示を設置することもあり、その間館内業務が手薄になる、展示担当職員の業務が滞る等かなりの負担となっている）
・実際にどの程度観光客の誘致に貢献できたかについて、実施結果の検証が必要。
・現地の図書館に加え、観光協会や県・市の観光担当部署、博物館等の文化施設とも連携した効果的なキャンペーン展開を模索していく。

【草津】
・観光担当部署、団体との連携や情報交換が必要であり、特に人的なつながりを重視することが求められる。観光協会や役所で受けた観光者からの問い合わせで回答ができないものは、図書館に回すようなシステムを作ることが必要だし、逆に図書館で受けた質問で回答ができないものは積極的に関連部署に聞くことで図書館の存在感も増す。
・収集した郷土資料の活用と発信､知られざる郷土史の理解は司書にとって不可欠である。観光とは、観光者にとっては非日常の行動、行為であり、異世界への旅ともいえる。そのシチュエーションを演出するものとして、図書館での調査や司書への問い合わせが観光者から発信される。当然、回答にはガイドブックには無い、知的欲求を満足させるレベルのものが求められる。司書の雰囲気とその回答が観光者の満足度に反映する。
・司書や図書館職員はもっと自分の町のＰＲをすべきである。発信が足りないと思う。